
悪魔が奏でる悲愴曲(仮)

篠崎貴和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔が奏でる悲愴曲（仮）

【Nコード】

N4226V

【作者名】

篠崎貴和

【あらすじ】

僕、悪魔なんだってさ・・・信じられる？

僕にはまだ信じられない・・・。

だけでもう、引き返せない・・・

本作品には宗教的（主にキリスト教）な内容が随所に登場するため、
そういったものに嫌悪感を示される方はここで引き返すことをお勧
めします。

感想版はユーザー制限なしで募集中です。 皆さん、僕に^{アドバイス}勇気をくだ
さい。

設定資料（前書き）

文章力向上のために人物の特徴や世界観などは極力作中の随所で説明するように心がけてるのですが、中には資料があつた方が読みやすい方や、資料を見てからストーリー展開を予測して読み進める方もいるかと思い、ここにまとめさせていただきます。ネタバレの可能性がございますのでご注意を。

なお作品が進むうちにこの資料は逐次更新させていただきます。

設定資料

設定資料まとめ

【人物紹介】

里宮 蓮

男性。物語の開始時点で16歳の高校2年生。（孤児院に引き取られた1月6日が生年月日という扱いのため早生まれである。）

中肉中背でやや幼く見える端正な顔立ちをしている。

生まれつき色素が少なく、肌は白色人種のそれに近く、また頭髮および瞳の色も茶色と黄土色であった。

6歳の冬、琴木教会の牧師、里宮 和人が経営する孤児院に入っており、それまでの記憶は一切ない。そのため両親の顔も覚えておらず、他の孤児と比較して家族というものに対する執着はやや薄い。それでも”家族”に対する興味を思わせる発言が時折あることから、寂しいという感情はないものの全くの無関心というわけではない。事実孤児院の子供たちの世話をしていたのはもっぱら連で、その過程でほとんどの家事や料理を覚えた。

上記の牧師のことを”先生”と呼び慕っており、彼から学び得たことは多い。孤児院に入る以前の記憶を考えようとすると激しい頭痛に襲われるという体質を持っており、本編「体質」の回ではそのせいで気絶。その結果黄土色であった瞳の色が深紅に変色するという事態を招いている。趣味はフルート。

実は”悪魔の因子”を有した、誕生の瞬間から悪魔としての素質を持った存在。それだけであれば悪魔としての力は顕現しないのだが、孤児院に入る前両親からの激しい虐待を受けており、ある日押し入

つてきた強盗に目の前で両親を殺害される。そして崩壊した精神から無意識的に殺された両親の血肉を食らってしまう。この肉親に対する”食人行為”という罪が引き金となり、それから11年たった16歳の夏に徐々に悪魔としての兆候が表れるようになる。悪魔としての性質および宿命は 悲しみ。

里宮 和人

男性。67歳のプロテスタントはキリスト教会の牧師。蓮を引き取った孤児院の院長で名付け親でもある。若いころはカトリックに属しエクソシストとして世界中に派遣され、悪魔殲滅を旨として貪欲なまでに悪魔祓いを繰り返していたが、ある事件を境にぱったりと辞め、カトリックに対する離縁状を送っている。その事件は作中では深く触れていないがその過程で、天使も悪魔も果ては神でさえも世界を動かす理”ロゴスの奴隷であり、秩序を保つためにそれぞれ役割を担っている。その区分は古代の人間による主観でしかないという思想に行きつく。安直に言えば正や美を司るものは天使であり、死や穢れを司るのは悪魔であるというもの。ロゴスは世界の均衡を保つシステムでしかないのに対して、精霊たちには各々感情が存在し、己が責務や宿命に苦しむ者もいるという。

この思想は「大切な記憶？」で蓮に明かしており、以後この世界観で物語は展開される。シスター”ルチアに悪魔祓いの儀式で殺されそうになっていた蓮を救うために振り下ろされた短剣の前に飛び出し、絶命した。

四条 由香

女性。蓮と同じ学校同じクラスに通う17歳。蓮は牧師と会った冬、1月6日が誕生日となっているため、4月22日が誕生日である彼女の方が一つ年上。小柄な体格と明るく公正な性格から校内でも人気が高い。髪型は黒く長い髪を後ろで一つにまとめポニーテールにしている。高校一年のころ朝の教室で眠る蓮を見て以来片思いをしており、自身を顧みようとしない蓮をとて心配している。蓮が”先生”以外で関係を持つことに否定的にならない数少ない人物の一人。

四条 香奈恵

女性。物語の開始時点で36歳。由香の母親。由香が10歳のころに夫である四条 竜真を亡くしており、以来女手一つで由香を育ててきた。性格は優しくおっとりしているところがあるものの、家族のこと、最近では蓮のことになるとやや感情的な側面も見せる。本作では由香を正規のヒロインとしていくつもりだが、今後の展開ではもしかするかもしれないキャラクター。蓮が心を開く数少ない人物の一人。

ルチア・メンダシアン

女性。名前の由来は実在したシスターとラテン語で『嘘』を意味するメンダシアンからきている。カトリック所属のエクソシスト。

上層部からの任で悪魔たる蓮の抹殺を目的として琴木教会にやってきた。落ち着いた美しい女性ではあるが冷たい空気を常にまとっている。悪魔に対する異常なまでの憎悪とキリスト至上主義の狂信者蓮に聖水を浴びせその抹殺を遂行しようと試みるものの一歩のところで里宮牧師の妨害に会い、彼のみを刺殺してから失踪。実は過去に悪魔との因縁があるという。

時東 当夜

11年前、蓮を琴木教会に連れて行った市役所の役員。過去には里宮牧師と悪魔祓いをしていたカトリック司祭で、牧師の思想に共感しカトリックを離脱した（「大切な記憶？」より）。一時は市役所の役員を務めていたが退職し、教皇庁の動向を探るために隣町である端谷町の三都教会で再び神父をしている（「時東神父？」が蓮との正式な初対面）。尊敬の対象であった里宮牧師に対しては丁寧な口調だが、それ以外の人物に対しては一貫して威圧的な態度である。かつての牧師と同等にカルトや悪魔研究には知識が広い。

設定資料（後書き）

本作は読者の方の”深読み”を歓迎しています。例えば時刻の表記一つにしても7時という時間の「7」という数字に吉的なイメージを持って幸せの予兆として読んでみたり、繰り返されている描写の中に何かのメタファーを読み取ったり。

小説家としてはそんな読者の予想をいかに意外な形で裏切れるかというのが最大の課題であり楽しみである、と僕は理解していますので。是非感想ページなどに「こんな風に読んでみた」という内容でもお送りくだされば、僕としてはこれほどうれしいことはありません。

prelude

「悪魔が奏でる悲愴曲（仮）」

♪プロローグ♪

雨が、降っていた。

語りの始まりとしては、あまりに陳腐で

もっとまともな言葉を探したいものだが、

どうしようもないほどに、ただ雨が。

雨が、降っていた。

町はかすんで、白く濁った道の先。

透明な叫びがアスファルトをたたき、

甘いとも、苦いとも言えぬ匂いが

鼻を衝く。

そこに ■ ■ ■ は傘をさして立っていた。

ふっ、と

影がとおる。

傘を傾け、そつと視界を広げる。

地面から立ち上る白煙の先に

もうひとりの悪魔^{ほく}を

見た気がした。

「日常？」（前書き）

本格的に一話目です。本作品は長編としては僕の処女作になるので、内容展開などに至らぬ点が多くあるかと思いますが、ここから多くを学んでいこうと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

「日常？」

第一部 日常？

「行つてきます…」

その言葉への返答はない。

言葉の主は着ているブレザーの制服から高校生であることがわかる。彼の年齢、16歳の割には幼く見える端正な顔立ちとそれに合わせたかのような華奢な体格。だいたい165センチといったところだろうか。色素が薄いのか肌はアジア系の黄色というよりは白色人種に近い印象を受ける。ショートにした髪も同様に光にすかせばはっきりわかるほどに茶色く、穏やかに開かれた目には黄土色の瞳がよく映えていた。

安値のアパートの一室。いつもと同じように起き、朝食を作って食べる。食器を片付ければ身支度をし、学生の職場たる学校へ向かう準備を。居間の小振りなソファに座ってしばらくテレビを見た後、誰もいない部屋を後にして、登校。

これがこの少年、里宮蓮の決まりきった朝の光景だった。蓮が高校へ進学し、今の一人暮らしを始めた当初からこの一連の動作にはほとんどよどみがなかった。というのも彼は幼い頃から孤児院で養われていた周囲の子供たちの世話をするなど一般的な家事には早くから慣れていたからだ。

6歳の冬、雪の中に立つおぼろげな記憶が彼のはじまりだった。地域の市役所の職員に連れられ小さな教会が営む孤児院に入ったのを覚えている。比較的寛容なプロテスタント派教会の牧師であり、自分の名前さえ覚えていなかった蓮の名付け親となった里宮牧師は蓮を始めとする子供たちに信仰を強要することなく、ただただ善意と人間的な道徳心で持つて迎えてくれた。

既に孤児院に入っていた先輩とも言える子供たちの中で彼は特に年齢的なことを意識せずに毎日を送っていた。むしろ年上の子供たちよりもはるかに落ち着いた性格であった彼が院長である牧師の手伝いをしつつまとめて面倒を見ていたほどである。

そんな彼も高校への進学を決定すると同時に孤児院を出た。

今まで十分にお世話になった里宮牧師に対して、これ以上迷惑はかけられないという思いからだった。当の牧師はむしろ自分が手を離せないときに代わって子供たちの面倒を見てくれる蓮に常々感謝していたし、一人暮らしの提案を持ちかけられたときも気にせずここにいなくてもかまわないと伝えたのだが、蓮は結局は留めを押し切って、家賃の安いアパートでの生活を始めた。

とはいえ教会からはそれほど遠い距離でもなく、孤児院を出て1年以上経つが数か月に一度は顔を合わせている。

彼の通う学校はアパートから歩いて数分の駅から更に二駅分離れた場所にある公立の高校である。学費が安い割に進学率は良好で、地元の学生は基本的にこの学校を目指すため例年倍率が高いのが特

徴だ。ただ、特に常人以上の知能を有している訳ではない蓮でもそれなりの努力だけで受かったということを考えると天才の集まりという訳ではないらしい。

ともあれ彼が送る学校生活は何ら特筆することはないものだった。

親がいないために三者面談などのイベントは必然的にないものの、本人と教師の二者による話し合いなどで解決してきた。クラスメイトとの関係も決して悪くはない。他人とコミュニケーションをとることにやや消極的ではあるものの、話しかければしっかりと答えるし、その際の柔和な笑みも相まって親友といえる存在はできないまでも、孤立するようなことはなかった。

ごく普通の高校生、それが自他ともに認める彼の印象だ。

「おはよう、里宮」

「ああ、おはよう」

教室に入り席に着くまでに何人かのクラスメイトから挨拶を受ける。

一番窓際の最後尾が彼の席だった。静かに席に着き、鞆を机の横にかけるとその日の授業に使う教科書類を机の中に移す。それから先日購入した文庫本を取り出して読み始めた。

普段は本など読まずに机に突っ伏して授業の開始まで眠っていることが多い。若干偏頭痛の気がある彼は極力静かに行動することになっているのだ。

「おはよう。珍しいね、里宮君が朝から本を読んでるなんて」

その声に蓮は顔をあげる。窓から差し込む光で蓮の黄土色の瞳がより薄く、金色に輝いて見えた。

ふいに声をかけてきた、小柄ながらも快活な印象を受ける少女は四条由香だ。

クラスの中でも中心的なグループの一員であり、誰にでも分け隔てのない性格は男女問わずとても好感がもてるものだった。きれいな黒髪をポニーテールにした髪型も彼女の雰囲気とよく合っており、部活に属していない割に上級生や下級生からも人気がある。

一学年の頃も同じクラスで、今と同じように一人でいたところに最初に声をかけてきたのも彼女だったことを思い出しながら蓮は答える。

「うん、少し立ち寄った本屋で気になってね。その場で買ったやつただけ」

「なかなかよかったって訳ね」

蓮は一人暮らしをしているせいもあってかあまり衝動買いじみたことはしない。

月ごとに買うものはしっかりとした計画のもとに管理されているのだ。そんな中で唯一の例外が本だった。一期一会とは違うけど、買

つてしまいたくなるような魅力を感じたときは買っようにしているのである。

それでも家の本棚は未だにすかすかなことから、いかに彼の物欲が薄いかが伺い知れる。

それから他愛もない話をした後彼女と別れ、読書を再開する。

いつもと何らかわらない朝の風景だった。

「今日の授業もこれで終わり、か」

6限目終了のチャイムを聞きながらぼんやりとつぶやく。

まもなく教師による号令と諸連絡があつて下校時間となった。ここから部活動などの時間が始まるのだが、蓮は部活に所属していない、俗にいう帰宅部である。

さすがに部活をするほど時間にも金銭的にも余裕がないのだ。家賃は生活保護による受給と里宮牧師に押し切られる形で振り込まれる分に頼ってはいるが、食費や学業面に必要なもの、日用品をその中から捻出しなければならない。そうなると部活をやっている余裕はなかった。

もし許されるなら彼が持つ数少ない趣味のひとつであるフルートの技術がいかなく発揮されたであろうに。

まあこの話は追々するとして。

いつものように落ち着いた足取りで昇降口へと向かう途中、胸元にかけてシャツの中に隠すように入れてある銀製の十字架に意識がすっと移る。

（一月ぶりに先生に顔を見せにいいのかな）

蓮は自分の父親ともいうべき恩人の笑顔を思い浮かべていた。

「日常？」（後書き）

始まりました。はじめてしまいました。責任もって最後まで終わらせたいと思います。

「日常？」（前書き）

まだしばらくは穏やかな展開が続きます。

「日常？」

第二部 日常？

通い慣れた通学路を通り、普通電車で駅まで帰ってきた蓮はいつもとは反対の方向へと歩き出した。今向かっているのは彼が中学を卒業するまで暮らしていた孤児院を運営している《こてい琴木教会》である。

蓮が暮らしている琴木町のやや外れに位置するプロテスタント教会で、彼が先生と呼んでいるのはその教会担当牧師である里宮 和人だ。67歳と年齢的に老熟した彼は信仰に厚く毎日の祈りを絶やさないのだが、孤児院にやってくる子供たちに無理な洗礼や信仰を勧めたりはしない。さらに温和で優しく、時に厳しいもののそこにはつきりと感じる愛情ゆえに子供たちからも慕われている。

そしてそれは蓮も例外ではなかった。

孤児院に連れてこられた当初は馴染めなかったものの、牧師の人間性に触れてからは打ち解けた。それ以降も他者と接するのが苦手ではあるものの徐々に努力できるようにもなった。

教会の主日礼拝（日曜日の朝に行われる礼拝）に参加する人の数を見る限りそれほど集まっているように見えないことから、孤児院経営の出費は献金だけでなく先生がほかでも働いているのだろうと考えた蓮は、8歳の頃から自主的に先生がいない間の業務の手伝いや孤児たちの面倒を見るなどしていた。

ちなみにこの教会は小高い丘の上にあり、坂を上らなくてはならな

い。蓮も高校への進学後、何度かこの坂を上って様子を見に来ている。

「ふう、変わらないな。全然」

一年そこいらでこんな地方の風景など変わるはずもない。
当然のことをつぶやきながら教会の前に立つ。

蓮の黄土色の瞳に映るその教会は他のキリスト教会と比べるとどこか質素で、それとわかるのは尖った屋根の上に掲げられた十字架だけだった。それでも管理者である牧師の手入れもあって、それらのイメージは”清潔”へと擦り替わっている。教会の外壁にそって花壇に植えられた色とりどりの紫陽花を横目で見ながら中に入ると、外から見る以上に大きく感じる礼拝堂がひろがる。

この時間帯ほかの信者はおらず、今の所蓮一人のようだった。

(…少し待とうかな)

礼拝用の席に着いて軽く天井を見上げ、小さく息をつく。

この教会兼孤児院で暮らしていた頃は彼が子供たちの世話だけでなく教会の掃除や整理なども手伝っていた。そのため蓮がいたころよりも少し埃がたまったように見える祭壇に気がついた。蓮がここを出たことで逆に先生に負担をかけていたのかもしれない、と一瞬暗い不安になったが隣の牧師室から出てきた以前と何ら変わらない先生の顔を見てすぐに気を取り直した。

前回の訪問から三ヶ月になる。

「おひさしぶりです、先生」

「おお、蓮じゃないか。前に来てくれた時からもうどれぐらいになるのかな」

蓮を見ると、もともと穏やかな顔に更に柔和な笑みが浮かぶ。

それを見て蓮もまた安堵の笑みを浮かべた。

「どうだい、学校での生活は。無理はしていないかい？何か変わったことは？」

心配げに問いかける牧師に蓮は

「何ら変わりありませんよ。先生こそ御無理はなされていませんか」

「まだまだ元気だよ。君が出て行った後何人かの子供たちも引き取り手が見つかったね。ちよつとばかり寂しくはなったが、以前ほど忙しくはない。何より私はまだ若いよ」

蓮は自分がかつて面倒を見ていた子供たちに無事引き取り手が見つかったことに再び安堵した。

この孤児院に入ってくる子供たちは様々な理由で親をなくし、また親と一緒にいられないでいる。捨て子もいれば事故や事件に巻き込まれて親を失ったものもいる。親戚の中に引き取り手がいればそちらに行くこともできるのだが、今の世の中それさえままならないのが現実だ。そのためここに預けられた当初はみんな酷い顔をしてい

た。

そんな中、蓮は記憶そのものがないので、捨てられたという感覚はもとより親の存在を知らない。

そのため辛いという感情はなく、何故ここにいるのかわからないといった気持ちでここに入ってきたのを記憶している。

それでも今では目の前にいる先生こと里宮牧師が親のようなものだと思っているし、一応名字も里宮牧師のものからもらっている。下の蓮という名前も先生に付けてもらったものだ。

「それはなによりですね。 あんない子たちですから、幸せになっ
てほしいですね。 …では先生の顔も見れたことだしそろそろ帰りま
すね。今日は先生に会えてよかったです。」

「こちらこそわざわざ来てくれてありがとう。 またいつでもおいで。
下の子供たちも会いたがっているよ」

「ええ、ではまたお邪魔させてもらいます」

互いの近況報告のようなものと簡単な挨拶をして別れる。

少し短すぎるように感じるかもしれないが彼らにとってはこれが一
番普通の、それでいて最良の長さなのだ。 無駄に長く話さずに必要
最低限の報告だけを伝える。 しかしそんなわずかな時間の中でも互
いの表情を見ることが大切なことを伝えることは十分にできる。

血は繋がっていないながらも本当の親子のような形が、そこにはあ
った。

蓮は来たときより幾分軽い足取りで自宅であるアパートへの帰り道を歩きはじめる。

（次にいくときは何かお土産でも持っていこうかな）
ぼんやりと空を見ながらそんなことを考えていた。

梅雨の季節とは思えない、鮮やかな夕焼けが広がっていた。

彼が住んでいる琴木町は地方都市とはいえ景観の良さなどから比較的にぎやかな街で、国内での歴史も長い中央商店街や最近になつてできたデパートがうまい釣り合いを持って町の物流を担っていた。蓮も家で自分で食事を作るときの食材はこの二つを多分に利用している。そのためデパートの方はそうでもないが、商店街の中では若干の顔見知りもできるわけで

「お？おかえり蓮君！今日もなんか買ってくかい？」

「どうも滝さん。今はまだ食材が余ってるのでまた今度ですね」

このように声をかけられる。

他人とのコミュニケーションをとることに消極的な蓮はやや気が引ける思いだったが、この人たちもそれを理解しているのでしつこ

く話しかけたりはしない。

いまどきの若者の中では蓮は間違いなく好青年だったし、彼の境遇もある。そういう意味で商店街の連中も彼には気を配っていた。今のアパートの大家も蓮のことをよく知っており、その好意で通常の家賃よりも少し低い値段で住まわしてもらっているのだ。まだ孤児院にいたころから里宮牧師に連れられこの商店街で買い物をしていた蓮を知っている人々は可能な限り蓮のことを気にかけるようにしていた。

といつても大体のことは自分でこなしてしまおうとする蓮に、彼らができることは蓮の性格を考えて、むやみに近づかない。これに限ったことだったのだが。

「日常？」（後書き）

遅れましたがこの作品を読んいただきましたありがとうございます。文法や語法の参考にもさせていたただきたいので、アドバイスなんかもあれば感想を使ってご指摘よろしくお願いします。

「体質」

第三部 体質

二十分程かけて教会から帰りアパートの自室に戻ると、蓮は荷物を寝室に置き学生服から軽装に着替え、夕食を作り始めた。冷蔵庫を開いて食材を選び、その場でレシピを組み立て調理に移る。その手つきに無駄なく流れるようで、まさに主夫そのものだ。

彼が初めて料理を作ったのはやはり孤児院にいた頃だった。先生がいない間に下の子供たち（年上の子供にも与えていたが）のために簡単な軽食を作れるようにと台所に立つてみたのだ。だが、さすがに最初からうまくいくはずがない。結果できたのは食べれないとまではないかないまでも、お世辞にも美味とはいえない代物だった。それからしばしば料理に励み、ついには独学で現在の域にたどり着いたのだ。

本人は謙遜して否定するだろうが店に出しても通用する味である、というのは某牧師の弁である。

「さてと、こんなもんかな」

ちなみに蓮自身は特に味覚にこだわりがある訳ではない。味覚そのものは鋭いのだが、自分だけが食べる分にはあまり気にしない。もともと料理を始めたのも子供たちに食べさせるためであつたし、一人暮らしの今となつてはその技術を発揮することもほとんどなかった。

よって出来上がるのは質素かつ平凡な夕食。
ともあれ夕食の準備ができ、皿に盛られた料理―白米と味噌汁、和風ハンバーグにサラダ―をキッチンと一体になっているダイニングの食卓に運ぶ。

「いただきます…」

行儀よく手を合わせると黙々と食べ始める。ここでの生活が始まってからは夕食は一人でとるのが当たり前だった。それほど大きくない食卓のはずなのに、やけに大きく見えた蓮はそつと苦笑する。

（寂しさなんて感じてないはずなんだけどな…）

その思いに嘘はない。寂しい訳ではないのだ。

ただ昔から一人でいるとき、誰かといるときに関わらず、ふつつつとわいてくる感情があった。それが何なのか一時期真面目に考えたこともあったのだが結局答えは出なかった。

夕食も終わり入浴もすませた蓮はしばらくリビングのソファに座って本を読んだ。3人がけの右端に座り、静かに本を読む。

時計の針が動く音と、時折蓮がページをめくる音だけが部屋の中に響いた。

「ふ、うう…」

疲れた目を抑え、少し落ち着いてから視界をあげる。時計の針が1時をさしているのに気づき、しおりを挟んで本を閉じた。

この年頃の少年としてはやや早めの就寝時間だが、別に疲れやすい

などということはなく、普段することがないために早寝をしているうちに習慣になっていただけである。翌日の授業の準備をすると寝室のベッドに潜り込んだ。

深夜1時半、ベッドの上で蓮はまだ天上を見つめていた。

通常であればこの時間には既に眠りにについているはずなのに今日はなぜか眠れない。妙に頭が冴え渡り、いい加減寝ようと意識する程に五感が鋭くなっていく。カーテンを閉め切り真っ暗にすることで視覚は遮ったものの、かえって聴覚が研ぎ澄まされる。アパートの壁さえも通り抜けて、誰かの泣き声が聞こえた気がした。

（このままじゃ眠れないな）

あまり意識してしまうのも問題だと考えた蓮は、ちょっと位ならと散歩に出ることにした。

下は黒のジーンズに上はアンダーシャツと薄手の白いワイシャツを羽織り、鍵を閉めたことを確認して外に出る。胸元には相変わらず銀製の十字架がかかっている。風はない筈なのに遠くの音さえ聞こえそうな、不思議な夜だった。

所々切れている街灯を何となしに見ながらふらふらと歩く。蓮が住んでいるアパートから少し行くと中程度の大きさの公園があった。昼間であれば近所の子供たちと親御でにぎわうこの公園も深夜という時間帯ではしんと静まり返っている。蓮は公園の隅にあるベンチに腰掛けると真ん中の広場を挟んで向こう側にあるブランコを見ながら物思いに耽る。

どこまでも落ち着いた顔で考えていたのはかつて自分が面倒を見、引き取られていったという孤児たちのこと。

（本当によかったな。あんなに元気な子たちなんだから、きつとうまくやっていけるだろう。新しい家族のところで、つらい思い出なんて忘れてしまうような、すてきな日々を。…家族かあ。僕もあのままあそこにいれば、誰かが引き取って…くれたのかなあ……）

彼が深い思考の海に取り込まれることは決して珍しいことではない。人がいるときはどこまでも穏やかで樂觀的に見えるのだが、一人になるとしばしば考えすぎてしまう傾向があるようだ。ときにそれは哲学的な領域に踏み込み始め、ぐるぐると終わらない連鎖が続いてしまうこともあった。ただこの程度であれば思春期の少年少女にもよくあることだろう。

しかしこの少年、里宮 蓮にとってそれは必ずと言っていいほど一つの特別な帰結をもたらす。
それは、

「…っ。 たあ…」

激しい頭痛である。

知恵熱の類とは違う。涙がにじんでくる程に激しい痛みは彼が長く深い思考から戻ってくる際に必ずと言っていいほど起きた。

発症したのは中学1年の頃、孤児の一人を引き取りたいという夫婦が現れ、蓮より5つ年下の男の子を養子として受け取りにきたときだった。

彼らが院を去った後、閉じた玄関の扉の前で蓮は、自分の親がいたとしたらどんな人だったのだろう、今頃何をしていたのだろうと延々考えていた。そして先生から声をかけられふと現実に戻った瞬間、尋常ではない痛みが彼を襲い膝をついた。慌て駆け寄る先生に返答することもできずに彼の意識はあっさり闇に落ちた。

次に起きたときは病院の白いベッドの上だった。蓮が意識を失った後、先生が急いで救急車を呼び、県立の病院へ搬送されたのだ。検査結果に異常はなく、おそらく発作的なもので特に心配はいらないだろうということでした。その間蓮を慕っていた孤児院の児童たちは蓮の様子を見て大泣きし、蓮が3日後無事退院し院に戻った後もしばらく彼の近くを離れなかったことだけはいい思い出である。

とにかく彼にとって必要以上に深部に入る思考、特に家族や親の存在に関するものはできるだけ避けるべきものだったのだ。今では気絶するようなことはないものの無意識に考えてしまったときには今のように痛みに襲われる。

その間ほかの動作をすることはできないが、とりあえず落ち着くまで待とう、とどこか安易に考えていた。

しかし、

「つつつ!？」

想定に反して痛みは強くなっていく。

これまでどんなに激しい痛みでもそこから徐々に引いていったのだ。更に強くなるなど初めての事態である。

「つつ… たつ! あ…!」

悲鳴さえあげられない。ベンチから滑り落ちる体を支えようと片手で地面を掴む。

もう一方の手で頭を押さえようとするが、もはや痛みは頭にとどまらず血液を流れて全身にわたっていく。

意識を保ってられない。

シャツの胸元から十字架をつないだ鎖が流れる。

初めてこの体質を自覚したときと同じ、しかしより強烈な形で視界が闇に染まっていく。

黒に飲まれるその寸前、誰かが名前を呼んでいる気がした。

「……里宮君……！」

今の自分の、今の名前を……
……

「四条親子」

第四部 四条親子

（声が・聞こえる。少し高いな・・・、女の人？人数は・・・2人。妙に甘い匂いだな。体が暖かい・・・・。すごく、楽だ）

ここまで考えて蓮はゆっくり目を開いた。

見たことのない、病院とはまた違う清潔感を感じさせる白い天井だ。薄く開いた目を動かして周りを見える。天井と同じ白い壁紙、閉じられた淡い緑色の花柄が入ったカーテン、木目の美しい大きなタンスがあつてその横にきれいに整頓された学習机。そして部屋の蛍光灯は適度な明かりで、自分が寝ているベッドの横には2人の女性、うち1人はよく知った顔だった。

「四条・・・さん・・・？」

そう、クラスメイトの四条由香であつた。

何故ここにいるのか。というよりこの場合は自分は今どこにいるのか。え、今何時？など程よく混乱してきた蓮に由香が

「大丈夫？痛みは落ち着いた？」

と心配げに問う。

痛み？ああ、そうかあの体質がでたんだな、とぼんやり理解を始める。

すると由香の隣に立っていた女性が

「ほんとに大丈夫かしら？由香が友達が倒れてるなんて言うものだから驚いたわよ。急いでうちまで運んだのだけど」

と説明を加える。

おかげで蓮にも何となくだが事態を把握することができた。

体質による頭痛で意識を失った自分を四条由香とその友人？が偶然見つけ、わざわざ家まで運んでくれたというところだろう。と、こんなこと考える前にお世話になったなら礼を言わなければ。

「ありがとうございます。わざわざすみませんでした。おかげさまでだいぶ落ち着いたみたいです」

ベッドから上半身を起こし深く頭を下げて謝意を示す。

「い、いいよ、別に。友達なんだしさ」

「いえいえ、何もなくてよかったわ」

と由香は少し照れたように、もう一人は安心したように蓮に返す。

「ああ、まだ紹介してなかったよね。これが私のお母さんの四条香奈恵よ」

「自分のママをこれなんて言わないの。由香の母親の四条 香奈恵です。よろしくね、里宮君」

この言葉に蓮は表情を崩さないまでも驚いた。

由香と同じ長い黒髪をストレートにおろした姿はとても一児の母には見えない。落ち着いた雰囲気のため多少年上らしくは見えるが、二卵性の双子だといっても何人かは信じてしまっただろう。

「というか四条さんってこの辺に住んでたんだね。全然知らなかったよ」

「そう？私は知ってたよ？里宮君がこっちの駅から登校してるの」

「え？そうだったの」

なんで由香がそんなことを知っていたのか。ああ、駅からということとは駅で登校する蓮を見かけたということだろう。うん、納得。そんなことを考えていると蓮の目にベッドの台の上におかれたピンクのかわいらしい時計が入ってきた。時刻は2時半。思いつきり真夜中であることに気付き、取り繕うように聞いた。

「あの、こんな時間になんで外にいらっしゃったんですか？」

蓮は自分が言えた立場でないことをすっかり忘れたまま四条親子に問う。

「それはこっちの台詞。里宮君こそあんなところで何してたの？ちなみに私はお母さんとコンビ二に買い物に行ってただけよ。炭酸が

足りなくてね」

「未成年の子がこんな時間に一人で外を出歩いてるなんて感心しないわね」

やぶ蛇だった、と蓮は後悔した。

由香の言う理由なら納得できるが自分の外出の理由はいくく散歩でしかない。どう話したところでまともな言い訳にはならないし、四条母のいうようにいくら何でも未成年が一人で深夜徘徊はまずいだろう。しかも発作による頭痛も見られている。必死になって誤摩化そうとするがうまく頭が回らない。結局口から出たのは、

「ちょっと散歩しました」

どこまでも情けなく正直な回答だった。

「はあ、何となくそんな気はしてたけどね……。ここまで正直に言われるとは」

「こんな時間の散歩なんて危ないからやめましょうね。私たちが通ったからよかったものの・・・」

思いっきりあきれたという顔をする娘と至って真面目にたしなめる母親。

高校二年生になってここまで子供扱いされるようなことになるとは思わなかった蓮はほんの少しだけ動揺するものの、すぐに落ち着きを取り戻す。

「どうしても眠れなくて。ほら今日はちょっと暑いですし、頭を冷やそうかなと」

なんとか復帰してきた頭の回転をフルに活用して言い訳をする。

それでもまだ寝ぼけたような印象は振り払えない。

「それにしても散歩はないでしょ。まあ、仕方ないか。親は？こんな時間だし連絡した方がいいんじゃない？」

由香があきれた顔のままで家への連絡を提案した。

しかし蓮にはその親がいない。学校で自分が孤児院育ちであることを知っているのは一部の教師だけでクラスメイトにはいつさい明かしていない。余計な関心も、同情で生まれる関係も避けたかったからだ。いずれにせよ今はどうやってこの親子に心配をかけないで、つまり親がいないことを秘密にしたまま現状を脱するかが先だ。瞬時に考えた結果、

「親は今外出しているので家にはいません。なので連絡はいりませんよ」

と返した。

これなら矛盾もないし、納得してもらえらるだろう。

「そうなの？それなら仕方ないわね。ところで親御さんはいつごろ帰ってくるのかしら？」

なんとか納得はしてもらえたようだが、香奈恵から新たな質問が飛

び出す。

存在しない親が帰ってくる時間など分かるはずもないがここは適当に、

「明後日ぐらいじゃないでしょうか」

と答えておく。

今日は金曜日なので親（嘘）は日曜日に帰ってくるという計算だ。

「なら心配ないわね」

由香が壁にかけられた動物のカレンダーを見ながら言う。

それを見てようやく終わったと思い、そろそろ帰ろうとベッドから出ようとした蓮だったがここで香奈恵から予想外の一言が出た。

「こんな遅い時間だし今日は泊まっていきなさいな。親御さんも明後日まで戻らないなら明日・・・もう今日ね。一日うちにいればいいわよ」

「・・・・・・・・え?・・・」

ここにきてまさかの四条家一日ツアーにご招待されてしまったのだ。

「平穩、そして変化」(前書き)

自惚れかもしれませんが、もし何度かのぞいて面白いと思ってくださった方がいれば、是非感想なんかください。

「平穩、そして変化」

第五部 平穩、そして変化

香奈恵からの提案の後しばらくは断ろうとしたものの、香奈恵とそれから意外にも由香からの強い説得により、とりあえず朝までだけお世話になることとなった。時刻はもう三時を回っている。今から必要以上にごねてはそれはそれでこの親子に迷惑をかけてしまうと思ったのも提案を飲んだ理由の一つ、というか最大の理由であった。

今、蓮は四条家の客間で客人用の敷き布団を借りて横になっていた。クラスメイトとはいえ他人の家だからもっと居心地が悪いものかと思えば、意外にも落ち着ける。無意識に手を心臓の上にやれば、ひんやりと冷えた十字架の感触が伝わってきた。何かを確かめるようにそれをぎゅつと握る。

すると先ほどの激痛の残滓も奇麗になくなり、ようやく蓮は眠りについた。

朝だろうか。

未だに閉じられたまぶたの裾がわずかに白んでいる気がする。

しかし心地よい倦怠感に包まれ、もうしばらく動きたくないと蓮は珍しく考えていた。

ふだん蓮は規則正しい生活を心がけているため、時計を見なくても分かるがこの時間帯には普通に起きているし、寝起きはいい方なのでもっと寝ていたいなんて思うことはなかったのだ。

「さ・みやく……………」

先ほどから聞こえてくる小さな声とわずかな振動が蓮の意識を引っ張り上げようとしている。

が、いずれの刺激も今の彼にはむしろ子守唄とゆりかご。完全な眠りとまではいかないものの、そのまどろみを破るにはいたらない。

「……………れ・くん……………」

というかこの刺激を与えている人物は本当に蓮を起こす気があるのだろうか。

あまりに刺激が弱すぎる。これでは更なる眠りに誘っているようなものだ。

とはいえ徐々に頭が自分を起こそうとする人物がいるという事態の認識を始め、四条家で朝までだけいることになったことを思い出す。同時に起きなくてはという義務感がわいてくる。

「里宮君、里宮君、朝だつてば、おーい」

日頃の生活の賜物だろうか。意識し始めてからすぐに体に感覚が戻り、すつと目を開く。

そこには予想通り由香がいた。

「あ、おはよう。もうおきれる？」

「おはよう。ああ、ごめんねわざわざ起こしてもらっちゃって」

「いいよ。……のねが・も・たし・・／／」

「ごめん聞こえなかった」

「な、なんでもないよ！じゃあ朝ご飯で来てるからこつち来て」

由香が何かつぶやいていた気がしたが、本人が何でもないというのならそうなのだろう。特に気にすることもなく蓮は由香の後をついていく。

昨夜は暗くてほとんど見えなかったが四条家は客間の和室以外は洋風のそれなりに大きな家だった。雑多な家具はなく奇麗に整頓されているところからこの住人の性格が伺える。蓮の家も整理されていると言えばそうなのだが、あれはほとんどものがないからの一言に集約できる。その点この家には嫌みにならない程度に調度品がある。

蓮が寝泊まりした客間がある廊下の先にダイニングルームがあった。

キッチンと一体のものではあるが、蓮のアパートとは比較にならない程広い。ここもまたしっかりと整理されており、見ていて清々しい。ちなみに由香の部屋は二階にある。

「あら、おはよう。よく眠れたかしら？」

「おはようございます。ええおかげさまで」

すでに出来上がった朝食を食卓に並べ終え、椅子に座って待っていた香奈恵と挨拶を交わす。

横にいた由香に促され蓮も椅子に座る。

蓮はここで皿の上に盛られた見るからにおいしそうな朝食を見た。メニューはオーソドックスに、クロワッサンとスクランブルエッグ、ベーコン、トマトサラダとミルクだ。パンとミルクは普通の市販品にしても、スクランブルエッグとベーコン、トマトサラダは喫茶店のモーニングを頼めば出てきそうな程だ。

「いただきます」

香奈恵の作った朝食を口に運ぶ蓮。スクランブルエッグはふわふわで甘く、ベーコンの塩加減も絶妙だった。

「どうかしら？お口に合えばいいのだけど」

「そんな、お口に合えばなんてとんでもない。とてもおいしいです」

先生と慕っている里宮牧師のそれにどこか似ている柔和な笑みを浮かべて蓮は香奈恵の料理をほめた。それを見て香奈恵もうれしそうに目を細めて小さく、ありがとう、と言う。

それからしばらく雑談をしながらも朝食が進んでいく。香奈恵が小さい頃の由香の失敗談を語って由香をからかったり、それを蓮がなだめて由香が余計に赤くなったり。

蓮はこのとき既にこの家に由香の父親をまだ見ていないことに気づいていたが、自身の出自も手伝って言葉にはしなかった。偶然ここにいなかっただけにしても、そうでない場合にしても関係ない。もちろん投げやりな意味じゃなく。

蓮はこの暖かい空気を感じながら孤児院を出て以来初めて、食事という栄養摂取の行為を楽しいと思えた。

そんな風に時間は進み、そろそろすべての皿が空になるつかというとき由香が

「そついえば里宮君、カラーコンタクトでもつけ始めた？」

と言う。

「え？つけてないけど、なんで？」

「だって少し前まで綺麗な黄土色してたのに、今は真っ赤じゃん。それはそれで綺麗だけど・・・／＼」

自分の瞳が赤い？

ちなみに由香の頬もよく見れば少し赤くなっている。

と、そんなことよりも目のことだ。確かに蓮は色素が薄いため瞳の色はほかと異なり透き通るような黄土色をしていた。しかし、たった一夜にして赤くなるものか？訳が分からない、というそぶりを見せる蓮に由香は自室へ戻り小さな手鏡を渡した。それを受け取り、覗き込んだ蓮は絶句する。そこには

「な、なんで・・・」

ワインのように紅く染まった自身の瞳があった。

「病院？」

第六部 病院？

「他はおかしくないんだけどな・・・」

自身の身に訪れた急な変化に驚いたのも束の間、すぐに平静を取り戻す蓮。手鏡をそつと由香に返し思案気に首をひねる。

「いきなり目の色が変色するなんて変よね。・・・もしかして何かの病気！？だとしたら病院にいかなきゃ！」

「落ち着きなさい、由香。里宮君？どこか具合が悪いところはないのね？痛みを感じる程じゃなくても何かいつもと違う感じがするとか」

一方で当事者以上に慌て始める由香を香奈恵が落ち着け、蓮に尋ねる。流石はこの中での最年長と言ったところだろうか。

「いえ、ありません。普通にものも見えますし、全然変わりはないんです。なんでこんなになっただろ・・・」

由香も蓮の落ち着きようを見て徐々に熱も冷めたようだが、それでもやはり心配なことには変わらないようで、ある提案をする。

「しんどいしんどくないじゃなくて、瞳の変色なんてやっぱり気に

なるわよ。病院には行ったほうがいいわ、今すぐに」

「それもそうね。こういうことは早期発見が大切だって言うし。・
・里宮君、今から行きましょう」

自分を置いてけぼりで病院に行くことが決定している現状に再び慌てる蓮。

このまま病院に行くことが決定すれば自分に両親がいないことがばれてしまう。どうにか打開する術を探そうとするが、そうこうしている間に香奈恵が病院に連絡を取ってしまったていた。

「あ、すみません。はい、診察の予約をしたいのですが。ええ、名前は里宮 蓮、男の子です、はい。あ年齢ですか？ちょっと待ってください。里宮君、あなたの生年月日と年齢は？」

「え、1月6日で16ですけど・・・」

「すみません、1月6日の16歳です。症状ですか？昨日まで何もなかったようなんですけど・・・」

こうなってしまうてはもう止められない。蓮は大きくため息をついて腹をくくるのだった。

蓮たち三人は県立の病院に来ていた。かつて蓮が倒れたときに運

び込まれたのと同じ病院である。

二十六科の診療部と五つの中央部、さらに充実した入院棟をもつ大医院で、県外からの委託診療も受け付けているほどに信頼性が高く、琴木町からもそう離れていない。

今回は香奈恵が運転する車で一度蓮のアパートへ戻り、保険証や必要書類、ある程度の金銭を鞆に入れてから来た。四条親子は車の中で待っていたので彼の家に明らかに蓮以外が住んでいないことを見られることはなかったものの、これから行く場所のことを考えると時間の問題だろう。

診察は昼間の時間帯だったのでほかの患者も多いのだが、運良く患者の一人が予約をキャンセルしたので空いた時間を取ることができたのだ。中に入ると大きなロビーが広がっており、右手に長いカウンターがある。

蓮と香奈恵と由香はカウンターの受付嬢に予約を取っていたことを伝える。

「はい、里宮 蓮様ですね。健康保険証などはお持ちですか」

「あ、はい。これです」

女性に自身の医療券、保険証とさらにもう一枚の用紙を渡す。

蓮が渡した用紙は生活保護受給者証だ。

「里宮」という姓を名乗っているものの、先生と正式な養子関係を結んでいる訳ではない彼は、未だに孤児の扱いとして生活保護が適用されている。この辺の手続きは彼を孤児院に預けにきた市役所の職員が済ませてくれたらしい。

由香は気がつかなかったようだが、隣にいた香奈恵が蓮の渡した書

類を見て反応したのを感じて蓮は心の中でため息をついた。

「では前回の診察からずいぶん経過していますので各再検査がございます。こちら紙面の指示に従って院内の検査所で検査を受けてください。それから、今回は総合内科と眼科での検診ですので、記載された時間には各部の待合室でお待ちください」

「大丈夫？かなりたくさん採血されてたみたいけど」

「その辺は平気だけど、検査の数がね。もうくたくただよ」

しばらく院内を回り血液検査やレントゲンなどを撮った蓮は普段あまり崩さない表情をやや疲れたものに変え、四条親子と食堂で昼

食をとっていた。由香は血液検査の際蓮の静脈からスピッツ7本の血液が抜かれるのを見て顔を青くしていた以外は特に問題なく蓮と雑談して笑っていた。恐らく蓮の不安を和らげようという思いやりからなのだろうが、その実由香の方がずっと不安を感じており、蓮と話することでそれを紛らわせていたことに本人は気づいていない。

そして香奈恵といえば

（あれって生活保護証よね。ということは里宮君は……。気になるけど由香のいるところじゃお互い話し辛いわよね・・・）
由香と話をしながら時折静かに微笑む蓮を見ながら難しい顔をしていた。

こういった他人のことに必要以上に踏み込むのはいけないことだと分かっているし、もし何かあったとしても蓮とは娘のクラスメイトとして友好な関係を築けると思っている。

だが心のどこかで蓮を放っておいてはいけない、事情を確認して、必要なら自分が手を差し伸べなければと強い義務感のようなものを香奈恵は感じていた。

四条家の大黒柱であった由香の父、四条竜真は今から7年前に他界している。まだ由香が10歳の頃だった。死因は急性アルコール

中毒による心臓発作。家族思いでとても優しい、立派な父親であったが職場でのストレスなどから、アルコールを過剰に摂取していたらしい。それでも泥酔状態での暴力行為などはなく妻と娘には笑顔を見せ続けた。

結果、誰も彼の心の傷を知らぬままに彼は限界を迎えてしまったのだ。

香奈恵は夫の苦しみに気づかなかった自分を深く責め、由香に涙ながらに謝った。幾度も幾度も、その喉がかれるほどに。

しかしそんな香奈恵を慰めたのは娘の由香だった。

ママは絶対悪くない。そしてきっと誰も悪くなかったの、と言って。

後に二人で竜真の墓参りにも行き、ようやく平穏を取り戻した。

それから女手一つで娘を育ててきた香奈恵の目には蓮の今の笑顔がかつての夫のそれと重なって見えた。もちろん顔も違えば笑い方も違う。それでも今は亡き夫よりも下手をすれば上手に笑う蓮を見て確かな違和感を感じていた。

そう、本当の笑顔なら「上手に」なんて感じるものだろうか。

蓮自身もまたこの親子の考えていることを薄々感じ取っていた。それ故に由香には笑顔を見せ、香奈恵には必要最低限の会話だけをし、話題が深いところへ入っていくのを避けるという対処をとっていたのだ。

会ったばかりではあるが香奈恵の性格はなんとなくわかる。間違いなく自分が受付に提示した書類は見られ、その意味も知られているはずだ。とすればおそらく由香がいることに憚って話題にしないだけだろう。

それぞれの思いが交わりながら時間は過ぎていく。
午後からは各科での検診だ。

「病院？」

第七部 病院？

午後の診察のために総合内科の待合室に向かう。この病院は全体で六階建築になっており、各フロアに診療科が分配されてる。総合内科は二階、眼科は三階である。

「何もなければいいね・・・」

「まあ大丈夫じゃないかな。目の色ぐらい花粉症でも変わるし」

「はあ、どうしてそんな樂觀思考になるのか分からないわ。もう少し自分の体に気を使いなさい」

蓮の間の抜けた発言に香奈恵があきれる。

それも当然のこと、花粉症で目が赤くなるのは充血で白目部分だけのはずだ。蓮のように瞳の部分が変色するのは虹彩毛様体炎である場合や虹彩異色症、いわゆるオッドアイというものだが、これは基本的に先天性である場合が多い。それにオッドアイなどは左右の目の色の違いなどが挙げられるため、今回のように左右ともに変色、それも一夜でというのは考えにくい。

待合室に着くと三人はしばらく静かに待機する。由香は土曜日ということでまだ少し眠いのか目をこすり、蓮と香奈恵は普通に座って目の前のドアを見ている。

「一時からの診察を予約されている里宮さん、里宮 蓮さん。総合内科六番の診察室へどうぞ」

蓮が立ち上がり、香奈恵と由香に少し待つように頼む。二人とも心配なのかやや顔を顰めていたがなんとかうなずいてくれた。

診察室に入るものの前の患者の診察がまだ残っているのか診察室とはカーテンで仕切られた、入ってすぐのボックスで上着を脱いで待つ。そうしていると待合室とをつなぐ、先ほど蓮が通ったドアから香奈恵が現れる。

「香奈恵さん？どうかしたんですか？」

「流石に未成年に全部任せきりはダメでしょう？一応大人同伴じゃないと……それに……」

「……？どうしたんですか？」

「今はいいのだけど、里宮君……あとで帰ってから少し聞きたいことがあるの……いいかしら？」

蓮は顔ではいつもの柔和な笑みを浮かべて無条件に香奈恵の頼みを許諾したが、実際は予想通りといったところだった。

ここに来るまでどのようなようにして誤摩化そうかと考えていた蓮だったが、一方で彼女らになら簡単な説明ぐらいしておいても構わないかもしれないと思ったのだ。無理に話をそらしてこの場を逃げる事ができて、彼女たちの性格からしていつまでもそのままではいられないだろう。それに親がいないと言っても今まで何ら不自由な生

活を送ってきたわけでもないのだから、妙な憐憫もなく終わるだろうと考えた。

「はい、お待たせしました。里宮さん、おはいりください。」

診察室から先の患者が出てくると同時に看護師の声がする。二人は椅子から立ち上がると診察室に入った。

担当医は比較的若い男性で、眼鏡をかけて蓮のカルテから目を離さないまま蓮と香奈恵に着席を促す。二人が簡易ベッドの近くにあった椅子を寄せてきて座るとようやく医者がカルテから顔を上げて二人に向き直った。

「こんにちは、私が総合内科での担当医になる吉田です。え、と里宮さんですね？」

「あ、はい。お願いします」

簡単な挨拶を交わすとまず検査結果の話から始まる。

「一応すぐに結果の出る検査に関しては情報もらったんだけど、はつきり言って特に異常はありません。肌の色素数が通常よりも少ないですが、あくまで身体特徴の域を出ませんし、頭髪の方も同様です。血液中の成分を確認しても変わったことは見られませんしむしろ健康そのものと言っていいです。やせ形ではあるようですが体脂肪率が少なく筋は十分に発達していますし。瞳が変色したというこ

とですが、現段階では分かりませんね」

「そうですか。これから先時間の経過とともに変化することはありますか？」

「それも、今は何とも。とにかく定期的な検査を持って様子を見るしかありませんね」

蓮が質問するもののやはり現状では分からないらしい。その後次の診察の予約を入れ、眼科での待合室へ向かうこととなった。

「やっぱり特に問題はないと思うんですけど・・・」

蓮自身としては体のことをあまり気にしていないのもそうだが、診察などで出費がかさむことの方がずっと心配なようだ。17歳とはいえこれまで金銭の支出に関してはそれなりにしっかりと管理してきた。明確な不具合も出ていない状態で通院費など払いたくはない。

「こつというのは何かあってからじゃ遅いのよ？もしあなたが心配じゃないとしても、私や由香が心配するの。それで納得してくれない？」

香奈恵が診察室前のボックスで蓮に話しかける。次の患者はまだ来ていないらしい。蓮は香奈恵が妙な偽善心で言っているのではないことを空気で感じ取ったため、黙って頷く。待合室に戻ると由香が

心配そうな顔つきで待っていた。

「ど、どうだった？・・たいしたこと、なかったよね？」

「んん、まだ分かんないって。でも特別な症状もないし至って健康だつてさ」

それを聞いてひとまず安心する由香。三人は眼科での診察を受けるために三階へ上がった。

先ほどと同じように待合室に入り時間を待つ。五分ほど経ったところで名前を呼ばれ、今度は最初から香奈恵が同伴する。由香も着いていきたそうにしていたが、流石に三人全員ではいるのは難しいと分かったのか、後でちゃんと報告することを言付けて待つことになる。

ここでも先ほどとほとんど変わらないやり取りがなされたのである。詳細は省くが、唯一分かったのは蓮の虹彩の赤化は、アルビノなどにある下の血管が透けて見えることによるものではなく、虹彩部分そのものが赤くなっていることが分かった程度であった。

すべての診察を終了し由香たちの家に帰ったのは三時を回ったころ

だった。

「まだ分からないけど、今の所何ともなくてよかったね」

「うん。今のところというか多分問題ないと思うんだけど」

蓮が由香と話しているとそれまで静かだった香奈恵が声をかける。

「……里宮君、ちょっといいかしら。由香は自分の部屋にagg
つてくれる？」

蓮はその言葉に静かに首肯する。

「なんで？……お母さん、もしかしてホントは何かあったの！
？」

「そうじゃないわよ。大丈夫それに関しては嘘なんてついてないか
ら」

由香がやや焦り気味に聞くのに対し、香奈恵は落ち着いた様子で優
しく返す。それを見て由香もなんとか納得してくれたらしく（それ
でも渋々だが）自分の部屋に引き上げていった。階段を上る音が途
切れ、ドアを閉じる音が聞こえると香奈恵は小さく笑って

「あの子っいたらあなたのことがよほど心配なのね」

と楽しそうに言う。

どこか含むところがあるように聞こえるのは気のせいではないだろ
う。

「ですね。ただのクラスメイトなのに、ここまで気にかけてくれる
なんて優しい人です。あ、その点で言えばもちろん香奈恵さんもで

すが」

さにげなく香奈恵のこともあげている当りが蓮らしいというか。いずれにせよ、香奈恵の言葉の奥に含まれたものに気づくことはできなかつたらしい。そんな蓮に香奈恵は少し苦笑を禁じ得なかつた。

「クスッ」

「？」

香奈恵が小さく笑い、蓮が小首を傾げる。その様子が年の割にあまりに幼く見えて、香奈恵はもう一度小さく笑うと表情を切り替える。

その目は真剣で、しかし不安気に揺れていた。

蓮もまた香奈恵の表情が変わったのを見て、気を落ち着ける。

そして香奈恵の目が小さく震えているのを感じ、あえて自分から話を始めることにした。

「大丈夫ですよ。分かってます。香奈恵さんの話って、これのことですよね？」

蓮は病院のファイルに挟んだままの「生活保護証」を机の上に出した。

「病院？」（後書き）

小説書き始めて気づいたことっていっぱいあるんですが、中でも難しいのって時間の割り振りじゃないかなって今思ってます。始まっただけなのに世界観の説明につながる文書や、キャラクターのプロフィを不自然にならない程度に文中に滑り込ませるとどうしても時間経過が遅くなって。。。。

「語り手、聞き手 その心？」（前書き）

小説情報編集でユーザー以外の方からの感想も無制限で受け付けられるようにしてみました。しばらくはこの方針でやっていこうと思うのでよろしくお願いします。

「語り手、聞き手　その心？」

第八部　語り手、聞き手　その心？

蓮が机の上に書面を出す。香奈恵はそれに触れることはしないままに、しばらく眺め、

「里宮君、もしかしてあなたは・・・」

「・・・・ええ、僕には家族がいません。両親も、兄弟も、親戚も」

この言葉に香奈恵は息をのむ。

否、この言葉自体はある程度想像がついていた。もちろんそうであつてほしくないとは思っていたものの、今こうして蓮の口から語られた事実そのものに対して驚くことはなかった。

むしろ香奈恵はこれを語ったときの蓮の表情に凍り付いたのだ。

蓮は笑っていた。本当に、何ともなさそうに。

ただ、過去の思い出を懐かしむように。

「……詳しく、教えてくれる？」

「わかりました。ちよつと長くなるかもしれませんが……」

一息ついてから、蓮は語り始めた。幼少の頃の記憶がなく親の顔も知らないこと。気づけば教会に付属している孤児院に送られ、中学の卒業までそこにいたこと。ほかの孤児の面倒を見ていたが全然苦ではなく楽しささえ感じていたこと。そして自分の名前の由来。今は一人で暮らしていること。

「そう、だったのね……」

つい数日前、倒れた蓮の首に十字架のペンダントがかかっていたのを思い出し、そこにふと目をやる。相も変わらずそれは銀色の優しい輝きを放っていた。

自分に家族がないという事実を、彼はただ淡々と、むしろ孤児院にいた頃のことには楽しそうに話していた。彼が”先生”をどれだけ慕っているか、子供たちをどれだけ大切にしていたかが分かる。

同時に香奈恵は自分の選択が間違ったものではなかったことを悟った。確かに彼の人生は必ずしも辛いことだけではなかったかもしれない。孤児院の院長は優れた人物のようで、孤児としては恵まれているだろう。だが親の顔を知らないというのは大きい。更に話を聞いてみれば”先生”は良い人であることには違いないが、蓮のことを過大評価していたように思われる。小さいながらも大人びて、何でもそつなくこなす蓮に”先生自身”が頼っていたのではないだろう

か。成長したとはいえ今もまだ16歳の少年だ。ほかの孤児の世話を蓮に任せて、出て行くこともしばしばだったという。蓮はそれを信頼してくれていると嬉しそうに語っていたが。

（この子はまだ、一人にしておいちゃダメなんだわ・・・）

このまま彼を放っておいては悲しいことを悲しいと思えない、歪んだ存在になってしまう。香奈恵はそう思った。彼の性格だ、他人との付き合いはうまくいくだろう。むしろ他人から好感を持たれるようになる。しかしそれでは彼自身が薄れていってしまう。もう既に彼は自分がつけた仮面に気づくことなく、それを自分の素顔であると疑っていない。何も知らずに、死ぬまで悲しみから疎外されたままでいられるのはある意味、楽だ。

しかしそこに里宮 蓮はいない。

それはもはや、人間ではない。

香奈恵はのどを圧迫する苦く重いものを必死に飲み込み、蓮を真
つすぐ見つめる。この時香奈恵は図らずも亡き夫の姿を目の前の少
年に重ねていた。いつそ聞かなければこんな思いはしないで済んだ
かもしれない。だが、この苦しさもまた人間である証^{あかし}なのだ。目の
前の少年にもそれを教えてあげなければ、闇の中から救い上げなけ
れば。

悲しみによって。

気づけば香奈恵は蓮を強く抱きしめていた。
蓮が感じることのなかった痛みを香奈恵が受け止め、蓮に返すよう
に。

そしてつぎやくように、はっきりと話す。

「今までがんばったわね。あなたは気づいていないかもしれない、そんなことないって言うかもしれない。でもあなたが、誰がなんと言おうと、あなたはずっと頑張ってきたの。それは誰にもはできないこと。あなた自身の強さよ。．．．でもあなたはまだ子供。今まで甘えられなかった分、甘えていいのよ。大人でも時には人に頼ったり、甘えたり．．．弱さを見せるときが必要なの。それは、そうしてもいいとかじゃ．．．なくて、そうしなきゃダメなほどに。．．．だから頼ってちょうだい。私でも．．．由香でもいい．．．自分の弱さを、ただ捨てるだけに．．．しないで．．．。他人だけじゃなくて、自分の悲しみも、知って．．．」

話しながら、香奈恵は泣いていた。最後の方は言葉に詰まりながらも吐き出すように。

蓮は香奈恵の言葉に戸惑いながらも、その流れるような黒い髪をそつと撫でる。

「なんで、あなたが泣くんですか？僕には、分かりません。なにも悲しいことなんてないでしょう？」

「悲しいの。悲しいのよ。あなたが見ることでできなかった涙を、私が見せてあげるの。あなたにもきつといつか分かるわ」

「そうでしょうか。．．．まだ、分かりません．．．。僕には．．．泣けません．．．。」

「今はそうでも、これから私が教えてあげる。由香も教えてくれる。きつと、あなたの周りのみんなが、教えてくれる・・・」

それだけ言つと香奈恵はすつと蓮を離し、自分の涙を拭う。目の周りは赤いまま、だけど満面の笑顔で

「よろしくね、里宮君」

「・・・・・・・・・・・・・よろしく、お願いします」

蓮がずっと他人との間に引いてきた線、かつて里宮牧師だけが超えることのできた線。

線というにはあまりに強固で、深い溝のようだったその内側に。

新しい一人が加わった瞬間だった。

「語り手、聞き手 その心？」（後書き）

由香より先に香奈恵さんに明かしてしまいました。次回はもう少し和やかな内容になると思います。

「語り手、聞き手　その心？」

第九部　語り手、聞き手　その心？

大方話し終えた蓮と香奈恵は紅茶の準備をしながら、由香にも明かすべきか考えていた。

「こればかりは私には何も言えないわね。・・・里宮君次第だと思うわ」

「そうですね。僕は別にかまわないと思ってるんですよ。香奈恵さんの娘だからってわけじゃないけど、四条さんなら大丈夫かなって・・・何一つ根拠はないんですけどね」

最後はおどけたように言う蓮。
香奈恵もそれに応じて小さく笑う。

「さて、紅茶も入ったわ。由香を呼んで頂戴。それから話しましょう」

「わかりました」

蓮は由香を呼ぶためにリビングのドアを開ける。しかし、

「・・・わわわっ!？」

「・・・なにしてるのさ」

ドアを開けてすぐのところに尻をついて倒れている由香を発見。
あからさまに「のぞいてました」という風情だ。

「・・・はあ」

とりあえず説明の時間が省けたかな、と思う蓮だった。

「うめんなさい・・・」

しよぼくれる由香。一度は自室に戻ったものの蓮のことが気になっ

ていてもたつてもいられず、こっそり降りて来てしまったらしい。
彼女が聞いていたのは蓮の過去の途中からだった。

「里宮君が一人暮らししてたっていうのは知ってたんだけど……」

「そうだったの、由香？」

「僕、学校では誰にも言っていなかったはずなんだけど……」

蓮の家庭事情を知っているのは学校でも一部の教師に限られているはずだ。なのに何故？

「一部の生徒の間で噂になってたのよ。里宮君が独り暮らししてるって。で、気になって話を聞いてたら、住んでる家が私の家の近くだっけことも分かったの」

「それであるとき、僕のこの辺に住んでるって知ってたのか……」

目立たないはずの自分がなぜ噂になっているのかということはさておき。

蓮が公園で倒れてしまった後、この家に連れてこられたとき、由香の部屋で考えていたことを思い出す。

「ホントにごめんね、里宮君」

「んん、いいよ。四条さんにも話すつもりだったんだし。気にしないで、ね？」

蓮は由香を安心させるように、いつもの穏やかな微笑みを見せる。

「・・・ありがとう」

由香は顔を少し赤らめ、少し逡巡すると、

突如、蓮に抱きついた。

「ええっ!？」

先ほど香奈恵に抱きつかれたときは場の雰囲気もあつてか、戸惑いながらも表情は落ち着いていた蓮だったが、今回は完全に不意打ちだ。由香から感じる女の子らしい甘い匂いと柔らかさに、さすがの蓮も目に見えて動揺する。

「私も、里宮君に教えてあげるから。・・・楽しいことも、悲しいことも、いっぱい。まだ私だって子供だけど、それでも一緒に探したい。探してあげたいとかじゃなくて、探したいの・・・。だめかな・・・」

不安げに見つめてくる由香を見て、蓮の中で先ほどの香奈恵の姿と重なる。でも今の由香はそれよりももっと儚げで……。蓮は

「んん。……。僕の方こそ、お願いします」

いったん由香から離れると、静かに頭を下げた。

今三人はダイニングの食卓で紅茶をすすっている。簡潔にまとめるとこれでおしまいなのだが、中身をのぞいてみればなかなか面白いことになっているようだ。

由香は自分のとった行動（蓮に、思いっきり、抱きついたこと）に今更ながら顔を真っ赤にしている。蓮はそんな由香の反応が理解できないのか、顔の赤い由香をむしろ心配して時折表情をうかがい、香奈恵はそんな二人を眺めながら、

「ふふふ、青春ねえ」
などとのたまっていた。

しばらくしてほてりが取れてきた由香は蓮を見て

「里宮君。もしよければ、もしよければなんだけど・・・下の名前で呼んでもいいかな？」

最後の方は小さくなりながらも言い切った由香の顔はまたも赤くなっている。

「いいよ。・・・それなら僕も由香さんって呼ぼうかな」

「うんうん！なんなら呼び捨てでもいいよ！由香、って！」

わかりやすすぎる乙女の反応で、トレードマークでもあるポニーテールを揺らしながら蓮のOKに喜ぶ由香。

結局いきなり呼び捨てはあれだということで、お互いに蓮君、由香さん、と呼ぶことになった。それに便乗して香奈恵も蓮をしたの名前で呼ぶことが許された時、由香が少し不機嫌そうな顔をしたのは気のせい・・・なのだろうか？

しばし穏やかな時間が流れ、ふと蓮がダイニングの壁にかけられた大きな目の時計を見ると時刻はもう五時を回っていた。

「すみません、色々とお世話になりました」

「あら、もう帰るの？」

「ええ、夕飯の準備もまだなのでそろそろ帰らないと・・・」
「そんなことならウチで食べていけばいいのに」

親子そろって蓮を引き留めようとするが、流石に一夜泊めてもらい病院まで行つた（診察代も香奈恵が工面してくれたのだ）上では気が引けて仕方ない。それを言つと二人とも渋々納得してくれたようだった。

「また何かあつたら遠慮なくいらつしゃい」

「また明日学校でね！」

公園までの案内を受けた後、二人に手を振る。

夏に向けて少しずつ伸びてきた日の長さが目に眩しい。しばらく歩いたところでふと振り返れば、もうそこに公園はなかった。代わりに民家の茂みから一匹の黒猫が飛び出してくるのが見える。その猫も一声鳴くと道を横切りその姿を消した。蓮は軽く目を閉じて眩く。

「ちよつと疲れたな・・・」

再び歩き始めた蓮の影が淡く、濃く、アスファルトの上に伸びていた。

「語り手、聞き手 その心？」（後書き）

一応タグで魔法とかついてるように、そろそろ伏線やらファクターをいれていくつもりです。蓮の赤い目は既にそれに入るわけですが。

「フルートの旋律」(前書き)

ここまで続けて読んでくださった方々、ありがとうございます。今回は短めですが、嵐の前の静けさみたいなものを感じさせることができれば大成功です。

「フルートの旋律」

第十部 フルートの旋律

カーテンの隙間からうつすらと光が差し込んでいる。

ベッドに置いてある時計の針が6時をぴったりを示していた。蓮は就寝の際には必ずすべての照明を消すので、日が射してくるとすぐにわかるのだ。蓮はゆっくりと意識を覚醒させるとカーテンを開けて外を見た。昨日までの天気と打って変わってどんよりとした灰色の空をしており、分厚く重い雲がのしかかるようだった。6月初旬の天候としてはむしろ今日のほうが正常なのだが。

あの日から四条家との交流は浅いながらも続いていた。主に彼女たちからの一方的な形ではあったが3、4日に一度の電話は絶えず継続されている。眼色の変化以来特にこれと言った体調面の異常もなく、彼女らとの話の内容もどちらかと言えば雑談じみたものに終始していた。とはいえまだあれから2週間。香奈恵や由香からは相変わらず些細なことにも気を配るようと口を酸っぱくされていたが。

「……ふう。うん、面白かったな」

部屋の片隅にある机から立ち上がると、読み終えた単行本を閉じる

と本棚にしまう。

今日は日曜日ということもあって朝から部屋の中で読書に興じていたのだ。十数冊程度しかないが、だからこそ買った本は捨てずに手元に置き、いつでも読み返せるようにしている。ジャンルに一貫性はなく、推理小説、SF、時代モノ、ノンフィクションなどがあつた。

（特にしなきゃならないこともないんだけど・・・どうしようかな）

しばらく考えていた蓮の目に壁に立てかけた大きな黒革のケースが視界に入った。

孤児院での掃除の最中に見つけたもので、もう使うこともないだろうからと”先生”にプレゼントされたものだ。古びた黒革張のケースには流麗な筆記体で「tristitia」と焼印が施されており、それを開くと銀加工の美しいフルートが入っている。もらった当初は調律もされておらず鳴らない音がいくつかあったのだが、調律師の手から帰ってくるころには胸に響くような音色を奏でるようになっていた。

孤児院にいたころは毎日とは言わないでも空いた時間を見つけてはこのフルートを吹いていた。楽譜は教会にある讃美歌のフルート用楽譜を貸してもらい、人がいない時間帯に教会の聖堂で練習していたのだ。アパートに移り住んでからはそれもぱったりと止んでしまったが。

そんな昔のことを思い出していると蓮は無性にフルートを吹きたくなり、すばやく昼食を取り終わるとケースを抱えて家を出た。

蓮の住む琴木町は発展部と未開発の山林部を併せ持つ町で、物流がしっかりしていながら自然を感じられる地域でもある。

そんな琴木町のなかで蓮が特に気に入っていたのが、山のふもとにある小さな広場である。広場といえるほど整備がされているわけではなくただの空き地といってもいい場所だが、滅多に人が通らず静かで四季折々の野花が咲くこともあり、夕焼けが綺麗に見えるスポットでもあった。蓮は教会での練習ができないときはよくここに来てフルートを吹いていた。

蓮は柔らかな草の上にケースを下すとフルートを組み立てて、赤い瞳を闇に落すと立ったまま即興で演奏を始めた。

もはやそれは練習などというレベルではなく一つの完成した音楽だった。

空は曇ったままだったが、流れる涼しげな風とそれによつて揺れる草のざわめき、そしてフルートの音色が調和し、ここに他から隔離された蓮の世界が生まれる。

瞼を閉じて小さく体を揺らしながら指を動かしていく。短い茶色の髪は風にそよめき、景色は流転と停止を繰り返す。

彼の奏でるメロディーは人の域を出、神秘と魔性を有して徐々に世界を侵していった。

そんな蓮の姿を見ている一人の女性がいた。

大きなスーツケースを持ち、肩辺りで切りそろえたセミロングの髪型に鋭い目つきをしており、顔立ちからしてヨーロッパかどこかの出身だろう。身にまとう黒衣から聖職者であることがわかる。蓮のいる空地の入り口、少し離れた場所に彼女は立っていた。

澄み渡るように聞こえてくるフルートの音色を聴いて、空いた右手をぐっと握りしめながら。

女性はしばらく蓮の姿を見て、小さく

「彼が……」

とつぶやくとすっと踵を返しその姿を消した。

それまで流れていた旋律が空気になじむように消えていくと、景色は徐々に色を取り戻す。

今なお空气中に蓮の放ったオーラの残滓があるようにも感じる。それほどに強く繊細な旋律だったのだ。

蓮は目を開くと軽く息を吐いてから周囲を見渡す。その真っ赤な瞳に世界が反射した。

「……誰かいたような気がしたんだけど。……気のせいかな」

蓮は首をかしげるとフルートを分解してケースにしまい、自宅への道を歩きはじめた。

6月初旬、

今にも泣きだしそうな空だった。

「シスター？」

第十一部 シスター？

蓮の目が赤くなってから彼の生活に大きな変化はなかった。

強いて言うならば学校で由香が頻繁に声をかけてくるようになったこと位だろうか。あれ以来持ち前の偏頭痛も鳴りを潜めており、病院での定期健診にも異常は見つからず、異常が出るまでは通院しなくてもよくなりそれまでの日常に戻っていった。

それから一ヶ月が経った7月17日の日曜日早朝。昨年よりも早い猛暑を記録している琴木町の住宅街を蓮は歩いていた。

先生に顔を見せるついでに礼拝に参加するためだ。

蓮は特定の宗教に対する信仰は持っていないが、孤児院時代に教会の手伝いをして大体の催事は覚えていし経験もある。洗礼は受けていないので聖餐式、聖体拝領を受けることはできないが、里宮牧師に会いに来る際に稀に礼拝にも参列していた。持参するの聖書と讃美歌集、そして常に首にかけてある純銀製十字架。

ようやく教会に到着するというところ、蓮はある違和感を感じていた。

異常に体が重いのだ。

体力に自信があるわけではないが、今まではアパートから教会までの道のりなど何の苦も無く来れたはずだ。それにこの体の重さは単なる疲れなどではない。夏の日差しも関係はあるだろうが、それを考慮してもおかしなほど体は熱く、目の奥がズズキと痛みを訴えている。教会の門をくぐり最後尾の端の席に着くころには全身の筋肉がこわばり、指先が震えていた。

礼拝が始まって一向に体調は好転せず、むしろ悪化の一途をたどる。

ほかの信者が歌う讃美歌や聖書朗読が鼓膜を抜けて脳を揺さぶるようだ。

（なんで今になってこんなになるかな・・・）

流石の蓮もこの苦痛には顔をしかめ、病院への検診へ行くことを考える。

それでも蓮はせめて顔を見せるぐらいはしようと思い、礼拝式を終え片付けに取り掛かっている先生のもとへ急ぐ。極力苦痛を顔に出さないように、作りなれた笑顔で先生に声をかけた。

「先生。お久しぶりです」

「おや、蓮じゃないか。ひさし・・・っ!？」

声色にも痛みを感じさせない蓮に挨拶を返そうとして振り向いた里宮牧師が、急に言葉を詰まらせた。

「れ、蓮。その瞳の色は・・・いったい？」

「え？ああ、つい一月前に先生も知ってらっしゃる」あの”偏頭痛が起きまして。翌朝にはこんな風になっていたんですよ」

顔を青くし、どもりながらも尋ねる牧師に蓮が訝しみながらも答える。

牧師は目を見開いたまま小さな声で独り言のように何かしらをつぶいていた。

「・・・・・・・・そうか・・・・・・・・とうとうきてしまったのか・・・・・・・・

」
目の焦点はあつておらずうわ言のようにつぶやいている牧師に蓮は自分の体調も忘れて心配する。

「先生、大丈夫ですか？」

牧師の肩を掴んで軽く揺さぶりながら蓮が問うも牧師は反応を見せない。

蓮が焦りどうしようか考えていると、一人の修道服を着た女性が牧師の背後から現れた。

「こんにちは。あなたが里宮 蓮君ですね？牧師からかねがね話は聞いていますよ」

見ず知らずの人物にいきなり名前を呼ばれた蓮はひそかに警戒心を抱く。見た目は綺麗な外人女性なのだが、何処となく冷たい空気が

漂っていた。

「あの、すみません。あなたは？」

「失礼、申し遅れましたね。私はこの琴木教会に本日付で赴任してきたシスターのルチア。ルチア・メンダスイアンです。・・・牧師は近頃体調を崩していらっしやるのでお部屋に連れて行かせていただきます。あなたは少し待っていてくださいますか？」

蓮が不安と猜疑心を感じながらも頷くと彼女は小さく微笑んで牧師を教会の奥の部屋へと連れて行った。

誰もいなくなつた聖堂で蓮は一人深く息をついた。

聖堂信者席に座つたまま一向に良くならない苦痛を隠すようにうつむいていると、蓮のもとに先程のシスターがやってきた。

「大丈夫ですか？あなたも随分と苦しそうですね？」

その言葉に蓮はあわてて笑顔を取り繕い

「大丈夫ですよ。この暑さに少しやられてしまったかもしれませんがね」

するとシスターは

「でしょうね。この国の夏の暑さは酷いですから……。よければこの水をお飲みください。水分補給は大切ですよ?」

といってグラスに注がれた水を差し出した。

透明な杯に満たされたきれいな水だったが、蓮はなぜかその水に本能的に嫌悪感を抱いた。この水を飲むことはおろか、触れてもならないと。

しかし目の前のシスターの急かすような顔とその好意を前に断りきることでもできずに、蓮はゆっくりとした動作でグラスを受け取り口をつける。

そつと傾けたグラスから口の中に水が流れ込んだ瞬間、

強烈な痛みを全身に感じて蓮はグラスを落とした。

パリンッ?????

割れたガラスの音が聖堂内に響き渡る。

蓮はあまりの痛みに体を支えることができず椅子から滑り落ちるようにして床に膝をついた。

（なんなんだ・・・いったい・・・）

いつの間にかほかの信者たちの姿が見えない。

喉を通ることもなく、もしかしたら水が唇に触れた途端に、手元で冷たさを保っていた水はとてつもない熱を帯びたように感じたのだ。それと同時にさっきから続いていた体の違和感がさらに強くなる。全身を駆け巡る痛みがこの体は間違いなく自分のものであると訴えているのに、どことなく自分のものではないような。肉体から引き離されたような感覚になる。

「おやおや、どうなさったのですか？」

割れたガラスの破片とこぼれた水もそのままにシスターが尋ねてくる。

その響きに蓮は背筋にぞつとしたものを感じる。

今にも遠のきそうな意識を必死に立て直し、両手を床についたまま最後の力で頭をあげると

そこには、

無表情でありながらどこまでも冷徹な空気をまとった修道女シスターがいた。

「シスター？」（後書き）

ようやくそれらしい展開になってきましたかね。

「シスター？」

第十二部 シスター？

蓮が意識を取り戻したのは見たこともない真つ暗な牢の中だった。手には手錠と鎖がかけられており、鎖のもう一方の端は壁の中に消えていた。煉瓦組みの壁にたった一つの光源である蠟燭の灯火が不気味に揺らめいている。

（・・・・・・ここはどこだろう？）

少し前に同じような状況になったような気がするが今回はその時のような余裕は全くなさそうだ。牢の中は非常に暗く、細部まで把握するのは困難なもののそれなりの広さがあるらしい。蓮がいるのはその一番奥の壁のようだが、出口に当たる扉も柵も見ることはいできない。はつきり言って何一つ位置の特定にはならない。

（・・・・・・なんでこんなところに？）

そこで蓮は意識を失う前の状況を冷静に回想し

「・・・・・・あ」

先生に会うために教会を訪れ、そこで新任のシスターだという女性にもらった水を飲み、今の状況になったことを思い出す。

だが分らない。

あの水が毒物だったとして蓮はそれを体内に取り込むより先に痛みを感じたのだ。口の中に入れただけでそれほどの効果を発揮する毒物なのに、わずかとはいえ飲み込んでしまった蓮が今生きているのはおかしい。体に走る痛みは未だにとどまることを知らないが、それでも致死性はなかったということだろうか。

第二に、蓮はあのルチアという女性とは初対面のはずだった。当然恨みを買う要素などどこにもない。さらにシスターという役職を考えると蓮を狙う可能性はさらになくなる。

そこまで考えたところで牢の外？暗闇で見えないーから足音が聞こえてくる。蓮は思考を中断すると立ち上がり、その闇をじっと見据えた。

「あら、起きたんですね？里宮 蓮」

現れたのは先ほどの女性、シスターⅡルチアだった。

蓮が抱いていた疑問をどれから問おうか考えているとルチアはその様子を笑いながら

「大方あなたの抱いている疑問はここがどこなのか、あの水の正体

は何か、そしてなぜ私があなたを狙ったのか、でしょう？」

お見通しだといわんばかりの冷たい笑みとともに放たれた言葉に蓮は小さくうなずく。

それを確認するとルチアは蓮の前、鎖に阻まれてぎりぎり届かないところまで来て話し始めた。その横には真っ黒なスーツケースが置いてある。

「それらの疑問にお答えする前に私の素性を簡潔に語りましょうか。私はローマのバチカンに総本山を置くカトリック派の公認^{エクソシスト}魔師です。この肩書きの意味する通り、悪魔祓いを生業とし、時には他国へ派遣されてエクソシズムを行うこともあります。どうです？ なかなか大変でしょう？」

まるで演劇の語り部のように朗々と言葉を連ねていく。

「ここであなたの最初の疑問ですが、ここはあなたも通いなれた琴木教会の地下牢。そしてあの水の正体は聖水ですよ。それもかつて聖母マリアが現れたとされる”ルルドの泉”の。もちろん普通の人間には何ら影響を及ぼさず、むしろ治癒効果を持つともいわれる神秘の水です」

・・・地下牢？・・・聖水？蓮の頭の中に新たな疑問が生じる。今まで幾度となく教会内の清掃を任されてきたがそんなものの存在など知らなかった。次に水の正体だが、何の毒物も入れていないただの水であれほどの激痛を感じるなんてありえない。てっきり複雑な

名前をした薬が含まれていると思っていた。

ルチアは蓮の疑問の表情を気にすることなく続ける。

「最後に何故このようなことをしたのか、ですが。私にとってはこれが本題ですね。・・・話は数年前に戻ります。あなたも異派であるプロテスタントであるとはいえ多少の知識があれば知っていると思いますが、私たち宗教者の中には聖書の研究を行う神学者がいます。聖書の意味を正しく理解し、信仰者に対してその指針を示すのが目的です」

このことは蓮も知っている。キリスト教の数多くある宗派はいずれも聖書の意味をそれぞれに理解し自分の宗派に属する信者たちにいわば道を示すのだ。

「聖書とはいってもあれほどに厚い書物ですから、どこか一部を専門にして研究する神学者もいるのです。・・・そしてある日聖書や偽典書の黙示録研究をしていた一部の神学者たちから報告文書がバチカンに送られてきました」

ルチアの声が低くなり、蓮は核心に近づいていることを悟る。

「羊皮紙5枚にわたる
その内容は

・・・・悪魔の降誕」

「・・・悪魔の、降誕？蓮はルチアの口から出た言葉にまたも疑問を抱く。ルチアは蓮の顔を一度見てから再び語りはじめる。

「おかしいと思うでしょう？科学が発達し、人間の生命さえも操ることが不可能ではなくなったこの現代で、未だにそんな非生産的な話をしているのかと。もちろんカトリックの上層部も最初は鵠呑みにしてませんでしたよ」

ルチアは優雅な動作でスーツケースを開けると、その中からさまざまな書類や何か金属製の機材を取り出しながら話している。そのうち一枚の紙を蓮に見せる。文字を読むことはできなかったが筆記体で乱暴に書かれた手紙のようなものだった。

「しかし、そんな上層部の考えさえ覆されるようなことが起こったのです。報告文書の中には悪魔の降誕の前兆として幾つかの事件、現象があげられそのすべてが現実のものと合致した。それらはこじつけとして一蹴できるようなものではなく、流星の上層部も重い腰

をあげざるを得なくなつた」

「それからバチカンは極秘にエクソシストたちを諸国に派遣し生まれ出でる悪魔の所在を探し始めたのです。もちろんいかに情報技術が発達したとはいえ、この広い地球上からたった一つの存在を探し当てるのは至難の業。しかし搜索の手掛かりである報告文書の記述では『悪魔は悲しみの中に生まれ、己を知らぬままにその翼を広げる』とあり、『清められた水にその身を焼かれる』とも記されていました。派遣された全てのエクソシストたちはこれをもとに悪魔を探し続けたのです」

ここまできて蓮にもおぼろげながら状況が掴めはじめた。同時に嫌な予感が生じる。

「あなたにもなんとなく分かってきたようですね。

この報告と搜索が開始されたのは今からちょうど17年前。

……そしていま私は『清められた水』によって苦しむあなたを見つけた。

17年前に生まれ、6歳になるまでの己を知らず、社会的に見て哀れな出生をもつあなたを」

ルチアが言うように蓮は孤児院に引き取られた6歳になるまでの記憶がない。

「知らないでしょう？」

あなたが生まれて間もないころから実の両親に虐待を受けていたこと。

その過程で精神に異常をきたしたこと。

そして記憶を失った6歳のある日、自宅に押し入ってきた強盗にその両親を目の前で惨殺されたこと」

（そんな、両親を殺された？僕の本当の父さんと母さんを？）

動転する蓮をそのままにルチアは蓮の知らない蓮を語り続けていく。そしてファイルにとじられた数枚の写真を取り出した。

「今のあなたの人格は孤児院に引き取られてから構成された仮初ものでしかないということ。」

そしてなにより……」

蓮はこの先を聞いてはいけないと思い耳をふさぐとするも金縛りにあつたように体が動かない。
そして・・・

「そしてなにより・・・」

その口で、殺された両親の血肉を食らってしまったことを「

「シスター？」（後書き）

カニバリズム
食人行為は宗教的観点や道徳的に見てもタブーですね。

「シスター？」

第十三部 シスター？

血溜まりに倒れ臥し茶色っぽい髪の毛をべっとりと赤く濡らした少年の写真。その傍らには二人の大人が同じように倒れている。着ている服から男性と女性であることは判断できるが、全身を刃物のようなものでめつたざしにされており顔は見る影もない。噴出したであろう血が壁にまで飛び散っており部屋全体が赤く染まっている。別の写真には男性と女性のそれぞれの胸部が映し出されてるが、それは不自然に挟られており特に男性の方に至っては心臓器が露出するほどに損傷していた。

目を覆いたくなる惨状であることが写真を通して伝わってくる。

この写真に写っている二つの死体が自分の両親だということのか・・・？それは人間”だった”物体にしか見えない。

疑心を抱くことで安定を図ろうとするも、写真に写っている血まみれ少年が自分だということは蓮にも理解できてしまった。記憶はあやふやだが今の蓮の顔立ちに通じるものがある。

これが、自分の過去・・・。

「あなたの身の回りに起きた事件の類は我々教会側が握りつぶしたので、表沙汰になっていなくて当然ですね。妙にあなたの存在が有名になってしまつと我々としてはあなたの排除がやりにくくなりますから」

ルチアはまるでどうでもいいことというかのように蓮にとっての重要な過去を明かしていく。

「あなたは生まれた瞬間から悪魔の因子を有していた。それだけであればもしかすると人として生き、死ぬこともできたかもしれない。だが世界は、運命はそうはしなかった。

あなたを不幸にも残酷な両親のもとに産み落としあなたが抱える闇を引きずり出す鍵となつてしまつたのです。食人という最も忌まわしい禁忌を犯させてね。その罪を持つてあなたは悪魔に”堕ちた”。その赤い瞳がその証拠ですよ。例えばどんなに姿を変えようと偽ることのできない、悪魔としての絶対の証……」

ルチアの言葉が蓮の鼓膜を揺らすたびに蓮は吐き気と胸を突き破るような衝動を感じるが、それを抑えて何とか反論しようと声を荒げる。

「そんなの分からないじゃないですか！確かにその子供は僕かもしれないけど、隣の人が両親かなんて……。それに……。その……。肉を食べたなんて証拠も……」

震える声で何とか言い切るものの目の前の一枚の紙切れに心の中は激しくかき乱されていた。

記憶がないとはいえ自分の肉親を”食べた”かもしれない。根拠のない糾弾に、蓮は今どうしようもなく自分が汚れた存在に思えた。

「いいえ、証拠ならありますよ。この二つの遺体から見つかった歯形が、少年のものと一致したという医療報告書がね。そして戸籍とDNAの確認から少年と二人に血縁関係があることも……。」

写真を取り出したのと同じファイルから数枚の書類を取出し蓮の前に放り投げる。そこにはルチアが言った通りの結果が記されている。蓮はあまりのことに愕然とし書類を石畳の床に取り落とした。指先が震えているがそれでもきつ、とルチアを見返す。

そんな蓮の表情をほくそ笑むように眺めながら

「もしあなたがこの世にある非科学を信じないのなら……、聖水のことはどう説明をつけます？一般の人間であれば何も問題ないはずの聖水で、あんなに苦悶の表情を浮かべていたのに？」

そういつてルチアはスニーカーから聖水の入った小瓶を取出し蓋を素早く開けると蓮に振りかける。

途端聖水の触れた皮膚から蒸気が発し、凄まじい熱気が蓮を襲う。

「っ！？ぐ、あっ・・・！」

聖水は瞬く間に気化して消えたが、痛みはまだ皮膚の上を這うように残っている。蓮はたまらず壁にもたれかかり、苦痛に呻いた。ルチアは自身の手にも聖水をかけてみせるが何も起こらない。

「悪魔は総じて姿を自在に変化させることができますが、それぞれ個体によって欺ききれない個所が存在します。それは足の蹄であったり獣の耳であったり・・・。あなたの場合はその真紅の目のようですね。上位の悪魔になるほどにその隠蔽は巧妙になるそうですが、あなたのそれも隠す気になれば目を閉じればいいということを考えれば、存外に強力な悪魔なのかもしれません」

既にお前は悪魔であるというようなルチアの物言いに嫌悪感を感じながらも、まずは自分の疑問を解決することを優先する。激しい痛みは未だ治まらず、それでも何とか意識を保って壁に背を預けたままの姿勢で問う。

「・・・いくつか質問しても？」

「ええ、どうぞ」

「先生が体調を崩してらっしゃるというのは嘘で、先生も僕の赤い目を見て悪魔であるという推測を立てたのですか？」

「そうですね。説明が足りなかったようですが、彼もまたバチカン

から派遣されたエクソシストの一人なのですよ」

……え？

それは流石に矛盾する。先生が属しているのはプロテスタントであり、エクソシストなどという役職は存在しない宗派だ。それがなぜ？

「里宮牧師はあなたが生まれるよりも前、若かりし頃は一流の？ 魔師だったのですよ。彼のもとに舞い込んだ依頼の数は未だに塗り替える者がいないほどです。」

しかし彼は何を血迷ったか、ある日突然として姿をくらまし、短い手紙でバチカン教会に対する離縁状を送った。

ですが今回の件を受けてカトリックとプロテスタントは協定を結び共同で悪魔の搜索に乗り出した。まるで二次大戦期ナチスのホロコーストに対抗した勇氣ある各教会の歴史を見るようですね。唯一違うのはユダヤ人迫害の時にはむしろそれを促進するような、ヒトラーの掌で踊らされた愚かな宗教者もいましたが、今回はほぼ世界中の教会が総出になってあなたを探すことに協力的だったということでしょうか」

畳み掛けるように話すルチアの目には明らかに教会に属し神への忠誠を果たすことに対して陶醉している色が見える。その口にも狂信者のような見るものの背筋を凍らせるような歪な笑みがこぼれてい

た。

「……それなら何故先生は僕をあなた方に突き出さなかったんですか？」

「私は過去にこの町にいた他の司祭からの報告書であなたの存在を知り、日本に来て里宮牧師と会談しました。その際に言っていましたよ。『彼は心優しく慈愛に満ちた子だ。彼が無意識にも意識的にも食人行為を行うなんてありえない。だから彼は悪魔にはならない』とね。結局その希望的観測はご破算になったようですが……」

ルチアは笑みを隠すと逆に苛立った表情で話した。

彼女にとって同じエクソシストとして活躍した里宮牧師が悪魔を擁護するような発言をしたことが気に食わなかったのだろう。

この言葉を聞いて蓮は少し安堵すると同時に申し訳ない気持ちになる。自分が信頼し今まで支えてくれた人物を疑わずにいられることは今の蓮にとっては救いだった。一方で知らず知らずとはいえ自分が償い難い罪を負ったまま恩人の庇護のもとにあったことを思うとあまりに苦しい。

二人を照らす蠟燭の光がほんの少し揺れた。

蓮は気持ちを落ち着けると最後の質問をする。

蓮のこれからの行動を決める重要な質問を。

「じゃあ、僕を捕まえて……どうするんですか？」

その質問に対する答えは……

「もちろん抹殺します。」

教皇認可のもとで悪魔祓いの指令も下っているのです。
今、この場で、あなたを殺します」

ルチアはスーツケースから短刀を取り出し蓮に突き付け、死刑宣告を下した。

「シスター？」（後書き）

むずかしい。

「最後の瞬間まで」(前書き)

瞬間で、とき、とよんでください。

「最後の瞬間まで」

第十四部 最後の瞬間まで

ルチアは右手に短剣と左手にラテン典礼書を持って蓮に向って冷たい笑みを見せている。

短剣は錆びついているのに禍々しい気配を放っており、今まで多くの血を吸ってきたのではないかという憶測さえ抱かせる。

蓮は壁に背中をつけたまま必死に脱出策を練るが、右手に感じる手錠の冷気がそれを悉くねじ伏せる。

「Princeps gloriosus? simile c?l?st
is mil?ti? , sancte M?cha?l Arc
h?ngelle , def?ndenos in pra?li
o adv?rsus pr?ncipes et potest
?tes , adv?rsus mundi rect?res
tenebr?rum harum , contra spiri
tu?lia nequ?ti? , in c?l?stibus .
...」

ルチアが典礼書の大天使ミカエルにささげる祈りの箇所を読み始める。その声は地下牢の壁に反響し、幾重にも重なり一つの唱和となつて蓮を縛り付けた。ただの、ただの言葉のはずなのに、その一つずつが鎖のようになって蓮に絡みつく。

徐々に思考をまとめることも困難になり、蓮はずるずると牢の床に横たわった。

憔悴しきつた蓮をよそにルチアはミカエルへの祈りを終えるとすぐさま悪魔祓いの句を読み上げる。

「In n?mine Jesu Christi Deiet
Domini nostri, interced?ntei
mmacul?ta V?rgine Dei Genitr?c
e Mar?a, be?toto Michaele Arch?n
gelo, be?tis Ap?stolis Petro
et Paulo et ?mnibus Sanctis,」

もはや蓮になす術はなかった。手錠とは別の非物理的な形で自由を奪われていく。どんなにあがいてもその手は空を切るだけだ。

「...et sacra minist?rii nostri
auctoritate conf?ssi, ad infest
ati?nes diab?lic? fraudis repe
ll?ndas sec?ri aggr?dimur。」

ルチアが最後の句を読み終えたときには蓮の呼吸は既に浅く、目の奥にあった穏やかな光も消え失せていた。絶望するまでもなく、ただ時間の流れに身を任せて蓮は目をゆっくりと閉じる。

「……ようやく完成する。世界から悪魔の血は洗い流され平和が訪れるのですよ？あなたはその礎となることを喜びなさい……」

典礼書を閉じると右手に持った短剣に聖水をたらし、刀身をすすぐ。蓮にはその姿は見えていないだろうが、それはまるでギロチンの刃を研ぐ処刑人を思わせた。そしてルチアは聖水をしまうと短剣を流れるような動作で逆手に持ち替え、蓮の隣にしゃがみ込み大きく短剣を振り上げた。

そしてその剣を、

「……この魂が天の御国に捧げられますように……」

蓮の心臓に――

「やめろおおおおおおおおお！……！」

――振り下ろせなかった。

蓮は突如聞こえてきた絶叫と衝撃に意識を引っ張られ、その虚ろな眼を開いた。

そこには

ポタリ・・・ポタリ・・・

胸に短剣が刺さったまま

蓮を心配げに伺う

”先生”の姿があつた。

「せん、せい・・・？」

蓮は朧な意識のまま呼びかける。その目に恩人の流す血の色は映っていない。いや、ほぼ無意識のままに親愛する恩人の名だけを読んだのだろう。

「・・・っ。・・・大丈夫かな？・・・蓮・・・？」

先生の声がやけに遠くに、そして近くに感じる。自分の体を包むほんのりとした温かさ、頬に断続的に感じる吐息。左半身に……ぬめりとした感触。か細く、今の自分以上に弱り切ったその声は少しずつ蓮の思考を覚醒していく。目を動かせば牢の壁に気絶したルチアがもたれかかっているのが見える。

「……なぜ、ここに……？」

「……助けに来たんだよ。君は、私にとって、息子に……等しい存在、だからね」

かすれかすれの声で里宮牧師は答える。

だが蓮は臆な頭で思う。この人なら親族であろうとそうでなかろうと、分け隔てなく救いの手を差し伸べるだろう、と。

手錠はいつの間にか外されていた。
自分の手を見てみる。

蓮の掌は真っ赤な血で染まっていた。
蓮のものとは違う、罪を感じさせない。
いっそ清らかな血で。

蓮はそれを見て、

ただただ、

綺麗だ、と。

再び先生を見ると彼は悲しげに微笑んで言った。

「君を縛るものはない。さあ、行きなさい。

今まで君と出会ってから……私が君に与えたものは決して多くはない。

それでも……できる限りのことは、したつもりだ。

君は優しく、思っている以上に強い……。

望めば愛するものを……守ることもできるだろう。

さあ、お行き……」

先生は蓮をそつと立たせると牢の出口があるであろう暗闇に向って背中を押した。

蓮は振り返り、問う。

「せん、せいは?……こないの?。」

「・・・私は少し、疲れたからね。
ここらで休ませてもらうよ・・・。
またいつか、
・・・迎えに来てくれると、
嬉しい・・・。」

先生はゆっくりと体を倒しながらそう言って・・・

それきり先生は動かなくなった。

そして蓮は

「・・・わかったよ。せんせい・・・。また・・・いつか・・・」

そう呟くと、

重い足を引きずりながら

出口の见えない闇に向って歩き始めた。

「彼女のキモチ？」（前書き）

一応三人称のままですがストーリーの進行上、前の話より時間軸が戻ります。由香と香奈恵にフォーカスを当てたいと思ひまして。ある意味幕間かも。

「彼女のキモチ？」

第十五部 彼女のキモチ？

由香と香奈恵が蓮の秘密を知ってから早くも一ヶ月が経つが、彼女たちの生活に変化はほとんど言っていないほどなかった。唯一由香が学校にいる時に蓮と話をする機会が増えたことぐらいだろうか。その内容も単純に興味のことであつたり、蓮の体調を尋ねるなどといったものばかりだった。

（もうちょっと、蓮君に近づけるかなあつて思ったのに・・・）

由香はあれ以来蓮のことを考える時間が増えたことを自覚していた。

初めて由香が蓮と知り合ったのは一年前。高校に入学してしばらく経った5月のある朝だった。

彼女は昨日宿題として出されたプリントを学校の机の中に忘れ、朝のうちに仕上げようと急いで登校していた。息も切れ切れに教室にたどり着くも、あまりに早い時間だったので鍵が閉まっているのではないかということに失念していた。

しかしその予想に反して教室のドアはすんなりと開く。

そこで由香は、

朝の眩しい光に照らされた部屋の一番片隅で

窓から差し込む温もりに抱かれて眠る一人の少年を見た。

机に両手を置き、枕代わりに眠っておりそのしなやかに丸まった背中では呼吸に合わせて小さく上下している。
茶色に染まった髪がキラキラと反射し、横に向けられた顔はどこまでも平和だった。

「きれい・・・」

自分でも気づかない間に少年の机のそばまで来るとひざをかがめ、少年の顔をじつと見る。

口からこぼれた言葉に一瞬頬を染めるも、彼の寝顔を見ると些細な羞恥心など拭い去られてしまうようだった。

雑誌に出ているような世間一般で言う美形、かつこいといとは違う。胸をときめかせるというより、温めてくれるような顔立ちをしている。

そして由香は恐る恐る手を近づけると、蓮の柔らかな髪をそつと撫でた。それほどの長さがあるわけではない。ショートシャギーとでもいうのだろうか。それなのにその髪は絹のようにほどこけ、手を放しても優しい感触が残っているように感じた。

しばらく少年の寝顔を見ていると、少年は少し顔を顰めて瞼を開いた。

閉ざされていた瞼の奥には黄土色の、光にすかせば金色にさえ見える瞳があった。

「…………えと、…………誰ですか？」

少年がおっとりとした口調で聞いてくる。

ここでようやく由香は自分の行動に気付き、赤くなった頬を隠すように満面の笑みで

「おはよう！私は四条 由香。あなたの名前は？」

その日結局由香は宿題を提出することができなかった。

それからというものの由香は無意識に蓮は目で追うようになっていた。宿題とは別に少し早めに登校し、声をかけることはできないまでも自分の席から蓮を見ていた。由香の席は教室の最前列、教卓の前だったので授業中はダメでも、休憩時間がくると友達としゃべりながらも時々蓮を見る。やりすぎるとストーリーカーかも、なんて悶々とした思いを抱えながらも少しだけ、少しだけ彼のことを知りたいと思うようになっていた。

そんなある日、由香の耳にある噂が入ってくる。それは……里宮 蓮は一人暮らしをしているというもの。

由香もあまり知らなかったのだが、蓮はその暖かい空気と端正な顔立ちから一部の女子生徒の間で人気があるという。それほど目立つ存在ではないが、彼に少しでも興味を持った人は皆その不思議な感覚に惹かれていく。そんな女子生徒たちが口コミや男子には理解しがたい情報網を駆使して得たのが、蓮の一人暮らし疑惑であった。ただ一人暮らしというのなら高校生で親元を離れる生徒も少なからずいる。しかし彼の現住所などを考えるとその線は薄い。とすれば親はいないのではないか、ということだ。

蓮本人と一部の教師しか知らないはずの情報がここまで漏れてしまっているというのは問題な気がしなくもないが、由香はその話をより詳しく聞き、ついに蓮が自分の家の近くのアパートに住んでいるということまで知った。

からといって行動に移せばそれは完全にストーカーだと思い、どうすることもできなかったのだが。

それから数日後、母親と夜中にコンビニに買い物に行った帰り、公園で倒れこむ蓮自身に遭遇したのだ。

日曜日の夜、由香は明日の授業の準備を終えるとベッドに深く潜り込む。

（はぁ・・・ちょっとくらい、あっちから話しかけてくれてもいいのに・・・）

由香は知っている。自分が抱いているのは紛れもなく恋心で、その対象が蓮であることを。

蓮の秘密をこっそりと、そして蓮自身の口から聞いたとき、由香は言葉にできないほど強い感情を抱いた。初めて蓮に会った日。あのときすでに一目ぼれという形で恋をしていたのだとすれば、それは更なる追い打ちをかけるように。

部屋の電気を消すと由香はゆっくり体を仰向けにすると静かに目を閉じる。

(来週こそは・・・きつと・・・)

いつかこの想いが少年に届くことを願って・・・。

「・・・由香！・・・由香！起きて！！蓮君が、たつた今病院に搬送されたって！！！！！」

え？

「彼女のキモチ？」

第十六部 彼女のキモチ？

蓮が以前検診を受けた県立病院に緊急搬送されたと聞いて由香と香奈恵は深夜の時間帯、車を走らせて向かっていた。

前回蓮と一緒に来た際に香奈恵が緊急連絡先として問診用紙に書き込んでいたために連絡が来たのだ。電話を担当していた吉田医師によると、蓮は琴木教会の門の前に血だらけで倒れこんでいたところを近隣住人によって発見されらしい。確認したところ外傷はなかったものの、極度の虚弱状態にあり、一時的に呼吸が浅くなり、危険の状態だったという。現在もバイタルが異常に低く、予断を許さない状態だとも。

病院の敷地内、入院病棟の駐車場に到着すると二人はすぐに車を降り、病院に入っていく。

「すみません、先ほど連絡をいただいた里宮 蓮の関係のものですけども・・・」

香奈恵が受付の女性に声をかけると彼女は迅速に対応してくれた。蓮がいるのは4階の466病室。救急患者用の個人室で、今もまだ眠っているらしい。

エレベーターを降りると消灯時間を過ぎ足元を照らす非常灯の僅かな明かりを頼りに廊下を進む。病院特有の消毒液の匂いが鼻を突いた。二人分の足音が妙に大きく響く。

しばらく行くと466という番号が打たれた下に手書きのネームプレートで 里宮 蓮 と書かれた扉があった。

二人は一度立ち止まるとぐくり、と唾をのむ。心臓が早鐘を打っているのを感じた。

香奈恵がドアの取っ手を回し、由香もそれに続くようにして中に入る。廊下同様暗い部屋の中でベッドの横にある電気スタンドだけがぼんやりと部屋を照らしていた。

そしてベッドの中には静かに横たわる蓮の姿が。

「っ、蓮君……！」

ここが病院であることも忘れ蓮の名前を呼びながら由香がベッドに駆け寄る。香奈恵もそれを注意することもできずに由香の隣に並ぶと蓮の顔を見つめた。

真っ白な病院のベッド。少し厚めの布団で眠る蓮は一切の表情もなく、死んでいるのではないかという錯覚さえ起こす。むしろ死人の方が表情を汲み取れるのではなからうかと思うほどに。

由香は溢れる涙をこらえることができずに透明な雫をタイルの上に

落していく。喉が焼けるように熱い。ひりひりとした痛みが頭にま
でのぼり、奥歯をぐつとかみしめることで叫び声だけは押さえてい
た。

香奈恵もまた蓮の姿を見て、胸をかきむしりたくなるような衝動を
感じていた。彼女が蓮に最後に会ったのは一月前だったが、それ
も彼の見る者を温めてくれる笑顔は脳裏に焼き付いて離れなかつた。
かつて最愛の夫を失った時と同等の悲しみに包まれる。

今二人の前にいる蓮からは温かさも冷たさも感じない。
あの不思議な光を放つ真紅の瞳も、閉ざされた瞼の向こうで見えな
い。

どこか自分たちとは違う世界の存在であるように思える。

二人はただ無言で蓮のそばに寄り添い続けた。

二人が入室してから20分ほど経った頃、病室の扉が開き白衣を着
た初老の男性が入ってきた。彼が蓮の担当医だろう。

「こんにちは。私が今回里宮さんの検査を担当した竹林です。さっ
そくですが里宮さんに外科的、内科的異常は特に見つかりませんで
した。あと、体に付着していた血液は琴木教会の里宮牧師のもので

あることがわかり、今警察の方に連絡して対応を待っているところです。ただ彼が浴びていた血液の量から、牧師の生存は、ほぼ、絶望的かと……」

「っ！？・・・そんな……」

二人は里宮牧師に直接会ったことはない。それでもかつて蓮が彼の過去を語った時に”先生”と呼び慕うほどの存在であることは知っている。蓮が目覚めたときに親にも等しい人物が亡くなっていたと知れば、どれほど悲しむだろう。

それから短い話があつてから竹林医師は部屋を出て行った。

残された二人は部屋の隅に置いてあるパイプ椅子を取り出してベッドの横に置いて座った。

由香は布団をそつとめくると蓮の白くほっそりとした手を優しく握る。

「由香、眠ければ簡易ベッドもあるから寝てもいいのよ？」

現在深夜2時。香奈恵は由香を心配して声をかけるが

「いい。蓮君が目を覚ますまで絶対にこの手を離さないから……」

このままいけば由香は学校も休むと言いかねないだろう。その時は流石に登校させるだろうが、今はもう少し蓮のそばで見守ろう。何

より自分もそうしていたい、と香奈恵は思っていた。

壁も天井も、閉ざされたカーテンまで白い病室に時計の針の音だけが響いている。

暗い部屋の中、目に痛いほどに白く輝くスタンドが

少年の儚げな寝顔を照らしていた。

「彼女のキモチ？」（後書き）

短い回になってしまいました。次回は蓮の夢の中へ入っていかうかと考えております。

「大切な記憶？」

第十八部 大切な記憶？

11年前の冬の日の夜、一人の少年が教会の廊下を歩いていた。数日前に自分を引き取った孤児院の院長である牧師の書斎に招かれ、わざわざほかの孤児が寝静まった時間を選んだのだ。暗く冷え切った廊下を裸足で歩いているというのに、感覚がないかのように無表情のままひたひたと足を進める姿は幽鬼のようで恐ろしい。

・・・コンコン。

「はいつて、いい・・・？」

大きな漆塗りのドアをノックして尋ねると、中から穏やかな声で

「どうぞ。お入りなさい」

とかえってくる。

部屋の中の壁には大量の蔵書が本棚に入れてしまっており、電球ではなく燭台にともされた3つの蠟燭が全体を優しい光で照らしている。また部屋の左側にある大きな暖炉も温もりと明るさを差し出す。そんな書斎の中央にある大きな机に向かい、牧師は何か手紙のようなものを書いていた。静かな部屋に二人分の息の音と万年筆が紙の上を走る音、そして時計の音だけが聞こえる。

少しして牧師が書き物を終わると少年に机の前にある椅子をすすめ

た。少年は無言でそれに従い、牧師と向かい合うように椅子に腰かける。

「さてと、ここでの生活には慣れたかな？・・・といってもまだ数日しか経っていないから、分からないだろうね。でも他の子供たちもとてもいい子たちだから、きつとすぐに馴染むさ」

朗らかな笑みを浮かべながら話す牧師の顔を少年は無表情にじっと見つめている。

まるで何が楽しいのかわからないというように。

「すまないね、一人で盛り上がってしまった。でも君にもすぐに分かるようになるさ。楽しいときに笑い、悲しいときに泣けるようにね」

「・・・知らない・・・どうでもいい」

そもそも感情というものに対する興味さえない少年にとって牧師の言葉など誘いの意味を持たなかった。彼は表情を一切変えずにただ目の前の男の目を見返していた。二人の間に沈黙が流れる。

少年がそつと部屋を退室しようとしたときになって、ようやく牧師は言葉を紡いだ。

「君は自分の名前を覚えていなかったんだね？」

「そうだけど・・・」

「実は君がこの部屋に来るまで、私は君に付ける名前を考えていたんだよ。君に相応しい名前をね」

「……そんなもの、いらない……」

「せめて聞いてくれないかな？君の名前はね……『蓮』だよ」
半ば強引に言葉をつなげたものの牧師の言葉に少年はわずかな反応を見せる。既に部屋の出口に向けていた足を止め、牧師に顔を向けると小さな声で

「……れ……ん……？」

とつぶやく。

「夏に水の上に咲く綺麗な花だね。どちらかというと仏教に関係があるんだが……」。

花言葉はね……『沈着』『神聖』、そして……『清らかな心』……」

牧師は本棚の中から一冊の植物辞典を取り出し、蓮の花が大きく描かれたページを少年に見せる。水面に浮かぶ真っ白な花弁は、彼の黄土色の瞳に反射してどう映ったのだろう。まだ幼い体には重たい大きな辞典を受け取ると、その挿絵をじっと見つめる。

そんな少年の姿に牧師は小さく微笑み、優しい声で呼びかける。

「……蓮」

少年は本から顔をあげ牧師の目を見る。さっきまでただの肉体の一部でしかなかったものから、細やかな温もりを感じた。自身の変化に戸惑いながらも、嫌な気はしない。

「蓮、君が望むのなら教えてあげよう。この世界とどうやって向かい合っていくかを」

しばらくの沈黙を挟んで、

「どうすれば、いいの？」

少年、いや『蓮』から答えが返ってきた。牧師は微笑をより深めるところ言った。

「まず周囲のものが放つ音に耳を傾けるんだ。

目に見えるモノだけにとらわれてはいけない。そうすれば私だけではなく、君を取り巻くすべてが君に語り掛け、道を示してくれる。君がいつか君だけの道を歩けるようになるまでは、そうやって音や声をたどって進めばいい。

そして君がその足で歩き始めた後でも、耳を澄ませばきつと力になってくれる存在がいるはずさ」

「……お、と？」

蓮はつぶやくと自分の両手をパチンとあわせてみる。

「そう、音だよ。でもそれは必ずしも耳で聞こえるものじゃないかもしれない。知ってるかい？音っていうのは空気の振動なんだ。それを感じ取るのが体の中で一番上手なのが耳だけど、ときにそれは体全身で聞くことができる」

「みみをとじても、きこえるの？」

「そうだ。耳をふさいでいても聞こえてくる音はある。肌を通して心を揺らすような、そんな音が・・・」

自分の掌をじつと眺めた後、少年は小さく

「ききたいな・・・いろんな、おと・・・」

とつぶやいた。

「・・・・・・・・これは、あの日の・・・・・・・・」

目の前に広がる里宮　蓮としての始まりの光景を見ながら16歳の蓮はつぶやく。

ここでようやく彼は自分が現実とは違う、おそらく夢の中にいるのだということを知る。幼いころの自分は書斎の扉の横に実体を”持たず”存在している蓮の前を通り過ぎて部屋を出ていく。その顔には入ってくる時とは違い、感情の断片を見ることができた。

（なぜ今更こんなものを見ているんだろう・・・）

蓮が閉ざされた扉をじっと見たまま熟考していると、

「そこにいるんだろう？・・・蓮」

「っ！？」

突如として後ろから名前を呼ばれる。蓮は心臓を鷲掴みにされるような感覚を覚えながらも、あわてて振り返る。

そこには書斎の椅子に腰かけたまま、目を閉じている先生がいた。

「せん、せい・・・？」

蓮は恐る恐る声をかける。頭をよぎるのは自分をかばって刺された先生の面影。不安と恐怖が胸を占める。しかし先生はそれを落着かせるような優しい声色で

「ああ、蓮。私だよ」

呼びかけに答える。

「こうして記憶の世界で会うことになるとはね・・・。」ということ
は、そちらの私はきつともう死んでしまったのだらうな・・・。」

先生は生前と変わらない姿ではつきりと蓮に向かって話しかける。

「これは・・・これは、どういうことなんですか？」

機械的ではなく今の自分の問いかけに答えてくれる先生の様子に嬉しさを感じながらも、状況が掴めない。蓮は再び先生に問いかけた。

「ここは記憶の世界。誰もが心の中に持つ思い出というものが全く別の次元を持つて一時的に分離した空間だよ。だから私はこうして君の前で対話することができる」

「・・・記憶の・・・世界・・・」

あまりに突拍子もない話だが、まるで生きているかのような先生を見ていると混乱することもなく不思議と納得させられてしまう。蓮は一度視線をそらし、暖炉の薪がパチパチと軽やかな音を立てているのを見る。

そして蓮は少し考えると

「今のあなたに、こちらの世界の話をして・・・聞いてもらうことは・・・？」

「この」世界の私が知りうる答えなら、可能だよ」

つまり蓮が引き取られた11年前の牧師が知っている情報ということだ。蓮は一度息を落ち着けてから、過去の先生との語らいを始めた。

「今の僕は、16歳。あなたの時間から考えて11年後の里宮 蓮です。あなたはまだ知らないかもしれませんが、僕には失われた記憶を無理に探ろうとすると、激しい頭痛を起こすという体質がありました。これまでも何度かその発作は起こったのですが、最近起こった発作ではそれまでと違い、さらに激しい頭痛の末に意識を失うほどのものでした。そして翌日、僕を保護してくれた友人の家で目を覚ますと」

「・・・瞳の色が赤くなった、だね？」

蓮は先生の目を見ながら小さくうなずく。

「・・・病院の検査などでは異常は見つからず、再び日常に戻ると思っていました。しかしつい先程ここに来る前に、バチカンから派遣されたというエクソシストの女性が現れて・・・僕を・・・僕を悪魔だと言ったんです」

そこまで聞いて先生は目を閉じ、両手を組むと深くため息をついた。そして蓮に話を続けるように促す。

「悪魔祓いと称する儀式の際、僕はその女性・・・シスター・ルチアに聖水をかけられたんです。通常の間人であれば問題ないのですが、僕には・・・」

「強い痛みを感じた。・・・それも意識を保つのが困難なほどに・・・」

・・・」

「はい。」

二人の間に沈黙が漂う。

すると牧師は重く腰をあげると書斎の本棚から一冊の古めかしい本を取り出した。

革装の本の表紙は擦り切れボロボロになっている。

牧師はその本を開きページをめくっていく。しばらくして目当ての内容にたどり着いたのか、その手が止まった。

蓮がそつと近づき牧師の肩越しに覗き込むように本のページを見る。そこには難解な言語による羅列と中世の活版印刷に見られるような版画刷りの絵で翼の生えた真つ黒な獅子が描かれており

白黒の絵の中で唯一、

眼球の部分だけが

真紅に塗りつぶされていた。

「大切な記憶？」
(後書き)

次回に引き続きです。

「大切な記憶？」（前書き）

今回の話は本作品の世界観に関する説明に値する内容を里宮牧師の言葉を借りて書いてあります。もちろん内容はほぼ全体を通してフィクションですし、参考にした文献などもありますが、一貫して現実とは異なるものでしたので了承ください。

「大切な記憶？」

第十八部 大切な記憶？

牧師が開いた分厚い本のページ。そこに描かれた翼をもつ漆黒の獅子。眼球だけが煌々と赤く塗りつぶされた獅子の絵に蓮はいつしか自分自身を重ねていた。

「これは中世ヨーロッパで発見された資料の一つだね。グリモワールのような魔術書に分類される文献なんだ」

唐突に牧師が語りはじめる。

その声に蓮は注意を戻し、今度はそのページ全体を眺めてみる。

「文献にはソロモン七十二柱の悪魔をはじめ、古今東西のさまざまな悪魔に関する記述が収められている。・・・その中で最も異色なのが、この悪魔なんだよ」

牧師は本を蓮の腕に預けると机に戻り再び椅子に深く腰掛けた。

「これは、どういう悪魔なんですか・・・？」

蓮は本を開いたまま牧師に視線を移し尋ねた。

「その質問に答える前に、君は悪魔がどうやって生まれるかを知っているかい？」

その問いに蓮は首を振る。

「・・・悪魔や天使というのはいずれも精霊に属する。元をただせば同じような存在というわけだ。ただ彼らはそれぞれに役割を持ち広い意味で世界の均衡を保とうとしている。

善だけでも、悪だけでも成り立たないのがこの世界だ。

世界は今風に言えば一つのシステムのようなものでね、一切の感情を排除してその内部での矛盾を取り去ることでの安定を図る。天使も悪魔も、果ては神の存在さえも、すべてそのシステムを維持するための駒でしかない。もちろんこの観念を教会は否定しているが」

キリスト者らしからぬ牧師の発言に蓮は少々驚いたが、冷静に情報をかみ砕いていく。

「古代における哲学者が言う、万物を動かす理。ロゴス、とでもいうのかな。そんなものだと思ってくればいい。いずれにせよ神や精霊たちは各々の役割を持ってこの世のバランスを保っている。天使や悪魔という区分は、それぞれの精霊たちが担う仕事を人間が主観的に判断して下したに過ぎない」

「だがね、蓮。ここで重要なことは、システムたる世界には感情がなくとも精霊たちには感情があるのだよ。与えられた仕事ゆえに彼らは否が応でもその責務を果たす。愛するものを闇に引き落とすこともあれば、自らを苦しめるような思いをすることもある。精霊たちにも死というものはあるが特に強力、例えば一つ概念を担うよ

うな精霊たちに終わりはない・・・」

「・・・と、いうと・・・？」

「流れる時間の中でただ自分たちだけが置き去りにされていく孤独感。愛するものといられない絶望。

責務を果たすために与えられた力が置きければ大きいほどに、何もできないことに対する無力感は計り知れないものとなる」

牧師の言葉に蓮はぞっとした。永遠に死ぬことができないまま周りの時間だけが流れ、得ては失いを繰り返す。どんなに恐ろしいことだろう。

「君を襲ったというシスターから聞いたと思うが、私もかつてはエクソシストとして各地を渡り歩いていた。悪魔を絶対の悪として滅ぼすことを目的として・・・」

そう語る牧師の顔には深い後悔の念が刻まれていた。

「ここで君の先ほど私にした質問に戻るが、そのページの悪魔に関しては詳細がまだわかっていない。悪魔として記されている以上、何かしら負の役割を持っているという推測はできるものの、それが何かも分からない」

「では……なぜこの悪魔が存在すると……？」

「中世の研究者や悪魔信仰者によるとその悪魔は、
……未来に生まれる。すべての悪魔の中で最も若い悪魔らしい」

未来に生まれる。それは中世に語られた説であるということを考えれば当然”現在”^{いま}も含まれるわけで。

「……世界がその均衡を保ちがなくなったとき、その不安定要素を取り除くことを命じられ産み落とされるといわれている……」

牧師の言葉が蓮の頭の中を反響する。急に背中が重くなったような錯覚に陥った蓮は目の前の父親同然の人物に対して最も気になっていたことを。しかし怖くて聞けなかったことを確かめる決意をした。

「先生。先ほどの話の中で、僕はあえて口にしなかったことがあるんです。……それはシスターが僕のことを悪魔と称する前に明かした、僕の過去の罪……」

実の両親の、死肉を、食らったのだと……」

言ってしまった。

シスターの話によると牧師は最後まで蓮の食人を否定し信じ続けていたようだった。しかし突きつけられた写真を見ればそれは裏切られたといわざるを得ない。これは亡き牧師に対する一つの懺悔だったのかもしれない。

すると牧師は意外な発言をする。

「・・・いや、私は知っていたよ。君が悪魔の因子を持っていたことも、それを顕現させる鍵となる肉親に対する食人行為を犯してしまっていたことも・・・。知ったうえで、君を匿ったんだ」

蓮は牧師のあまりの予想外の発言に言葉を失う。仮にも聖職者である牧師からすれば食人という罪は間違いなく嫌悪されるものだと思っていたのに。

「おそらくそちらの私はシスターに対して君の食人を否定するような物言いをしたのだろうね。だがそもそも君をこの孤児院へ連れてきた町の役員も私と同じく聖職者、それもカトリックのエクソシストだったのだよ。そして最初は君を狙い、その抹殺を試みた。しかし現場にたどり着いたとき、君が実の両親から受けていた酷い仕打ちを知り、その境遇に同情せずにはいられなかった。君をこの孤児院に連れてきた後、彼もまた改宗し悪魔殲滅の一線から身を引いたんだよ。」

「その方はまだ生きてらっしゃるんですか？」

「君がいるのは１１年後だったね？であれば彼は確か５０台になる

ころじゃないかな。名前は時東当夜。書斎の机の中に手紙などがま
とめてあるから、目が覚めてから見てみるといい」

「・・・それに言っておくが、たとえ悪魔と呼ばれようと君は君だ
よ、蓮。『清らかな心』をもつ一人の少年だ。他人の言葉に惑わさ
れて、自分を見失ってはいけない。・・・私はその名を君に与えた
ことを、今も後悔はしていないのだから・・・」

牧師の言葉が蓮の胸のしこりを解いていく。今更になって自分が悪
魔である可能性を思っていた以上に意識していることに気付いたの
だ。

牧師の目を見つめ、しっかりとうなずくと・・・時東当夜。その
名を頭の片隅に置きながら、再び本に描かれた悪魔の肖像を見てみ
る。時折揺れる蠟燭の火で絵画の目が不気味に光る。

その瞬間、

燭台にともされたりうそくの火が今までになく大きく揺れ始める。
暖炉の火も一瞬強くゴウツと燃えたかと思うと

同時に視界がぐにやりと歪む。

「——っ！？先生！？」

「・・・どうやらここまでのようだね。少し長く語りすぎたようだ・
」

蓮はどんどん暗くなる視界の中で必死に牧師に向かって手を伸ばす。

手に持っていた魔術書が床に落ち切る前に、消えた。

「先生！待ってください！僕はまだ・・・」

「大丈夫。私は蓮を見守っているよ。」

いつか君は決断を迫られるだろう。

変化をとるか、普遍を望むか

その答えは今すぐでなくても構わない。

ただ自分の決めた道を信じて・・・

歩きなさい・・・」

「先生!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そうして灯火は、消えた。

「大切な記憶？」（後書き）

やっと蓮が目を覚まします。あと感想などあれば遠慮なくどうぞ。

「初雨」

第十九部 初雨

陽が差し込む白い病室から短い電子音が連続して聞こえてくる。

この部屋を彩るのは窓際の花瓶に挿された数輪の花だけだ。

この部屋の”今”の主はもう5日も眠り続けていた。見舞いに来る二人の親子は交代にこの部屋を訪れては目を閉じたままの少年に語り掛け、手を握り、何度も呼びかけ続けた。

今彼のそばで椅子に座ったまま彼に寄り添うようにして眠っているのは母親の方だ。娘は昼間学校に通い、放課後はまっすぐ病院まで来て少年の様子を見ている。授業には全く手がついていないようだが。

四条 香奈恵は目を覚ますとゆっくり起き上がり、未だ眠り続ける少年の顔を見つめる。そして彼の手を強く握り、

「……蓮君？早く起きないと、あの子が悲しんでるわよ？毎日、毎日……。学校が終わると急いで飛んできて、あなたの名前を呼んでる。」

由香があんなに悲しむ顔なんて、あの子の父親が亡くなってからは初めて見たわ。それだけ、あなたを想ってるのよ。そして由香だけじゃない。

「……私だってあなたを想ってるのよ？」

声に出せば出すほどに、寂しさが、不安が、引きずられるように内側から胸を叩く。

いつからだろう、目の前の少年に対して母性とはまた違う感情を抱くようになったのは。初めて会ったのはあの公園での一件。とても平穏とは言い難い出会いから始まり、まだ指で数えられるほどの日数しか言葉を交わしていない。

しかしその中で垣間見た彼の暖かさと・・・空虚。

愛する夫を失ってからもう7年近くになるが未だに消えなかったしこりのようなものが、彼の笑顔を見るたびに安らぐのを感じた。いつも自分のことには無頓着で何を言っても、大したことないですと返してくる。他人とコミュニケーションをとるのが苦手なのかと思えば、妙なところで気を回したりしている。

孤児院での生活を語ったとき、周りの子供たちの世話をすることが、義務から楽しみに変わっていくのをその眼を見て思い知った。

「こんなに私たちを悲しませて・・・あなたが起きたら、絶対にこの悲しみを教えてあげるわ。あの子の分も、私の分も・・・」

視界が涙で滲む。蓮がここに来てから一度も泣かなかった香奈恵が初めて泣いた。

いや、夫を亡くし悲嘆に暮れてた時に、娘に慰められて立ち直ったあの日から初めて。

俯いて目を閉じ、唇を噛みしめる。長い黒髪がさらりと肩にかかった。

これ以上言葉も、何も、出さないように・・・。

そのとき、

「しり、たい、な・・・」

「・・・え？」

握りしめた掌に。冷たく、まるで石のようにさえ思えた少年の手に。
ふいに温もりが戻る。

香奈恵は空いた手で急いで涙をぬぐうと蓮の顔を見た。

そこには優しげに眼を細め、

いつかの柔らかな微笑で、

「……知りたいです。

教えてください……あなたたちの悲しみを……」

香奈恵の願いに答える

蓮がいた。

「?????????????!蓮君!」

香奈恵は声にならない叫びとともにその名を呼び、その華奢な体をしっかりと抱く。

ここにある命を確かめるように。再びあふれ出した涙を見られないように。

「香奈恵さん、顔をあげてください……。あなたに、ちゃんと謝らないと」

「まだ、ダメ……。泣きやむまで、待って」

「いえ、見せてほしいんです。失礼だとは思いますが、あなたの悲しみを……。教えてほしいんです」

蓮のその言葉に香奈恵はゆっくりと顔をあげ、髪を背中に流すと蓮の赤い目を見つめる。

「これで、いい?」

蓮は黙ったまま香奈恵の泣き腫れた顔をじつと見た。

そしてゆっくり目を閉じると、その眼尻に浮かぶものが。

「はい・・・こんなにも悲しませて、すみませんでした・・・」

それは蓮が記憶する限り

生まれて初めて流す

悲しみの涙だった。

「初雨」(後書き)

かなり短かったです。書いていて少し胸のすく内容になったかな
と思います。次回は由香篇と、事件の経過です。

「抱擁」(前書き)

由香パートです。途中に蓮が眠っている間の事件の経過が書かれています。

「抱擁」

第二十部 抱擁

終業のチャイムが校内に響く。教室に喧騒があふれ、それぞれが部活や帰宅もしくは寄り道などの予定などを話し合っている。そんな中で四条 由香は教科書やプリントをまとめて鞆の中に入れるとまっすぐ教室のドアに向かう。

「ゆかあ？ 今日みんなでパフェ食へに行くことになったんだけど、由香も来ない？」

「ごめん、今日も用事があるから……」

由香が言うように彼女はここ数日、友人と遊ばずに下校というスタイルをとっていた。

「まあ用事があるなら仕方ないか……。うん、また今度誘うね」

そいつって手を振る友人に申し訳なさそうな顔で手を振りかえすと、由香は少し早歩きでドアから出て行った。

季節はすっかり夏のそれになり、何処からか聞こえるひぐらしの鳴き声が由香の心に不安という影を落とす。由香は腰近くまであるポニーテールの髪と制服のスカートを揺らしながらほかの生徒たちの

間を縫うように駅へ向かう。

彼女が大切な友人との交流を置いてまで急いで下校する理由はただ一つ。

彼女の片思いの相手、里宮 蓮であった。

つい5日前に入院して以来ずっと目を覚まらず、昨日様子を見に病室へ見舞った段階でも彼は深い眠りの中にいた。昏睡状態にあるが原因は不明。医者も今はただ待つしかないという状況は、由香にとっても彼女の母親の香奈恵にとっても決して良いものではなかった。

蓮が眠りについてから2日目、警察署から井上 浩太という刑事が病室を訪れたことがあった。蓮が発見された琴木教会の地下から担当牧師である里宮 和人の刺殺された遺体が出たという。短剣のようなもので胸部を突き刺されており、それが致命傷になったことは確実だと。そこで彼が院長を務めていた孤児院の関係者でもあり、事件発生時最も近くにいた蓮に事情を確認しようと思い、蓮に会いに来たのだが、蓮はまだ昏睡状態で眠っていたため何も聞くことはできなかった。

刑事は自分の名刺を香奈恵に渡し、蓮の目が覚めたら連絡をくれと言い残してから蓮の頭を一度撫でると退室していった。

その際刑事が由香と香奈恵に話したのは、事件が起こる直前に海外から赴任してきたシスターが一名失踪しており、現在彼女を重要参考人として搜索しているということだった。

由香はいつもとは反対方面の電車に乗り病院に向かう。まだ5日しか通っていないのに、もう何年も同じことを繰り返しているような気分だった。

入院棟に入ると既に記憶している蓮の病室に足を進ませる。エレベーター4階で止まり、甲高い音と共にドアが開く。

向かいの窓から見える太陽の光が目には染みた。

鞆を握る手に少し力を入れ、下を向いて廊下を歩いていく。部屋の番号を確認するまでもない。そこに入ったネームプレートを見る必要も。この扉の向こうには母親と、眠り続ける愛しい人がいるはずだ。

もしかしたら……でもまだ……。
希望と現実的な可能性がせめぎ合う。

由香が一人病室の前で立ちすくんでいると、

目の前のドアがひとりでに開く。

いや、そこには彼女自身の母親がいた。

「おかあ、さん・・・？」

涙の跡が見える母の顔に首をかしげる由香。
すると母は優しい笑みで、由香の手を取り

「こっちに来て・・・」

病室の奥へ引つ張っていく。

突然のことに戸惑う由香の目に飛び込んできたのは、

「あ、おかえり。由香さん・・・」

思わず拍子抜けするほどに

ほんわりとした笑顔を見せる

蓮の姿があった。

「・・・・・・・・。。。」

由香は何もしゃべらず目を見開いて蓮を見つめる。

「え、と・・・・由香、さん？・・そ、その・・・・おかえり・・・・？」

蓮は返事のない由香に戸惑いながらも再び繰り返す。

互いに見つめあったままの状態が続く

変化があったのは由香の方だった。

「・・・っ。く、うつ・・・」

固まったまま涙を流し始めたかと思うと、次第に呼吸を破るような
嗚咽が聞こえてくる。

「・・・ゆ、か・・・」

蓮はそんな由香を見、かける言葉を探すが見つからなかった。
こんなにも悲しんでくれる人がいる。

こんなにも悲しませてしまった人がいる。

蓮は今まで感じたどんなものよりも強い胸の痛みを感じた。心は肉
体に直結し、蓮は自分の手を心臓のあたりに置き、必死にそれを抑
えた。

「つくう、うつ・・・。ううああああ!!..」

由香もまた保ち続けていた姿勢を崩し、冷たいタイルの上に膝をついて激しく涙を流す。

肺が空気を求めて急かす。それに触発されたように泣き声が大きくなる。

「うわあああああ．．．つ。あああああっああ」

たかが5日間、だけどそこには愛するものと隔てられた苦しみが進められていて．．．。

医師たちも救いになるような言葉をくれることはなかったのだ。最悪の考えが何度も頭の中をかすめた。

だけど今ようやく、彼は帰ってきてくれた。
いつもの、彼女の大好きな笑顔で．．．。

「その向こうへ」(前書き)

安直なサブタイトルだなと思いますが、お許しください。

「その向いへ」

第二十一部 その向こうへ

「蓮君、調子はどう？」

「すっかり良くなりましたよ。もう明日には退院できるそうですし」

蓮の意識が回復してからは様々なことが立て続けに舞い込んできた。五日間に及ぶ昏睡の弊害として体中の筋肉が弛緩し、それを戻すためのリハビリに一週間をさらに費やした。その合間に色々なことが起こったのである。

まず第一に里宮牧師殺害の件についての情報を聞くために井上刑事が再び蓮のもとを訪れたのだ。がっしりした体格に強面で、一昔前の熱血刑事のような外見とは裏腹に繊細な神経をした男性で、親同然の存在を失った蓮に極力負担をかけないような質問の仕方をしていたのが印象的だった。また彼にも幼い子供がいるらしい。

その会話の中で蓮の側が得た情報は、牧師の殺害に使われた短剣は現場には残っていなかったことから犯人が持ち去ったという見方で捜査が進められていること。例のシスターは未だ見つかっておらず、警察による捜査が続いているということ。そして教会内に何か事件につながるようなものはないか確認したが見つからなかったことだ。なお牧師の葬儀に関しては蓮が眠っている間に済んでしまったらしく、孤児院に残された子供たちは市役所が面倒を見つつ随時引き取

り手を探していくらしい。蓮は恩人の葬式に参列できなかったことを残念に思ったが、夢の中での一件があった為またどこかで会えるような気がしていた。

蓮自身は気づいていないが”あの夢”の中で牧師と出会えたことは蓮にとって非常に大きな意味を持っていた。ただ知識を与えただけではない。もし何もなく蓮がその目を覚ましていたなら、自身が悪魔であるという可能性に押しつぶされ、由香や香奈恵を拒絶していたかもしれないだろう。牧師の言葉があったからこそ、二人とああして再会を果たすことができたと言える。

しかし蓮の心の中の桎梏が完全に取り払われたとは言い難かった。もし再び彼の傷を開くようなことがあれば・・・。

この段階でその危険に気づいているものは、本人を含めて誰一人いなかった。

身内の話はここまでにして、次に蓮が体験したのはクラスメイト

からの大量の手紙だった。他人と関係を気づくのが苦手だと自分で思っていた蓮からすると非常に驚きのことだったようで、由香が持ってきた紙袋に詰められた手紙を前にしばらく呆然としていたほどだ。

対人関係といえば、蓮と由香がお互いを呼び捨てで呼び合うようになった。蓮が目覚めた後の由香の号泣が落ち着いた頃、二人は知らず知らず互いを名前で呼び合っていることに気付いた。それ以降元の呼び方に戻す必要も感じなかった、というよりは違和感さえ感じなかったのもそのまま下の名前で呼ぶことになったのだ。

蓮はこれに対してただ違和感がないからというような認識だったが、一番喜んでいたのは由香だった。あまりにはしゃぎすぎて病室を出てから香奈恵に散々からかわれ、顔を真っ赤にしていたのだ。病室の外から聞こえる二人の声に蓮はベッドの上で首をかしげているが、しばらくして看護婦の声と共に

「すみません・・・」

と聞こえてきて思わずくすりと笑ってしまった。

翌日の朝、蓮は病院のロビーにいた。

「どうも、お世話になりました」

担当医であつた竹林医師に丁寧な頭を下げる。

「いえいえ。まだ倒れた原因などがはっきりわかっているわけではないので、異常を感じたらすぐにでもいらしてください」

竹林は深いしわの刻まれた顔をほころばせ、蓮に伝える。

蓮は由香と香奈恵が自宅から持ってきてくれていた少量の荷物を持つともう一度だけ頭を下げて病院の自動ドアから出た。
外では由香と香奈恵が車を止めて待っている。

「すみません、わざわざここまで」

「気にしないで。私たちがしたくてしてるだけなんだから」

由香が笑って答える。車を運転するのは香奈恵だろう、という突込みはあえてしない。

三人は車に乗り込むと他愛もない、くだらないことで笑いあひながら自分たちの家に帰っていく。

ふたりと、ひとりではなく。さんにん、いっしょに……。

蓮は車の中でしばしの日常を感じると同時に

夢の中で先生から教えられたこととその言葉を思い返していた。

『・・・いつか君は決断を迫られる。

変化をとるか、普遍を望むか・・・

自分の決めた道を信じ・・・歩きなさい・・・』

蓮はまだ自分の身に降りかかった不可解な事象の数々を完全に受け入れてはいなかった。だが目をそらしてばかりでは前に進めないことも知っている。

（やっぱり科学じゃ証明できないことも、在るのかもしれない…）

変化 と 普遍。

いずれの道にどのような結末があるかは分からないが、今わかっているのは、迷いながらも先に進むしかないということだ。

（とりあえずいろいろ調べてみなくちや。時東 当夜とかいう人のことも・・・）

そして蓮はどこか確信する。

この事件の終末に

誰も想像できないような未来が

待ち構えていることを・・・。

「友好」(前書き)

前回までで一つの大きな区切りとして物語を読み進めた方がいいかもしれません。

「友好」

第二十二部 友好

八月に入り、蓮たちの通う高校にも夏休みがやってきた。

あの原因不明の昏睡状態により蓮は丸々二週間欠席してしまったが無事に復学、期末テストの類も由香の協力のもと何とか通過することができ、周囲の学生と同じように長期休暇の恩恵にあずかることができる。

また、先生の殺害事件に関してはあのとき蓮のもとを訪れた井上刑事が時折電話で、捜査の進展について報告してくれるのがありがたかった。本来であれば民間人然りの蓮に対して捜査内容を教えるのは規則違反になるはずなのだが、その危険を冒しても蓮に恩人の死について教えようとしてくれる姿勢に蓮も深い感謝を見せていた。牧師を殺害したシスター・ルチアはあれ以来全く姿を見せていない。そして休暇に入って3日目の午後、蓮は照り付ける太陽の下を四条家に向かって歩いていった。

「今日はなんでまた突然に？」

問いながら横にいる人物に視線を向ける蓮。その赤い瞳に楽しそうに笑う由香の姿が映る。

というのも休みに入り朝から晩まで自宅のアパートで今回の事件のことやこれからの自分の行動について考え続けるというある種不健全な生活を送っていた蓮の部屋に突如訪れ、なんだかんだと喋ったかと思うとその手を引っ張り、外に連れ出した人物が由香だったからだ。

しかし最近ではこういったことも決して珍しいことではなかった。あの一件以来、どんなに待っても蓮からの連絡はないと判断した四条親子は、逆にこちら側から蓮に対するアプローチを計ることにしたのだ。

たった一言でも電話など入れていればこんなことにはならなかっただろうが、蓮としては夢の中での牧師とのやり取りの方が頭に残って仕方がないようである。

「蓮ってさ、多分夏休みとかに入ったら余計に誰とも会わなくなっちゃうんじゃないか、ってお母さんが言ってるね？ だったらたまにはうちに招待して、みんなでご飯とか食べたら寂しくないんじゃないか、って」

「ふーん。・・・それじゃあ悪いけど、お邪魔させてもらおうかな？」

「それでよし！ なんなら泊まって行ってもいいよ？」

由香の軽口をさらっと流しながら蓮はさっさと歩いていく。

今年に入って蓮にあった変化の一つはこういったところにあるのだろう、と由香は蓮の背中を見ながら思う。今までは他人からの誘いなどに対して理由を後付けにしても断ってきた蓮が、由香と香奈恵に限定とはいえ交友関係を持つことを受け入れているのだ。

もちろんこの変化に由香が気付かないはずがない。それも、変化を与えた一端に自分がいるのだということ意識すると、舞い上がってしまいそんな優越感さえ感じた。

蓮は自分のこの変化に対してそれなりに肯定的だった。ただ少しばかりの違和感と引っ掛かりが否めなかったのが気になるものの。

「なにしてるのさ？ 行くよ？」

「・・・あ。うん、待って」

蓮と由香は再び肩を並べて歩き始めた。

「ただいまー。お母さん、蓮連れてきたよ」

玄関をくぐると由香は大声で母を呼ぶ。ちよっとして香奈恵が奥から出てくる。

スリッパのパタパタという音が近づいてくると

「あら、いらっしやい、蓮君」

濡れた手をエプロンでふきながら歓迎する香奈恵。ちよっど家事をしている最中だったようだ。

それに蓮はすつと頭を下げて挨拶する。

「お邪魔します。香奈恵さん」

このやり取りも慣れたものだな、内心ごちながら香奈恵の出で立ちから判断して蓮は

「もしまだ支度が済んでないようなら僕も手伝いますよ？」と提案する。

「あら、じゃあ少しお願いできるかしら？」

香奈恵も少し忙しかったのか、それともあえて提案を受け入れることで蓮を家族のように扱おうとしたのか、いずれにせよあっさりと提案を飲んだ。

由香は夏休みの宿題に奔走するために自室に戻り、蓮は香奈恵に連れられてダイニングとカウンターを隔てたキッチンに向かう。

四条家のキレイの整理されたキッチンにつくが、そこにはまだ何の用意もされていなかった。

「まだ夕食の準備は全然できてないのよ。ずっとレシピを考えてたら決まらなくてね」

困ったように笑う香奈恵に蓮は再びある提案をする。

「じゃあ夕飯の準備は僕に任せてください。それでも料理はそれなりにできますんで」

流石に全部任せきりにしてしまうのは気が引けたのか香奈恵はしばらく手伝いだけで良いと言って断ろうとしたのだが蓮が割と頑固で引き下がらない。結局今晚の食事の用意は蓮に一任することになった。

「じゃあ悪いけど、お願いね？」

「ええ、任せてください」

蓮は腕まくりをしながら笑顔で答える。香奈恵もそれに安心し、キッチンを出ていく。

「さてと、久々に頑張ってみようかな・・・」

時計の針が7時30分を指している。ここに来たのが5時だったからかれこれ2時間以上も調理を続けていた計算だ。ようやくすべての料理が完成し蓮がほっと息をついたとき、ダイニングのドアが開き由香と香奈恵が入ってくる。

「・・・わあ、すつごい！これ全部蓮が作ったの！？」

キッチンカウンターの上には3人で食べきれんのか怪しいほどの皿に盛られた料理があった。今回は自分以外の人に食べてもらうということで蓮も張り切ったのか、色とりどりで目にも美味しい料理の数々だった。冷蔵庫の中に魚類があったので、それを使ってムニエルをはじめとするフランス料理としゃれ込んだのだ。

「ちよっぴり張り切りすぎちゃったかもしれませんね。すみません」
「いえ、見てみたらどれも保存もしっかりできそうな調理がされているから大丈夫よ」

蓮はあまり家でも多く食べる方ではないため極力余らないように作るのだが、たまに作りすぎたときの為に保存の効きやすい調理を心掛けていた。これなら翌日ぐらいまでなら安全に味わうことができる。それを一目で理解した香奈恵も立派に主婦だ。

蓮のお手製料理に舌鼓を打った後、三人はリビングでくつろいでいた。途中笑い声が絶えず、第三者が見れば彼らは本当の家族のようだったことだろう。そんな楽しい時間はあっという間に過ぎ去り、

蓮はそろそろ帰ろうと思い席を立つ。

「それではそろそろお暇します。今日は楽しかったです。ありがとうございました」

「こちらこそおいしい料理をごちそう様ね。またいつでも来て頂戴」
「またお料理作りに来てね」

玄関まで送られ笑顔であいさつを交わすと、蓮はすっかり暗くなつた夜道を自宅に向けて歩き出した。

真夏の夜、湿気を帯びたぬるい風が頬を打つ。じんわりとした汗が固まって一滴となり額を伝い、その不快な感触を蓮はシャツの袖でぬぐった。街灯の明かりが数歩先の道を照らし、蓮の胸元の十字架が反射して銀色に輝く。

蓮はゆっくりとした足取りで家路をたどりながら、またも”あの夢”のことを思い出していた。

（明日にでも教会に行ってみようかな……。何か見つかるかもしれないし）

一際強い風が吹き蓮は思わずその眼を閉じる。

風がやんだのを感じ天を仰いで目を開くと、蓮の真っ赤な瞳に

束の間、美しい満月が映り込んだ。

それは風が運んできた大きな雲に覆われその光を失い、
等間隔に置かれた人工の光が、夜空の神秘にとってかわった。

「友好」(後書き)

ここから少しずつ闇の真相に入っていくかと思います。
あとユニークが100になりました。ありがとうございます。

「真夜中の探索？」

第二十三部 深夜の探索？

琴木教会の牧師が殺害されるという事件からかれこれ一月近くになるうとしている。

井上刑事からの電話によると、犯人とみられるシスターの行方は依然として分かっていないが、近隣での警戒は解かれ警察による現場搜索も終了したそうだ。ただし今なお教会内への立ち入りは禁止されており、昼間に堂々と侵入することはできない。

そこで蓮は夜になるのを待ってから中に入り、特に先生の書斎を調べることにした。

腕時計の針が夜中の1時を指している。空には雲がかかっており月の光は届いていない。

教会のある琴木町の外れは閑静な住宅地となっており、この時間帯であれば人っ子一人見かけることはできなかった。更に蓮にとっては都合のいいことに市や町役場の確認もここまでは至っていないのか、途中街灯が切れているところがいくつも見られ、道を歩く未成年の少年の姿は簡単に見ることはできない。

蓮は動きやすいようにジーンズと薄手のシャツを着、ポケットの中に懐中電灯を入れて教会の前までやってきた。

主を失った教会の花壇は以前とは比べ物にならないほど荒れ果て、過去の面影は残っていない。そういった影響からなのか蓮は特に体に異常を感じることなくイエローテープをまたいで敷地内に足を踏み入れた。

カツツ、カツツ、、、

蓮のスニーカーが聖堂内に響く。暗い中で右手に持つ懐中電灯の明かりだけが行く先を照らしていた。警察の捜査により多少物の位置が変わってはいるが大部分はそのままの形で残っている。何年もここで過ごしていたのだと思うと今更ながら蓮の心に郷愁の思いが込み上げてくる。

蓮はすつと息を吸うと再び歩みを進め、廊下を通過して先生の書斎に向かった。

間もなくして大きな漆塗りの扉が目に入る。かつて先生が最も多く使用していた部屋だ。新しかったころは黒く美しい艶を放っていたのだろうが今はところどころ漆が剥げており、真鍮製の取っ手もくすんでしまっている。蓮は懐中電灯を左手に持ち替えると取っ手をひねり、書斎の中に入ってしまった。

今まで通ってきた度の箇所よりも暗く感じる書斎の中で蓮はまず部屋の隅にかかっている燭台を取り外し、持ってきていたマッチで明かりを灯した。あの夢の中と同じ状況を作ったのだ。電灯のスイッチを切り、燭台を書斎の中心にある先生の机の上に置くと部屋の隅までぼんやりとではあるが照らされることとなる。壁一面の本棚には先生が生前に集めたであろう古い本が大量にある。

蓮は記憶を頼りに夢の中で見た本を探し始めた。

「・・・っ。見つけた・・・これだ・・・」

入って右側一番奥の列の上から3番目に、その本はあった。ボロボロの革装にずしりくる重量感、夢の中と全く同じ。

蓮は先生の机の椅子に座るとその本をめくっていく。先生が言っていたように描かれているのは悪魔に関する記述と木版画だ。原典であるラテン語で記載されているが、ところどころ先生の自筆とみられる訳が載っている。おかげで蓮にも大体の意味を把握することができた。

もう残りのページも少なくなってきた頃、ようやく目当てのページにたどり着く。

他のページとは明らかに異色な雰囲気。

見開きの片面を使って描かれた悪魔の肖像は簡素な木版画で描かれているはずなのに今にも動き出しそうだ。真っ黒な獅子の背中には鷲の翼が生えており、満月の空を駆けるように飛んでいる。その眼

は真紅に輝き、こちらを見据えているようにも見えた。
燭台の灯の揺らめきに合わせてその影が濃くなる。

蓮は一度本を持ち上げ、体に寄せて隣のページに記載された説明を
読もうとする。

蓮が本を傾けた途端、裏表紙のあたりから一枚の紙切れが滑り落ち
た。

（これは・・・先生の字だ・・・）

見慣れたバランスの取れた模範的な字体ですぐに判断した蓮は、本
を一度机の上に置きなおすとそのメモのようなものを読む。最初の
一文を読んだところで蓮の顔が驚きに染まる。

それは蓮にあてた手紙だったのだ。

『私の愛する息子、蓮。君のことをこう呼ぶことを許してもらえ
だろうか。

君を残して逝ってしまうであろうこの私が、不遜にも君の父の名乗
ることを。

君がこの手紙を見ているということは、おそらく記憶の断片を目の
当たりに

し、あの魔術書を探し当てたということだろう。そしてその時には
私は君のそ

ばにはいられない……。思うと胸が苦しいが、これも定めなのだ
ろう。

蓮、君がこの先いかなる選択をとるのか私に知るすべはない。だがこの手紙を見た段階で既に歯車は回り始めている。止まることはできないのだよ。

・・・最後に決めるのは君自身だ。それをゆめゆめ忘れないでほしい。

和人
□

里宮

手紙を読み終えると蓮はそれを丁寧に折りたたみポケットの中に入れた。同時に尚疑い続けていた神秘の存在を受け入れようと決意する。生前の先生は機知に富み、あらゆる方面に明るい人物であった。そんな彼が嘘をついていたとは思えない。夢ではなくこうして目の前に文字で表されて、その思いは確かなものとなったのだ。

そして机の上に置かれた写真立の中で蓮やほかの孤児と一緒に笑う先生に向かって今一度伝える。

「・・・ありがとうございました」

蓮は深呼吸で呼吸を整えると、再び魔術書を近くに寄せて読み始めた。

しばらく読み進めていくうちに分かってきたのは夢の中で先生が言っていたように、何を司る悪魔かは定かではないこと。他の天使や悪魔と同じように”摂理”から生み出される存在ではあるが、やや在り方として他と異なるということ。そして世界の均衡が崩壊に近づいたとき、この悪魔は降誕し秩序のためにその身を引き渡されるということだ。誰から、誰に引き渡されるのかは記されていないかった。

蓮は本を閉じるとしばし考える。

他の精霊たちとは違う。・・・では他の精霊たちに共通していることは？

均衡の崩壊・・・これは世界における紛争や科学発展による道徳観のそれを指しているのだろうか。

そして『引き渡される』という結末に関する記述。これは確か新約聖書の中でよく用いられた表現だった気がする。またルチアが言っていたようにこの悪魔にもそれという証があるなら、この紅い目がそうなのだろうか。

どんなに考えても今すぐには答えが出そうになかった。蓮は魔術書を持って一度引き換えし、後日探索を再開することにした。まだ時東 当夜という人物にもコンタクトを取っていない。もしかしたら彼がキーパーソンかもしれないのだ。

「手紙の類は書斎の机の中だっけ・・・」

椅子を軽く引き机の一番下、最も大きな引き出しを引いてみる。しかし、何かが引っ掛かってたように動かすこともできなかった。

（あれ、どうなってるんだろう）
鍵穴らしいものも見つからない。蓮は途方に暮れながらもしばらくガチャガチャと取っ手を引き続けた。

そのとき取っ手の裏側に何らかの突起があったのか、指先に鋭い痛みを感じる。見てみれば紅い血が一筋、つと掌まで流れていた。眉を顰めながらポケットからハンカチを取り出し、血を拭う。と、何気なく向けた視線の先には

半開きになっている引き出しがあった。

（・・・ホントにどうなってるんだろ）
よく注視してみれば取っ手の裏側に微細な刃物がついており、そこを伝う蓮の血が、引き出しの内側に描かれているファンタジックな魔方陣まで伸びていた。親指大の大きさのそれは赤いインクのようなもので記されており、そこに流れ込んだ蓮の血のせいで判読は既
にできない。

（まさか魔術の封印、なんて言わないよね…）

妙な事件に巻き込まれ、先程の先生からの手紙もあり神秘の存在を認めることを決意したとはいえ、流石に早々受け入れるのには困難がある。それでも慣れていくしかないのだろう。苦笑を浮かべながらファイルを取り出していく。

蓮は疲れた頭を軽く抑えると、件の魔術書とファイルを抱えて懐中電灯のスイッチを入れる。

最後に一度書斎を見渡すと燭台にともされた三本の蠟燭の火をふつ、と吹き消した。

「真夜中の探索？」（後書き）

ちよつとは視覚的に暗い感じが出ているでしょうか。

「真夜中の探索？」（前書き）

今回の話でちょっとした暗号を用意します。

「真夜中の探索？」

第二十四部 深夜の探索？

昨夜（正確には今日の早朝だろうか）の深夜外出の影響か、蓮はいつもより遅くまで眠っていた。今まで規則正しい生活をしていたこともあって、その眠気は尋常ではないらしい。ベッドの上で身動き一つせず横たわる姿は見るものにどこか不気味な印象さえ与える。とはいえ今現在この部屋にいるのは蓮一人、その姿を見る者はいない。

彼が目を覚ましたのは正午を少し過ぎた頃だった。カーテンの隙間から差し込む厚い日差しが彼の白い臉を焼いたのである。

「つつ、つつう……」

疼くような痛みを臉に感じ、呻きながらも体を起こす。掌で顔を覆ってみるが未だにピリピリとした感触が残っていた。寝過ぎた為か肩をはじめとする間接部位がやたらに痛む。ベッドの上で一度大きく伸びをすると、蓮は洗面所へと向かった。

一応の着替えと昼食を済ませた蓮は自室に戻ると紙袋に詰め込んだ

大量の書類を取り出す。それは昨夜教会から持ち帰った、牧師に宛られたの手紙などであった。

（先生って結構交流が広がったんだ…）

カーペットの上に胡坐をかいて中身を確認していく。先生の立場上送り主は教会の信徒が多数を占めているのだろうが、その量は彼の人望の厚さを思わせるには十分であった。蓮が生まれるより前のももある。手紙そのものの内容は年賀状であったり暑中見舞いなどのグリーティングカードばかり。いずれも書き出しが似たり寄ったりなものだった。

あの悲劇の夜、ルチアが話していた内容によると先生はずっと昔、カトリックの？魔師^{エクスジスト}として名を馳せていたという。その方面からの文もないものかという期待は残念ながら外れたようだ。

積まれた手紙の山がようやく半分に到達するという頃、ふいに玄関ベルが鳴った。一旦部屋中に広がった手紙をファイルに戻し紙袋にしまい込むと部屋の隅に立てかける。

「はい、今行きます！」

早足で玄関に向かうと鍵を開けてドアノブを捻った。

「…どちらさまですか？」

しかしその問いに答える者は、いない。

片足のスニーカーのかかとを踏みながら、ドアから顔を覗かせる。それでも何の影も見出すことはできなかった。無人の廊下に生暖かい風が吹いていた。

（気のせい、かな…）

作業を再開してから更に一時間が経過し、徐々に蓮の顔にも疲れが見え始めていた。延々手紙を眺めた一つの名前を探していると、いつの間に気づかない。気の長い彼であつてもそれなりのストレスを感じているようだ。何か飲もうと一度部屋を後にして台所へ行くことにした。

蓮は食器棚からコップを取り出すと水道水を注いでいく。冷蔵庫の中には牛乳やお茶が入っていたが何故かそれらを口にする気にはなれなかった。無味なカルキ水が満ちていく。

透明なグラスに注がれた、透明な液体。

それが、あの日の光景と被った。

気付けば蛇口から流れる水がコップから溢れ出していた。
蓮はそれを少し溢して量を減らすと、一気にそれを飲み干す。生温いそれではあったが疲れた頭には十分な安らぎになったらしい。軽くコップを濯ぐと洗面台の横にある籠の中に置いた。

「いい加減出て来てよ…」

山積みの手紙や書類の名義を確認し続ける。その数は収められていたファイルの外見よりも遥かに多く感じる。これも神秘なのだろうか。愚にもつかないようだが、案外正解かもしれない。

今日はもう切り上げて明日に回そう。そう思い最後に手に取った手紙を裏返す。

開け放った窓から差し込む光が徐々に赤みを帯び始めていた。

（あれ…？）

既に諦観を抱いていたからだろう、蓮は手元にある一枚の手紙が放つ特異性に即座に気付くことはなかった。それでもゆっくりと思考が追いついてくる。

他のカードは風景画や水彩画で描かれた鮮やかな色彩なのに、それだけは簡素な白紙に達筆な字で文章が綴られただけのシンプルなハガキ。少量の香水をつけられているのか植物系のほのかな匂いがする。

それ裏返すと、

「・・・あった。・・・時東 当夜。」

思わず頬を緩め、他の手紙を脇に避けて時東からの手紙を見つめる。おかしいことに送り主の名前は書かれているというのに肝心の住所が記されていないかった。それでも記されている差出人の名は間違いなく時東当夜のものである。自然とついて出た溜息を吐くと蓮は手紙を読み始めた。

『 親愛なる里宮牧師

最後にお会いしてから三年も経ちますがいかがお過ごしでしょうか。こちらは仕事が忙しく、なかなか手を放すことができません。この手紙も僅かな合間を縫って書いている次第で、しばらくは余裕もなさそうです。都会の群集とは恐ろしい。

そういえば先日名前も知らない上司から親切にも時計を贈られまして、私に甥がいると思ったそうでその子へのプレゼントにと。もちろん私は妻帯さえしておりませんので丁重にお返ししたのですが、今度は他の社員が兄に会わせてほしいというのですよ。兄の有能性を知ってのことなのでしょうが、私のこの努力で我慢していただきたいものです。

最後になりましたが私もそろそろ老後のことを考えて新しい住居を探そうかと思えます。今の古い家は不動産商に引き渡してしまおうかと。転居先の職場に馴染めばまた手紙を送らせていただきます。それではまたお会いしましょう。

p . s .

返信の手紙には教会の杯の写真を添付して頂ければ嬉しいです。あの美しさが今も忘れられないので

時東 当夜
『

「なに、これ…」

文面はいたって普通の手紙。もっと真相めいたものに近づけると思

ってただけに失望は大きかった。
しかし

(なんか引つかかるんだよね…。すごく感覚的なんだけど)

「手掛かり？」

第二十五部 手掛かり？

教会から手掛かりになりそうなものを持ち帰って以来、蓮の生活は単純なパターンと化していた。

あの後残りの書類も確認したが結局めばしいものを発見できなかった蓮はった一枚の時東からの手紙を頼りにその居場所を掴もうと画策していた。朝目が覚めて朝食などをとると先生の魔術書をパラパラと読んでいく。それを終わると次は時東の手紙を読み返し、何か隠されたものはないか、規則性などをみる。それだけで一日が終わることがしばしばで極稀にフルートを弾くために外に出る程度だった。

取り掛かって一週間、手紙の暗号解読は完全に手詰まりとなっていた。

「・・・っ。わからない・・・」

今蓮がしているのは時東の手紙の文章を一度別の紙に書き出し、その中の単語を多義的に読み取るというものだ。本文は日本語で書かれているのだが、牧師たちはキリスト者として他の言語にも精通していたはず。英語などでもそうだが一つの単語に多くの意味が包含されている。それを丁寧に洗っていつているのだ。

今日の作業が始まって三時間。一向に進まない解読に蓮も流石に疲れたのか机に頭を落とす。すぐ近くにある時東の手紙から教会でも感じた植物系のモクセイのような香りが漂った。爽やかにも甘くも感じるような香り。

（なんだろ、不思議な匂い…）

適度な疲れとその不思議な香りに蓮はゆっくりと意識を手放した。

窓の外、太陽の陽が陰りを見せ始めるころにようやく蓮は目を覚ました。枕のそばに転がったアナログの時計を見てみると七時を示している。夏の陽の長さゆえにまだ明るいものの完全に睡眠過多だ。蓮はあわてて起き上がると夕食の準備を始めた。

蓮は食事をとり終わるとまたもや机に向かう。

魔術書のページはまだ多く残っているが、既に分かっていることがいくつかある。

全てあげればきりがなが代表的なものでは「あらゆるものには固有に精霊が存在すること」「精霊たちは直接的な行使ではなく、いわゆる自然現象などを通して干渉しバランスを保っているということ」。そして、「神とは天使的精霊の上位種であり、それに至る経

緯こそ人間や心ある者たちによる”信仰”だということ」だ。
あと重要なことはキリスト教に限ったことではなく他の宗教に見られる天使や悪魔たちも同様に精霊として認められており、その間には共通した特徴がみられることから相互関係にあるというものだ。

ノートにまとめた内容を一度ざっと読み返すと蓮はそれを机の上に置いてベッドに入り、強く目を閉じる。
思い返すのは先生に関する記憶。

初めて孤児院の、教会の前で出会ってからどれほど先生と言葉を交わしただろう。今になって思えばそれほど多くなかった気がする。
蓮が小学校の高学年に入るか入らないかの時には先生は蓮に孤児院での事務を任せて書斎に籠ったり、ふらつと外出することがあった。
蓮はそれを信頼の証と受け取りただ仕事をこなす日々を繰り返していた。

そんな生活の中で二人の間には一つの習慣があった。習慣というにはあまりにおぼろげで蓮自身今の今まで忘れていた。他の孤児とは違い、蓮と先生だけが知る一つの習慣。

それは毎年クリスマスの日、全くプレゼントを欲しがらない蓮に先生がある話をしてくれるというものだ。それは決まった内容で、毎年何一つ変わることなく繰り返された短い物語。それでも知識欲だけは旺盛な蓮は、飽きることなくその話を聞き続けた。

一年に一度きりの物語を。

「手掛かり？」（後書き）

次回は物語の内容をそれだけ別個にして書きたいと思います。

あと現在書いているこの作品は「悪魔の奏でる」シリーズのエピソードゼロ的な扱いにするつもりです。つまりこれが終わった後は悪魔としての蓮君の活躍を書くということで、スターウォーズみたいな公開順序にしていきます。

「物語」

第二十六部 物語

コンコン??????

ノックの音が響く。

12月25日。冬の夜の冷気は教会の廊下にも入り込み、肌を刺すような空気が辺りを包み込んでいる。同時に空気は澄み渡り、些細な音でもはつきりと耳まで届いてくる。

「先生、蓮です。入ってもよろしいでしょうか？」

「おお、ドアなら空いているから。どうぞお入り・・・」

今度の誕生日で10歳になる少年、里宮 蓮は丁寧な口調で了解を得ると、真鍮製で廊下の空気同様に冷たくなったドアノブを回して部屋に入った。

暖炉の薪がパチパチと軽やかな音を立てて燃えている。書斎に置かれた木製の机と一式の椅子に座りながら、先生は蓮の方を見て微笑んでいた。蓮もそれに穏やかな笑みで返し、一度腰を折って頭を下げると暖炉の前に置いてある客人用の一人掛けソファに座る。その柔らかな感触に体が深く沈み込んだ。

「今年のクリスマスももうすぐ終わってしまうが……本当に何もいらなかったのかい？」

「はい。……けど、またあの話をしてくだされば」

「ああ、”愛を捧げた悪魔の話”かな？……いいだろう。少し待ちなさい」

すると先生は椅子から一度立ち上がると蓮の向かいにあるソファに腰かけ、呼吸を安定させるように深く息を吸って吐くと、話し始めた。

????????????????????

はるか昔、まだ天使や悪魔、神様もこの大地を人間と同じように歩いていた頃のこと。まだ精霊たちに天使や悪魔という区分がされていないかった頃の話だ。

あるところに一人のまだ幼く未熟な精霊がいた。世界に産み落とされた時から孤独で誰から愛されることもない。春の暖かな風も夏の煌めく日差しも、秋に実る鮮やかな果実も冬の柔らかい雪も彼には近づくこととせず、いつも一人で遊んでいた。心許せる存在など知らない彼はそれを寂しいと感じることもなく、ただ漫然とした日々を繰り返していた。

そんなある日、彼の耳に誰かの泣き声が聞こえた。生まれてからずっと一人だった彼は初めて聞く他人の声に導かれるようにその方向へと向かった。そこには彼と同じように一人ぼっちの少女が泣いていた。彼はその少女にそっと近づくとその姿を眺めてみる。その少

女はこちらに気付いていないようだが、もう手を伸ばせば触れられる距離だった。

「ねえ、僕の声が聞こえる？」

精霊はなぜかその少女のことが気にかかり、できるだけ優しい声で話しかけた。すると少女はゆっくりと顔をあげ彼の目を見つめた。とても美しい人間の女の子だった。だがその顔は涙に濡れ、着ている白い服も黒く汚れていた。

「……あなたは……だれ？」

少女の言葉に精霊はたじろいだ。今まで誰とも触れることなく生きてきた彼には名前など必要なかったのだ。故にそんなものは持っていなかった。

「それは……わからない……」

精霊は戸惑い途方に暮れた。目の前の少女に触れてみたい。だけど自分にはそれが許されないように思えて。そんな風に苦悶していた精霊に少女は言う。

「……私ね、愛してくれたみんなを失ってしまったの。愛していた人たちもみんな。それがどうしようもなく苦しくて、胸のあたりが痛かった。それでここに蹲っていたら、あなたがきたの」

精霊は彼女の感じるものが何かはわからなかったが、それがこの少女を苦しめるのなら自分がどうにかしてやりたいと、そう願った。彼の存在に意味が生まれた瞬間だった。

そして同時に”悲しみ”が生まれた瞬間でも。

「・・・君さえよければ、僕がそばにいるよ?」

「・・・え?」

「自分の名前もわからない僕だけど、君が辛いのなら君が必要とする分だけ、そばにいる。君の中で、君を包む。失うことを、手に入ることに変えてあげる。空虚な僕に意味を与えてくれた君に、傷を癒す時間をあげる」

精霊は自分の想いを伝えた。

あとは彼女が決めること。

たったの数分がもう何年にも感じたとき、

「・・・・・・・・お願い・・・そばにいて・・・」

少女からの言葉が、返ってきた。

それから精霊は言葉の通り、ひたすらに少女のそばに在り続けた。時に語り掛け時に耳を傾け、少女の心に寄り添い続けた。何年も・・何年も・・。

やがて少女は大人になった。強さと優しさと希望を秘めた、麗しい女性に。しかし精霊は、あの時の姿のから何一つ変わらない、ずっと幼く無垢なまま。いや、少女に対する愛を持った時点から少しずつ彼は淀んでいたのかもしれない。いつしか愛情を感じていたこの女性の隣に立つに相応しい存在になることを、どれほど渴望したことが。

しかし彼の願いはかなわなかった。

彼女のために存在するはずが、依存していたのは彼の方だったのだ。精霊は胸の痛みと共に自分の身に訪れた変化を察知した。彼女の纏う白い服が出会った時には黒く汚れていたその布が清くなるほど精霊は弱り濁っていく。

世界では戦いと平和が繰り返されていた。多くの民の血を見た少女はいてもたってもいられずに彼らのもとに寄り添った。彼女はその清らかな心で人々を洗い流し、慰めた。精霊もまた彼女を支えるためにその後を追った。

しかし、その中で彼はあることに気付いた。

少女がどれほどに人々を癒しても、彼が彼女に近づくほどに彼女は冷気を伴ってしまう。精霊以上に深く愛を知っている彼女は心ある者たちのそばで彼らを支えることを願う。それなのに自分のせいで彼女が弱さに囚われてしまう。

そして精霊は悟った。

少女が清く温かくある為には、自分がその穢れを背負わねばならないことを。

そして彼は意思を固めた。少女を心ある者たちに明け渡し、己が身を刃に変えて彼らを引き裂く覚悟を。

彼女のために悪を背負い、自らを貶めるために。

少女は精霊が心ある者たちを傷つけたことを知り、詰問した。

「なぜあなたはそんなことをするの？私があの人たちのことを大切に思っているのはあなたも知っているはずなのに・・・」

彼女の言葉に精霊は顔を伏せてこう返した。

「君のことが嫌いなわけじゃない。でも人々は、そして僕は知ってしまった。」涙は悲しみだけのものではない」と。僕はただ君のそばに変えることだけをすればよかった。君が僕を望んだ時だけ。けどいつからか僕の方が君を求めていたんだ。君を支配したいと思うほどに・・・。だからこそ僕は彼らを切り裂いた。君が誰からも愛され続けることのできるように。二度と君と交わることはないように・・・。

僕はあなたを愛しています。はるか昔初めて君を知ったその時から・・・。僕は君と共にありたいと願い、それが許されないことだと知った・・・。ああ、どうしてこんなことになってしまったのだろう。

あなたのためにもっと多くの喜びや愛を、優しさを捧げることができたなら！いつまでもそばにいられたはずなのに・・・」

こうして二人は離別した。

少女は人々の喜怒哀楽のそばに寄り添い続けたが、精霊の少年はただ一つの存在意義しか持たない。彼女から切り離され憎まれた彼は行き場を失い、ただふらふらと漂っていく。愛する者のために得た力は愛する者から己が身を遠ざけてしまったのだ。

張り裂けそうな胸の痛み、かつて少女が感じたそれに精霊はようやく気付く。

そして彼女との唯一の思い出であるそれさえも彼は世界に返すことを決めた。光が影を濃くするように、彼女のぬくもりを体内に残すことに耐えられなかったのだ。四肢を引き千切って、自身が持つ残りわずかな愛をその心臓に託し涙に贈った。

そうして悲哀は世界に還り、精霊は死んだ。

最期にこんな詩を残して、

僕は願う 君に温もりが訪れることを
僕は願う 君が誰かを温めうることを

そのために僕は君を去る

僕は君の冷たさを背負って 空に還ろう

そして空からも嫌われて 大地へと突き落とされる

大地に堕ちれば 焼き尽くされて 再び昇る

君は心ある者たちと共にあればいい
僕は一人で夢を見るから

ただ彷徨つては 堕ちた夢を

????????????????????????????????????

「物語」(後書き)

このお話はある意味作品全体に関わってくる大きな車軸のようなものでもあります。

少女と精霊、いずれも分かりやすいですが象徴的で比喩的な意味合いです。

「手掛かり？」

第二十七部 手掛かり？

「・・・はあ、ずいぶんと懐かしい夢を見たな・・・」

蓮はぼんやりと呟くとベッドから体を起こす。いつの間にか眠っていたようだ。短い前髪を掻き上げて軽く目をこすると、手の甲に僅かに濡れた感触があった。よく見ると枕のカバーにもうつすらと涙の跡が残っている。

「あ・・・。。泣いてたのか・・・僕・・・」

病院での一件以来見ていなかった自分の涙を何の感傷もなく洗面台で洗い流す。鏡に映った自分はその真つ赤な目でこちらを見返していた。多少頭が疼くものの、蓮はタオルで顔を拭くと何事もなかったように朝食の準備を始めた。

長い休みを得ると大抵の人間は曜日の感覚を失ったりするものだが、蓮は正確に今日が火曜日であることを記憶していた。だからといって何をするということもない。ただ今日は最近の習慣となっている資料をまとめたり、時東の手紙を読む気には慣れなかっただけ。その代わりに先生が遺した最後の手紙を何となしに眺めながら、蓮は言葉にできないもやもやしたものを感じていた。動いていないと不安になるのに何をすればいいのか分からない、そんな心境。

（今になって思い出すと、あの話って先生の天使観や悪魔観に近い考え方で進んでるんだよね……。先生以前からそういう考え方もあったってことかな？）

天使や悪魔という区別がなされるよりも昔の精霊の話。いつから人間はそういったものに対する信仰を失ったのだらう。信仰とまで言わずとも今やその存在さえ否定するのが多数派だ。

かく言う蓮もちよつと前までは非科学の存在など信じていなかったし、宗教はあくまで精神的安定や民族強化に使われる一種の心理的補佐の役割しかないと考えていた。

（でもいつまでも目を逸らしてるわけには、いかないよね…）

聖水や典礼の言葉を聞いたときの苦しみ、引き出し裏の魔法陣。

いつの間にか常識外の範疇に取り込まれ、こうして悩まされているルチアのような狂信者もいれば、先生のような寛容さを持つ人もいる。一概に宗教と言っても難しいものだ。

蓮は大きいため息をつく。ソファに座りこんで天井を見上げる。シミ一つない、いつぞやの病院のそれを思わせる白さに蓮は軽い寒気を覚えた。

そうしていると、ふいに玄関のベルが鳴った。
その後に聞きなれた声が入る。

「蓮？お昼だよ？」

ああ、なんて恥ずかしい。ドアの向こうでは由香が蓮の名前を呼びながら起きてる？などと大きな声で聴いている。これが近所の耳に入った日にはどんな噂が立つかわからない。蓮は慌てて玄関へ向かうとドアを開いた。

「ちよつと由香、恥ずかしいから大きい声で呼ぶのはやめてくれな
いかな？」

「えへへ、ごめんごめん」

由香は悪びれることもなく無邪気な笑みを浮かべながら軽いノリで蓮に返す。その後ろには珍しく香奈恵も来ていた。こちらは少し申し訳なさそうな顔で苦笑しており、二人とも手には大きなボストンバッグを携えている。蓮はそんな二人に小首をかしげると部屋の中に招き入れた。

「で、今日はまたどうしたんですか？」

蓮はリビングの隅に置かれた、二人が持ってきた大きなボストンバッグに目をやりながら尋ねる。どこかに旅行でも行くような荷物の量だが、にしてはわざわざ自分に伝えることもないだろう。交流があるとはいえ、そこまで強い関係ではないのだから。

「ごめんなさいね、蓮君。ホントは前もっていうべきだと思ったんだけど、由香がどうしてもそうしたいって言うから・・・」

「ちょっと、お母さん！私が提案した時にはお母さんも面白そうにしてたくせに！」

「そ、それは・・・」

目の前で繰り広げられているやり取り、というか問答に蓮は一人ついていくことができない。ますます混乱していると由香が蓮に向き直って得意顔で話し始める。

「あのね、蓮。前に蓮がうちに泊まったことがあったでしょ？」

「あ、うん。夜中に公園で会った時だよね？」

あれから彼是^{かれこれ}二か月近くになる。その間にも色々あって、今尚その渦中にいるわけだが。時間の流れは早いものだなあ、などと蓮が考えていると

「そう、それ。でね？蓮がうちに泊まったのに私たちはまだ蓮の家に泊まってない。・・・これって不公平だと思うの」

なんとなくだが話が読めてきた。おそらく由香の次の発言は、

「そこで今日から一週間、蓮の家にお泊りすることになりました！」

・・・案の定だった。

提案してきた期間がやや長くは感じたものの、それ以外はおおむね予想通り。

しかし蓮はこの提案に少しためらいがあった。

確かにあの時のことを感謝しているし、以前からあの時の恩を返したいとは考えていたが、蓮のアパートでは十分なおもてなしをできるでもなく、ましてや二人の女性を自分などの家に招くなど逆に失礼ではないかと思っていたのだ。

だが、

「どうせ蓮のことだから、この家じゃ十分なお返しができないって思ってるんだろうけど、私たちがしたいのはそんなことじゃないの。さっき言ったようなことも抜きにして、私たちが止まってみたいなあって思っただけだからね？蓮は特に変わったことしようとしなくていいんだよ」

蓮は自分の考えていたことを正確に言い当てた由香に驚きながらも考え直してみる。流石に何の気負いもなくというのは無理な話だが、可能な限りの努力で彼女たちへの恩返しをすることはできるかもしれない。

「由香の言ったように、これは私たちのちよつとした我儘って思っ
て頂戴？それで・・・一週間のお泊り会、構わないかしら？もちろん嫌ならそう言ってくれればいいし、もっと短い期間でもいいのよ？」

香奈恵もまた、少しドキドキとした表情で尋ねてくる。なんだかんだで楽しみにしていたのかもしれないし、何より一人で暮らす蓮のことを気にかけてくれるのだろう。

由香も、香奈恵も。

蓮はそんな二人の思惑を読み取って小さく微笑むと快く承諾した。

「手掛かり？」（後書き）

10 / 13 改変

「宿泊？」（前書き）

後半に由香の心情をピックアップしてみました。

「宿泊？」

第二十八部 宿泊？

由香と香奈恵の二人の滞在が決定した後、三人は大まかな予定を話していた。

蓮は最初頑なに一切の家事は今まで通り自分がこなし、二人には寛いでいてもらいたいと主張していたのだが、当の二人から激しい抵抗にあい、特にお互い気負いことはなく、家事も各々が気付いたときにするという内容で収まった。何でも旅館やホテルに泊まりに来たのではなく、“蓮の家”に泊まりに来たことが重要らしい。

ともあれ全員の確認が取れたところで、さっそく今日の夕食の準備に取り掛かる。

ここで新事実なのだが由香はあまり料理が得意ではない。よって調理は蓮と香奈恵、由香は皿を並べるなどといった役割分担となった。蓮と香奈恵はそう広くないキッチンで肩を並べて、楽しみに会話を挟みながら献立を考えて調理を進めていく。一時の母親でありながらそれを感じさせないような若さを保つ香奈恵と、遠目に見ても整った、落ち着きのある柔らかな顔立ちの蓮。そんな二人が台所に並べば、それはまるで夫婦のように見えなくもない。

由香はそんな光景を

（むう……。私も料理覚えようかな……。）
少し恨めしそうに見ているのであった。

「ごちそうさま・・・」

一番最後まで食べていた蓮が手を合わせると一日目の夕食が終わった。由香も交えて食器を片付ける頃には夜の八時になっていた。

「そついえば寝るところはどうしたらいいかしら？」

香奈恵が尋ねる。現在彼女たちが知っている蓮の家の間取りは蓮の自室とリビング、キッチンと一体になっているダイニングぐらいだ。他にも部屋があることは扉の存在から分かるが、今までに入ったことはない。

「一つ客間みたいなものがあるんですけど、そこに二人で寝るのはちょっときついんです。だから二人は僕の部屋で寝てください。僕はそっちの客間の方に行きますんで」

その言葉に由香と香奈恵は少しためらう。もちろん蓮の部屋が嫌なわけではない。夏休みに入ってから特に由香は頻繁にこのアパートを訪れている。蓮の自室に強行突破を仕掛けたことも一度や二度ではなかった。その中で彼の部屋の不思議な居心地の良さに魅せられ、母親にも蓮の部屋がいかに綺麗で、まるで自分の部屋かと思うほどに暖かな空気をしているかを嬉々として語っていたのだ。

そんな二人でも躊躇う理由は、仮にもこの家（アパートの一室であるに過ぎないが）の主である蓮を客間に追いやるというのは流石に気が重い、ということだ。至って常識的ではあるが相手が蓮となる

とことさらである。

しかし蓮に連れられて実際に部屋を見てみると言葉の通り、一人で寝るには問題なさそうだがそれ以上になると明らかに容量オーバーだった。四畳半ほどの部屋に小さい箆笥が一つ置かれており、布団が入った押入れがあるだけで、大の大人にもなれば一人でも狭苦しいかもしれない。

「これじゃあ……仕方ないわね……」

「そう……みたいね……」

結局由香と香奈恵は夜は蓮の部屋で眠ることになった。

先程まではあれほど心苦しそうな表情をしていた二人も蓮の部屋に入ると一転して楽しそうな笑顔を見せ、香奈恵も

「ホントに不思議ね……。ずっとここで暮らしてたみたいな気分だわ」

と驚いた様子だった。

ちなみに四条親子の滞在中はずっとこの部屋を使用することになり、蓮は一度二人を部屋の外に出してそそくさと自室に入ると、先生の本などの類を紙袋にまとめて客間に持って行ったあとで二人に部屋を明け渡した。

この行動が由香と香奈恵に「蓮君もそういうお年頃」というピンクなイメージを持たせたのは仕方ないことだろう。

これらの悶着の末にようやく寢床が決まると、最後に入浴の時間である。洗面台と擦りガラスのドアを一枚で隔てた浴室は日頃しっか

りと掃除されているため、この手のアパートとしては非常に清潔な状態を保っている。

入浴の順番は特に審議することもなくその場の流れで蓮、由香、香奈恵の順となった。

唯一香奈恵が珍しく茶目っ気を出して蓮に

「一緒に入ってあげましょうか？」
と言い、それに由香が猛反発続いて便乗しようとしたのは置いておこう。

ぽちゃん、

天上から滴ってきた雫が湯船に張った湯面に落ちる。由香は立ち消えていく波紋を湯の中に体を沈めたまま眺めていた。夏場なので湯を張るのは熱すぎるのではないかと思っていたのだが、入ってみれば案外気持ちいいものですかりまどろんでいた。由香はぽわわわとした頭で今日のことを思い返してみる。

蓮の家に泊まってみたと思ったのは彼女が自身の恋心を自覚してから少し経った頃からだったか。あの一目惚れのような出会いから思いを重ね続け、つい二か月ほど前に進展を見せ始めた。決して良いものではなかったが蓮の秘密にも触れ、ちよつとずつ打ち解けてきたとも思う。でも蓮からすればまだ友人の枠を離れないのだから。自分はもっと、もっと近くにいることを望んでいるのに……。

「・・・・・・はあ・・・・・・」

憂鬱になってきた由香は深いため息をつく。でも諦めるつもりはない。蓮の事情を知ってますますそう感じた。

妙な同情ではないが両親がいないということがどれほど大きな事が由香は知っている。幼いころに父親を亡くしたことで彼女もまた強い悲しみを感じていた。いつも優しくかった母親が頼れる程に涙を流すのを見て自分が支えなくてはと咄嗟に隠したものの、部屋の中で一人泣いたことは今も忘れられない。高校に進学するときには随分と落ち着いていたものの、友達の話に出てくる家族のことを聞いていると、やはり胸が痛んだものだった。

それでも自分には母親がいる。香奈恵という掛け替えのない肉親が。

しかし蓮にはそれさえもない。この前の事件で名付け親であるという恩人まで失ったのだ。なのに蓮が涙を見せたのはあの病院での抱擁のときだけだった。次の日にはいつものように穏やかな笑みで自分たちを迎えた。寂しさの陰も見せることなく。

そのとき以来由香の心には恋だけでなくある使命感、もしくは願望のようなものが芽生えていた。それは

（蓮に涙を流させてあげたい・・・・。嬉しいときも悲しいときも苦しいとき、愛おしいとき・・・・。考えなくても、泣けるように・・・・）

由香は決意を新たにさっそく蓮へのアプローチを考えるのだった。

（そういえば、蓮って私より前にこのお湯に入ってたんだよね・・・？）

・・・つゴクリ

緊張のあまり”生唾を”飲む。
そんな里宮家一日目の夜だった。

「宿泊？」（後書き）

自分で書いてて展開に緩急つけすぎだろうかと心配になったりする
この頃です。

あと今更なんですが、この作品を継続的に読んでくださってる方っ
ているのでしょうか？

「宿泊？」

第二十九部 宿泊？

全員の入浴し蓮が今日の浴室の掃除を終えると三人は就寝の挨拶を告げ、それぞれ部屋に入っていく。由香と香奈恵は普段蓮が使っている部屋で、由香がベッド、香奈恵がフローリングに蓮から借りた布団を敷く形で眠ることにして、しばらく話をするにした。

「よかったね、お泊りできることになって」

「そうね、蓮君を客間に追いやることになってしまったのは心苦しかったけど・・・」

そんなことを言いながらも香奈恵は蓮の部屋を興味津々に見まわしている。由香とおそろいのピンクのパジャマと長い黒髪をゴムで一括りにしている姿はどこからどう見ても由香の姉であった、母親ではなく。

「それにしても蓮の部屋ってホント何もないよね」

由香がベッドに腰掛けたまま言う。事実蓮の部屋にあるものと言えば由香が今座っているベッドと簡素な机に椅子、それほど大きくはない本棚に入れられた数えられる程度の本程度だった。一応クローゼットはあるのだが、さすがにそこまでは見ていない。今回の宿泊の間、蓮の部屋にあるものはだいたい自由に使っても構わないと事前に言われていたのだが流石に仕舞い込んであるものまで引っ張り出すのは非常識だろう。

二人して部屋の中を見える範囲で探っていると香奈恵があるものを見つける。

「あら、これ何かしら？」

机の横に立てかけるように置かれたそれは、古びた感じの黒い革装の箱で上蓋の右下あたりに擦れた金字で「tristitia」と掘り込まれていた。持ってみるとそれなりの重量感があることがわかる。見るからに古美術なその箱は二人の興味を強く引いた。

「ねえお母さん、開けてみよっか？」

「蓮君の了解も無しに開けるのはちよつとまずいんじゃない？」

由香は目を輝かせて箱を見つめていたが、母親の窘めに肩を落としてとりあえずは明日蓮本人に聞くことにした。香奈恵はそんな娘の様子に苦笑しながら元あった場所に箱を戻すと、蓮の本棚から一冊を選んで読み始めた。もう3年以上も前に出た作品で、そこまでメジャーではない怪奇小説だった。

由香と香奈恵はそれぞれ本を読み、しばらく静かな時間が部屋に流れる。そんなとき唐突に香奈恵が娘に話しかける。

「ねえ、由香？」

「由香は、蓮君のことどう思ってる？」

香奈恵は目で文を追ったまま問いかけた。

「どつつて、どついうこと？」

由香は一瞬蓮への想いを見透かされた気がしてドキリとしたが、平静を装って問い返す。本から目をあげて母親を見てみるといつの間にか彼女もこちらを向いて、どこか真剣な顔をしていた。

「由香も気づいてるでしょ？こんなこと本人がない所で話すのも不謹慎かもしれないけど……。蓮君は親の顔もその暖かさも知らなくて……。そして親同然の存在だった人が亡くなっても、声を出して泣くことができないでいる……。その理由が生まれつきなんて単純なことじゃないってことも」

由香は自分の胸が再び跳ね上がるのを感じた。そう、それはまさに由香も先程まで考えていたことだったのだ。蓮が彼女たちとの抱擁を交わしながら落としたあの涙でさえも、どこか彼自身の涙ではなかったような気がするのだ。どこか自分たちの悲しみを汲み取って流したような……。

「それにね？思ったんだけど、蓮君ってまだ何か隠してる気がするのよ。それが隠すという意識があつてのことなのかは別にして、誰にも言わないでいることが……」

「そ、そりゃ人だったらそういうことの一つや二つあるんじゃないかな？」

口ではそう言ったものの由香は蓮の性格を考えるとその「一つや二つ」がとてつもなく重要なことである可能性が高いことを思い出し、さりげなく視線を逸らした。白いベッドで眠り続けていた蓮の姿が脳裏をよぎり、不安が心を占める。あの赤い瞳が今たまらなく見たかった。

「もちろんそうだけど……。何なのかしら、この感覚……」

香奈恵もまた不安げな表情でうつむいている。いつかの母親の消沈する姿に重なって見えた由香はゆっくりとした口調で慰めるように

「まあ、これから一週間のお泊りの中でちょっとずつ分かることもあるよ、きっと」

と言って励ます。それは同時に自分にかけた言葉でもあることを由香はぼんやりと感じる。

それに香奈恵は笑顔で答え、夜遅くまで二人の談笑は続いたのだった。

「宿泊？」（後書き）

由香と香奈恵の性格的特徴を追加していくような内容になったかと。
あとそろそろ前もって書いてたストックが切れるので更新速度に遅延が起きるかと思われます。

「宿泊？ - 1」 (前書き)

話が長くなったので次回と二部構成にします。

「宿泊？ - 1」

第二十九部 宿泊？

由香と香奈恵の里宮家宿泊の2日目の朝、蓮は誰より早く目覚めていた。他の二人を起こさないように注意しながら調理をはじめ、合間を縫ってリビングやダイニングの整頓を進めていく。洗濯物はやはり女性のものであるということ二人に任せている分、残りの家事は自分がしてしまおうと考えていたのだ。

（それにしても、家に自分以外の誰かがいるっただけでこんなに違うんだな・・・）

昨夜押入れから出した布団で眠ろうとしたとき、自分の部屋から聞こえてくる由香と香奈恵の声が聞こえてきた。今までは一人であることを特に気にかけるでもなくこのアパートで暮らしてきた。その為か慣れない状況に落ち着かなかったが、次第に壁の向こうから聞こえてくる二人の笑い声が心地よくなっていつもより早く寝てしまったのだ。

かつて孤児院で子供たちの世話をしていたとき、夜遅くまで起きてお喋りをしている孤児の声に不思議と安らいでよく眠れたことを思い出す。

「おはよう、蓮君」

香奈恵がパジャマのままダイニングにやってきた。長い髪を由香と

同じようにゴムで止めており、ますます由香の姉のように見えてくる。蓮よりほんのちよつと低い身長の為、蓮を長男とする兄妹と見ることが出来るかもしれない。

「おはようございます、香奈恵さん」

蓮は一度調理の手を止めると向き直って挨拶を返す。蓮は既に私服に着替えており、デパートで安売りされていたピンクのエプロンをつけている。少し女の子っぽい気がしないでもないが全く違和感がない。そんな蓮に香奈恵はなぜか少し頬を染めながら

（こうして見ると、蓮君ってすごい中世的な顔立ちなのね…。女の子と言っても通じるかも）

当人が聞けば、苦笑で返されるようなことを考えていた。

「由香はまだ寝てるのだけど、もう出来るのなら呼んでくるわよ？」
「それじゃあ、お願いしますね」

蓮は香奈恵が由香を呼びに行っている間に皿を並べていった。

「・・・おはよう」

「おはよう。・・・大丈夫、由香？」

クマが出来るほどではないもののとても眠そうな顔をしている由香に蓮は心配げに声をかける。昨夜相当夜更かししたらしい。蓮が眠りについたのが大体零時ぴったりだったから、彼女たちはそれより

遅くに寝た筈だ。にしては香奈恵は平気そうなのは主婦のスキルだろうか。

由香がふらふらとした足取りで椅子に座ると香奈恵も席に着き、蓮もエプロンを外して座った。

あれほど眠そうにしていた由香も食べているうちに目が覚めてきたのか、美味しそうにご飯を口に運んでいた。今日は朝食は和食で白米と味噌汁に鰯、そして緑を入れるためにちよつとしたサラダを加えている。

「うーん、美味しい！蓮ってさどんな料理が作れるの？この前うちに来たときはフランス料理だったし今回は和食でしょ・・・」

「基本的に何でも作れるんじゃないかな？周りの子供たちに中々グルメな子もいてね。その子たちを満足させようと思ったたら自然と・・・ね」

そもそも孤児院での経験から料理を始めた蓮らしい理由だ。実際彼の作る料理は和食、洋食、中華にイタリアン、フランス料理もあればベトナム料理やギリシア料理まである。高校生の調理スキルとしては破格だろう。四条家の二人もこれには驚いたらしく、何事もなく顔で食べ続ける蓮を見ながら目を丸くしていた。そして内心で、

（もうこのまま蓮の作る料理食べててもいいかな？今更勉強始めても追いつけなさそうだし・・・）

（私ももう一度料理の勉強しようかしら、蓮君に教えてもらうのも悪くはないわね・・・）

そんなことを考えていた。

朝食も終わり由香と香奈恵の二人は一度普段着に着替えてから、リビングから出たところにあるベランダで干していた洗濯物を取り込み、代わりに布団を干していく。初日ということで特に量は多くなかったし、夏の日差しもあってふわふわ温かく乾いている。

蓮の分の洗濯物（下着など）を畳む際に二人とも少し顔を赤くしていたのは、由香は納得できるのだが香奈恵はどうなのだろう。娘はそんな母親の反応を見てちよっぴり危機感を感じる。香奈恵と蓮はまさに親と子ほどの年齢の差がある。だが今のご時世そんなことは恋愛対象外の理由にはならない。

「・・・そ、そういえば、お母さん」

「ん、何かしら？」

母親は手を止めて娘の顔を見る。由香はとつさに母に声をかけたのだが何を話すかは決めていなかった。そこで昨夜のことを思い出し、

「これが終わったら『あの箱』のこと、蓮に聞いてみよっか？」

と取り繕ってみる。香奈恵も何ら不自然なものを感じなかったのか笑顔で首肯して見せ、そこからは二人とも無言で片づけを続けた。つた。

その頃蓮は臨時的な自室となった客間で例の手紙を読み返していた。といっても真面目に解読しようというような体^{てい}ではなく、壁に寄りかかったままぼんやりと紙面を裏返したりしていただけた。全く進展がなく疲労も溜まっていたのか、真剣に考え続けていると後頭部が痛むようになってきた。肩も凝り固まり、試しに回してみるとボキボキという鈍い音と共に重苦しい痛みが頭まで響いてくる。自然と口が開き、

「うう・・・」

としまりのない声が出る。

蓮は手紙を持った手を床に落とし、深く壁にもたれると目を閉じた。

由香と香奈恵は衣服を畳み終わると蓮がいる客間に向かった。

「れ〜ん。ちょっと話があるんだけど」

由香がドアをノックしながら名前を呼ぶも返事がない。もう一度名前を呼んでみるものの反応がなく、由香と香奈恵は顔を見合わせる。客間のドアをそつと開けてみる。

そこには壁にもたれて座ったまま、眠っている蓮がいた。部屋の中には小窓が一つしかない為、そこから差し込む日光だけが唯一の光源となっている。蓮が眠っているのはその小窓の下だった。

ので、逆光で顔は陰っっていて見えない。

「蓮？起きてー」

軽く体をゆすぶりながら彼を起こそうと試みるもなかなか目を覚まさない。香奈恵も近づいて蓮を起こそうとするが、その前に手が止まって彼の顔をじっと見る。

「どうしたの、お母さん？」

「今更なんだけど蓮君って・・・ホントに綺麗な顔をしてるのね」

その言葉に由香は驚く。蓮の近くに来たことで逆光も収まりその顔をしっかりと確認できるようになっていた。まさか自分の肉親に恋敵が出てくるのかと思い、気が気でない。しかし香奈恵が続けて言った言葉にそんな焦りは吹き飛んだ。

「なんていうか・・・真っ白で・・・無垢、って言ったらいいのかしら？違うわね・・・」

由香はもう一度蓮の寝顔を見てみる。もう1年以上も前に朝の教室で見たときには気付かなかった。

よく言えば無垢、悪く言えば・・・空っぽ・・・。

蓮が自分たちと違う世界の住人であるような、病室で眠り続ける蓮に感じたのと同じ感覚を覚え、由香はいてもたってもいられず蓮を起こそうとする。

「蓮！蓮！？起きてー!!」

先程よりもずっと強い揺さぶりと大きな声にようやく蓮は目を覚ま

した。ぼんやりとした目で由香と香奈恵を捕らえると静かに微笑んで言った。

「ああ、ごめん。ちょっと休むつもりが寝ちゃってたみたいだ」

いつもと同じ笑顔。さっきまでの空っぽな表情とは違い、そこには確かな温かさを感じる。由香と香奈恵はほっとした顔で小さく笑うと、今までの不安を断ち切るような明るい声で言う。

「ねえ蓮の部屋にあった、黒い箱のことなんだけど……」

「ん？……あああれか……。あれはフルートだよ」

「宿泊？ - 2」

第三十部 宿泊？ - 2

厚い日差しがアスファルトを焼き、立ち上る陽炎かげろうが数メートル先の視界を歪める。セミの鳴き声は鼓膜を突き、肌からはじりじりという音が聞こえてきそうだ。

そんな炎天下を一人の男が歩いていった。スーツの上着を脱いで片手に持つビジネスバッグにひっかけ、もう一方の手に持ったハンカチであふれ出る汗を引く切り無しに拭っている。がたいのいい体格が災いして白いワイシャツは肌に張り付いてしまっており、大きな喉仏はごくろりと水分を求めてあえいでいるようにも見える。

この男の名前は井上 浩太。里宮牧師の事件の捜査にあたっていた所轄の捜査部長である。この猛暑の中、わざわざ彼が足を運んでいるのは、事件のもう一人の参考人である里宮 蓮の自宅である。捜査が開始されたから早くも一月が経ち、未だ解決の兆しが見つからない状態で上層部から届けられたある通達を蓮に伝えるためだ。

（はぁ・・・気が重いな・・・）

これから自分が伝えに行く内容が捜査の進展につながるものであれば彼もここまで憂鬱にはならなかっただろう。高校二年生という多感な時期に、いやそれまでも、親の顔を知らず一人で暮らしてきた少年に井上は激しく同情していた。だからこそ今回の通達は彼にとっても非常に辛いものだったのである。

（それでも、行かなくては・・・）

マンホールの上には焼き焦げたアリの死体が転がっていた。

??????ピンポーン・

「あら、誰かお客さんかしら？」

これから蓮の部屋に向かい、フルートの箱を開けようとしていたところに玄関のベルが鳴る。由香と香奈恵はリビングのソファで座って待ち、蓮は玄関に向かいドアを開けた。

「はい、どちらさまで・・・あなたは・・・井上さん？」

蓮の真紅の瞳の中、ドアの向こうには流れ出る汗を必死に拭う井上刑事がいた。

「どうぞ・・・」

「ああ、ありがとうございます」

ダイニングのテーブル、蓮が渡したタオルで顔を拭く井上に香奈恵がお茶を差し出す。豪快にそれを飲み干し、タオルを丁寧に畳んだ。香奈恵はタオルを受け取り洗濯機に入れに行く。その間に蓮は井上の向かいの席についていた。由香はその右隣にそそくさと座り、香奈恵も戻ってくると左側に座る。

それを見ると刑事は顔を引き締めて話し始めた。

「今日来たのは蓮君の保護者でもあつた里宮牧師殺害の事件に関することです」

「何か分かつたんですか!？」

蓮よりも早く由香が尋ねる。その声は蓮以上に焦燥に満ちているようだ。

「・・・それが・・・」

刑事の齒切れの悪い答えに三人が訝しげに刑事を見る。エアコンと冷蔵庫の駆動音が煩わしく唸り続けていた。

「・・・すみません。単刀直入に申し上げますと、先日警視庁の上層から直々の通達により『本件に関する一切の捜査を中止し、情報の棄却。捜査行為を続行した警官への嚴重注意』が決定されました・・・。それと、押収した証拠物の即刻破棄も・・・」

この理不尽な通達に呆然となつたのは由香と香奈恵だった。蓮はあの夜、ルチアの発言の中に自分の両親の事件に関する捜査妨害が行われていたことを思い出し、今回もその可能性は考慮に入っていたのだ。

しかし残りの二人はそんなことなど知る由もないので、目の前の明らかな公務の放棄に驚きを隠せない。

呆氣にとられたのも束の間、顔を赤くした由香が今にも怒鳴ろうとしたそのとき

「・・・本当に、本当に申し訳ありません!公務員としての職務を

全うするどころか、自分は結局上の指示には逆らえませんでした・。
・。お亡くなりになった牧師が里宮君の保護者であり、唯一の家族
のような存在だと知りどうか、どうか真相をと思ってきたのに・
・。この様です・。本当に・。すみませんでした！！！」

椅子から立ち上がり悲痛な声で謝罪する井上。それは刑事としての
役職のみならず、蓮の救いになることを決めていた一人の男として
の謝罪でもあったのだ。

井上 浩太という男は幼い頃からそうだった。人一倍正義感が強く、
早い内から警官になることをめざしていた。感情移入が激しく、警
官としては失格と言えるほどに被害者に対する同情をしてしまう。
そのせいで先輩の刑事からきつく言われることもしばしばだった
が、被害者の為になら地面を這いずってでも真相を究明しようとす
る姿勢は市民からすれば好感が持てるもので巡査時代は市民から信
頼も厚かった。こと最近になって妻との間に初めての子供を授かっ
てからは更に。

そんな彼さえも今回の命令には動きを止めざるを得なかったのだ。

深く頭を下げる井上の姿を見て、あれほど激昂していた由香も口を
つぐむ。香奈恵は何とも言えない顔で目を伏せていた。そして蓮は、

「・・・いいんですよ」

「え？」

「顔をあげてください、井上さん。僕ならもう大丈夫ですから・。
今まで事件のこと、教えてくださって有難うございました」

蓮が刑事の大きな肩に手をかけ、優しく言葉をかける。彼からすれば今回の事件についての情報を流すというリスクを払っていることを十分理解していたので謝罪を受けるなんてとんでもないと考えていたのだ。そこに偽りはなく、感謝の思いを込めてもう一度言葉を紡ぐ。

井上はそれにただ頷くことで答えたのだった。

あれから井上刑事は蓮に困った時はいつでも駆けつけると約束し、夕暮れの街に繰り出していった。その顔は決意に満ちた熱いもので、普段の熱血ぶりに拍車をかけてしまったようだ。おそらく近日中に彼の同僚や部下たちの呆れ声が聞こえてくるだろう。

「蓮君、あれでよかったの？」

香奈恵が蓮に問いかける。

アパートの前で井上の帰りを見送った彼らはしばし夕焼けを眺めていた。相も変わらずひぐらしは泣き叫び、高い湿度は喉を締め付ける。それでも蓮はそっと呟いた。

「ええ、いつまでも立ち止まってはられないでしょう？道は一つじゃないんですから」

由香と香奈恵は蓮の言ったその呟き何故か含むようなものを感じ、

その顔を見つめる。東の空は既に暗み始め、一番星がおぼろげに輝いている。

彼の真紅の瞳は確かにそれを捕らえ、静かな決意を宿していた。

「オリーブの芳香？」

第三十部

井上刑事が謝罪に訪れた翌日、ようやく蓮たち三人は元の調子を取り戻していた。結局あの後、重い空気が消え去ることはなく、蓮一人がそれに気付かず空回りしていたような状態だったのだ。事の中心であるはずの蓮が一番普通に振る舞うのを見て、由香と香奈恵は酷くもどかしい気持ちで、珍しく蓮の作った夕食も喉を通らないようだった。そして耐え切れず端を置いた由香が聞いたのだ。

「ホントに大丈夫なの？大切な人だったんでしょ？その牧師先生ってひと…。」

その問いに蓮は

「僕は天国とかそういうものは信じてないけど・・・先生との思い出があるからさ・・・大丈夫だよ。」

・・・うん、大丈夫」

と笑って見せた。

このとき蓮自身気付いてはいなかったのだろうが、先生の死から休む間もなく舞い込んでくる状況の変化、そして何よりそれまで信じていなかった”神秘”を多少なりとも認めたことによる心労が感覚をマヒさせていた点もあったのだ。

いずれにせよ、その笑顔に嘘を見つけることはできなかった二人は

優しく微笑んで返したのだった。

ちなみにうやむやになってしまったフルートの件は、また時間があるときにという話になった。

ところで今現在蓮は何をしてるかというところ、

「・・・なんてこった・・・」

商店街のアーケードの下で立ちすくんでいた。見上げれば透明なドーム型の天井に激しく打ち付ける雨粒が見える。食材などの買い足しの為に商店街に来たまでは良かったものの、いざ帰ろうとした途端に猛烈な通り雨に襲われたのだ。天気予報では一日晴れだと言っていたのに。夏の季節、通常の夕立であれば直に止む^{じき}であろうと考えて待っていたのだが、ここ30分間止む気配はない。

手に持った野菜やお米などの重さもさることながら、この湿度と気温を考えると早急に冷蔵庫に入れてしまいたい。

（どうしようかな・・・）

蓮は体格ががっしりしているわけではないが、かといって非力なわけでもない。それでも悪天候による気圧の変化は彼の偏頭痛を発症させ始めている。

（うう、痛い、）

解決策は見つからぬまま時間だけが過ぎていった。

蓮が途方に暮れている頃、由香と香奈恵は宿泊中である蓮の家の掃除をしていた。とはいっても日頃から部屋の主人による丁寧な清掃を受けており、ほとんど手を付ける必要もなかったのだが。

二人はなけなしの仕事を終え、残すは蓮が使っている客間のみとなったとき、窓の外で激しく振り続けている雨に気付いたのである。今では屋内にいても音でわかるほどの強さだ。テレビで確認してみれば今朝まで何も言っていなかったキャスターが今日一杯の大雨を宣言していた。

「この雨じゃ、蓮帰ってこれないかも・・・」

蓮が傘を持っていなかったことを思い出した由香は、手に持っていた布巾を流し台で洗って慌てて玄関に向かい、

「お母さん！私、傘持って蓮を迎えに行ってくるね！」

そう言っただけで部屋を飛び出していった。

香奈恵は短く気を付けて、ただけ声をかけると由香が置いていった布巾を絞りなおして客間に向かう。

四畳半ほどしかない部屋は綺麗に整頓され、まるで生活臭を感じない。宿泊初日にこの部屋を見せてもらった時と変化を探すのが難しいほどだ。埃をかぶっていないことが唯一の変化だろうか。

（どうしようかしら・・・）

はつきり言っただけでは仕事がない。

手にはたきと布巾を持ち途方に暮れる香奈恵。そんな彼女の視界にあるものが飛び込んできた。このアパートに滞在することが決まった初日、蓮が自室から移してきた大きな紙袋である。それは部屋の片隅に置かれた小さな筆筒の前に鎮座していた。

（勝手に見ても、いいのかしら？）

香奈恵はあの蓮が見せまいとしているものに激しい興味をそそられたが、流石に了解も取らず中を盗み見るのは失礼だと思い直し目をそむけた。そして扉を閉じて部屋を後にすると、蓮と香奈恵が濡れて帰ってきたときのために風呂を沸かしに行く。

もし彼女がこのとき袋の中身を見ていれば、未来は多少なりとも変わっていただろう。

少なくともこれからの蓮の行動が、孤独なものになることは、なかったらうから。

「雨の中から」(前書き)

幕間みたいな扱いですが、一応本編につながってます。前回の香奈恵シーンの裏側という設定で。ちょっぴりリリックな雰囲気。

「雨の中から」

第三十一部 雨の中から

未だ雨は降りしきっている。大気に混ざり合った雨とアスファルトの濡れた匂いが、呼吸をする度に肺に蓄積されていくようだ。両手に持った買い物袋、そこに入った野菜や果物さえその重みを増していく。

蓮は商店街の出口近くにある使われていない廃店の壁に背中を預けて雨が止むのを待っていた。ここ最近は常に調べ物などに時間をとられていたからか、こんな些細な休息でさえも妙な焦りを生む。道を行く人々の足元に目をやり、意味もなく靴を見ていく。外から来た人は雨でぬれた足跡が点々と続き、数歩進んだところでぼやけて消える。

湿度に反してカラカラに乾いた喉で重くため息をつく。蓮は目を閉じて、もはや暗記してしまった手紙の内容を思い出す。どうすれば謎が解けるのか。道具も技巧も持たないまま、ただ闇雲に思考を巡らせた。

どれほどの時間が経っただろうか。

結局答えは見つからないまま現実に帰ってくれば、背中に生温いコンクリートの感触がある。随分長いことこうしていたようだ。頭には鈍い痛みが這いずるように蠢いている。失った記憶に関する思考ではなかったため”体質”による頭痛ではないだろうが、それでも

その痛みは蓮の細い首を伝って腹のあたりまでやってくる。悪天候による気圧の変化からくる偏頭痛のようなものなのか、吐き気がして気持ち悪い。見上げればまだ雨は降り続いていた。と、

「……蓮！」

雨霞の中から知った声が聞こえてくる。

四条由香は片手でピンクの傘を差して、もう一方の手で蓮の黒い傘を持ってこちらに走ってくる。そのせいで彼女は傘をさしているにもかかわらず既に少し濡れてしまっている。いつもなら軽やかに揺れるポニーテールもしっとりと湿っているようだ。あの調子だと彼女が履いているスニーカーにも雨が浸み込んでしまっているだろう。

「……蓮、大丈夫？」

気付けば由香が蓮の目の前にいた。また思考に溺れていたらしい。彼女は心配した面持ちで蓮の赤に輝く瞳を見つめていた。蓮は自分の悪癖に少し反省しながら由香に微笑みかけた。

「うん……大丈夫……」

改めて目の前の由香を見てみると雨だけではなく流れる汗で濡れていることがわかる。ここまでしてくれなくても良かったのに。そんなことを思いながら、蓮はポケットからハンカチを出すと由香に差し出す。

「あ、ありがとう」

由香はそれを受け取ると押し当てるようにして汗を拭っていく。そ

の間蓮はただそんな由香の姿をぼんやりと眺めていた。腹の奥にたまっていた嫌悪感は薄れたが、頭も上手く回らない。ハンカチは蓮に返されず、そのまま彼女のポケットに入る。どうせ同じ家に帰るのだ、今返してもらおう必要もないだろう。そう結論付けると蓮は由香から傘を受け取ろうとしたが、両手が買い物袋で塞がっていることを思いだす。

蓮は一瞬考えた後、

「僕は、このまま行くよ」

と微笑んで由香の前を歩きはじめる。

しかしアーケードの外、雨の中に足を踏み出しても彼は濡れることはなかった。右を見れば自分の傘を畳み、蓮の黒い傘で二人分の雨をしのぐ由香がいる。振り続ける雫がポリエス^{なみた}テル製の膜にあたってバタバタと騒がしい。

「それじゃ、行こっか」

やっぱり笑ってそう言った由香に、蓮は小さく

「……ありがとう。」

と返すと隣を歩く少女に歩幅を合わせながら歩きはじめる。

このとき壁でも屋根でもないただの傘の内側が、蓮にはとても心地よく感じた。気付かず遠慮して、濡らしてしまった左肩の冷たさを忘れてしまうほどに。

白い霞が足元を流れていく。

ぼやけた視界に誰かの黒い傘が影のように映った。

「雨の中から」（後書き）

最近クラシック好きが再発しまして、普通のロックとかよりもバッハやモーツァルトなんかを部屋の中で流してます。読者の方も何か好きなクラシック音楽は在りますか？ちなみに僕が一番のお気に入りにはバッハのゴルトベルグ変奏曲アリア・ダカーポです。

あと作品のストックが切れたので次回からはちょっと更新が遅くなります。

「オリーブの芳香？」

第三十二部 オリーブの芳香？

ずっと悩んでいたことのヒントのようなものが、ふとした拍子に見つかることは比較的ざらにある。

非日常への鍵にあたるものは、日常の何気ない行動の中に隠されているのではないだろうか。

午後7時25分。蓮は香奈恵と台所で今日買ってきた野菜を早速使って調理に取り掛かっていた。あの大雨の中、アパートに着く頃に

は二人とも傘を差していたにも拘らずそれなりに濡れており、香奈恵に差し出されたタオルで髪と体を拭いて着替えを済ませたのだ。蓮が商店街で立ち尽くしていた時に感じていた頭痛もこの頃には収まっていた。タオルの洗濯機に放り込むと蓮は料理をしにまっすぐ台所へ向かい、由香は部屋に戻っていった。

蓮がレタスに包丁を入れるとザクツと気持ちのいい音がする。その隣、香奈恵の持つフライパンからも豚肉を炒める軽快な音が聞こえる。今日のメニューは由香のオーダーでミートパスタだ。昼間の外出はその為の材料の買い出しだった。デパートに行けば大抵のものは揃うのだが、食材系の安さや鮮度に関しては商店街の、特に顔見知りの店には勝てない。

「うん、いい感じかな」

満足顔の蓮の手元、等サイズに切られた人参とピーマンが出来上がった。いずれも高い鮮度を保ち見るからにみずみずしい。それらをボウルに入れ香奈恵の方に移動させると、彼女はそれを火の通りやすさを考えながら順にパスタと一緒に混ぜていく。フライパンの中の彩りがより一層引き立った。

それを見届けると蓮はブロッコリーを使ったシーザー風サラダを作りはじめた。先日久方ぶりに本棚から引き出してきたレシピ本にのっていたメニューで、手軽に作れそうだと思いチャレンジしたのである。頭の中に記憶したレシピに従い塩や黒胡椒、おろしニンニクを和えていく。途中独自にアレンジを加えていくのは流石と言ったところか。

いつもと同じ慣れた手つきでここまでの作業を終え、次に今日買ってきたオリーブオイルを加えようと瓶の蓋を開いたとき、蓮はある

ことに気が付いた。

それはここ最近蓮をずっと悩ませていたもので

（この香り、最近どこかで嗅いだような・・・これって！）

キャップを開け、アルミ製の中蓋をとった瞬間鼻腔をくすぐるモクセイの香り。

爽やかでありながらどこか独特の渋みのあるその香りは、紛れもなくあの時東氏の手紙から感じたものと酷似していた。

あの手紙の方は少量の香水をつけていたのかオイルよりも遥かにほのかな匂いだったが、それでも特徴に間違いはない。瓶のラベルを見ながらあの匂いを思い出す。

（・・・でも、なぜオリーブの匂いが手紙に？）

もちろんただ偶発的についた匂いだと言えなくもない。何の意味もない、ただの手違いだったと。

しかし蓮にはそうは思えなかった。何故かと問われると、何故かとしか返せないようなあいまいな疑心だったが。胸に立ち込めるような吐き気とも取れぬ不快感が、それを偶然として流すことを拒んでいる。

「どうしたの、蓮君？」

「あ、すみません。何でもないです」

いつの間にやら止まってしまっていた手を香奈恵に指摘され、気を取り直すように再び動かしながら蓮は新しい謎に頭を悩ませるのであった。

ちよっぴり馴染みのものとなってきた団欒だんらんの食事も終わり、それぞれが一度自分の部屋に戻る。今日は四条親子が先に二人で入浴し、蓮はその後に入ることとなった。

二人が浴室に入ったのを音で確認すると蓮は紙袋の中身を広げ、時東の手紙を取出してそつと鼻を近づけてみる。

「・・・やっぱり、これだ・・・」

かすかに、だが確かに香るオリーブの芳香。甘さと渋みを同居させた気品あるその香りは、すつと神経を通り脳で感知され、先ほどのオイルと重なる。蓮は手紙をそつと鼻から遠ざけ、一度まじまじと見つめてみた。手紙に付けられたオリーブの香水、しかしそれがどんな意味を持つのが分からない。

（オリーブって何か意味とかあったかな・・・）

自分の名前に花言葉という形で意味があるように、オリーブにも同じように隠された意味合いがあるのではないかと踏んだのだが、残念ながら蓮にその手の知識は乏しい。彼が住むアパートにはインターネット用の通信環境もない、という今時では珍しい状態なので今すぐには調べようがない。

蓮は一先ず週末に町の図書館にでも行つて、草花辞典をあたつてみようと考えていた。いつそもう一度教会に忍び込んで、先生の書斎に置かれたそれを持ち出すのもいいかもしれない。

「蓮君、お風呂空いたわよ」

「あ、はい。わかりました」

部屋中に広げた本や書類を紙袋に入れると押入れの中に隠して置き、筆筒から着替えを取り出していく。部屋を出る前にもう一度残ったものがないかを確認する。

万が一にも四条親子、特に母親の方に見つかつてしまえば、追及は避けられないだろう。そして自分のしていることが明瞭になれば、間違いない止めるか一人にすることはしないだろう。解決の糸筋が見えてくるほどに、それを恐れる気持ちも強まっていく。

今回の件はすべて自分だけで解決したい。

下手をして教会とのいざこざになつてしまったとき、無関係の彼女たちを巻き込むわけにはいかないのだ。

「これ以上、大切な人たちを失いたくないんだ・・・」

自分の中の小さな、大きな変化。

誰か特定の人物を大切に想うこと。

それに気付かぬままに、蓮は決意を固める。

蓮は天井の蛍光灯から延びる糸式のスイッチを引き、後には闇が遺された。

「オリーブの芳香？」（後書き）

物語の展開としてはローペースですが、かなり迷った回です。

「日常って謎だらけだけど、そのおかげで安定してる。だとしたら”非”日常っていうのは答えのせいで乱されてしまったものじゃないかな」なんて考えも込めてみました。

それから作者の方が新学期の開始により多忙になるため更新速度が想像以上に遅くなると思います。それでも完結めざして着実に構想を練っては挙げていくのでよろしくお願いします。

「あの頃の話」(前書き)

PV1000 到達いたしました。読んでくださった、または読み続けてくださっている方々、本当に有難うございます。正直こういった数字にはあまり興味がなかったのですが、それでもちよっぴり嬉しいですね。

「あの頃の話」

第三十三部

由香と香奈恵が蓮の住むアパートに宿泊を始めてから六日目。蓮があの小さな匂いのヒントを手に入れた後は特に変化はなく、いつしか彼女たちの帰宅前日となっていた。

短い期間ではあったがすっかり雰囲気慣れた三人はお昼から、蓮のお気に入りの場所であるあの広場へ向かい街中を歩いていた。明日には親子も自分たちの家に帰り、元の生活に戻るというタイミングになって由香が、うやむやになってしまっていたフルートの入った箱のことを思いだしたのだ。それからほとんど拍子に話が進み、今にいたる。

「へえ、蓮ってフルート吹けるんだね」

「言ってもそんなに上手くないよ？」

「そういう風に謙遜してる人ほど上手いものよ？」

道中そんな会話をしながら、フルートを弾き始めた経緯や、どんな思い出があつたかをとつとつと語っていく蓮に親子は心配のまなざしを向ける。予想はしていたが、やはりフルートを蓮に渡したのもあの”先生”だったからだ。

ある意味”先生”の死を強く気にかけているのはこの親子の方かもしれない。蓮はそれに気付くと赤い瞳を細めて笑みを見せ、

「まだまだ上手くは吹けないけど・・・ホントにいい音が出るんですよ、こいつ」

右手に持つケースを軽く上げて見せた。彼自身もまたそのケースの確かな重みに先生との思い出を感じていたが、それは決して苦痛ではない。むしろ不思議と彼の胸を温かくするものだった。だから親子に見せた笑顔にはこれっぽっちの偽りも含まれてはいなかった。

「・・・それは楽しみね」

「私も早く聞きたくなってきちゃったわ」

由香と香奈恵がいつもの表情を取り戻したのを見て、蓮もまた少し安心したようにもう一度小さく微笑んだ。

「わぁ…すごい……」

蓮のお気に入りの場所、琴木町の東側に位置する山のふもとの広場に三人が立ち入った時の由香の最初の言葉だ。

人の手など加えられていないはずなのに、程よく伸びた雑草は柔らかな草原のようである。夏場、青々と茂ったそれが時折風に吹かれてざわめくのは、見ているだけでどこか涼しさを感じさせる。しかも春であればこちら一帯はタンポポの群生地となるのだ。

「この町にこんなところがあったのね…」

香奈恵もまた目の前に広がる小さな草原に目を奪われていた。

琴木町の夏は国内でもかなり過ごしやすい方で、ある一定のピークを越えてしまえば非常に快適に日々を送ることができる。そのことを差し置いても彼女たちはまだ少し強めの日差しのことなどすっかり忘れてしまっただったのだ。山の方から響くセミの鳴き声も、心なしか軽快に聞こえる。

蓮はそんな二人を横目にケースを草の上に置くと、軽く伸びをしてから話し始めた。

「この場所はね、実は先生とも来たことがないんだ。初めてここを知ったのはまだ孤児院に馴染みきれてない頃だったかな。はつきり言っただのころは今よりずっと他人に興味が持てなくてね？よく何も考えずに教会から抜け出してたんだよ」

「それからぼんやりと、ただひたすらに歩いて、気づいたらここにいた…。どうやって帰ったのかはもう覚えてないけど、それ以来空いた時間を見つけたらここに来るようになってたんだ」

「ということは、ここに誰かと一緒に来たのは私たちが初めてってこと？」

「うん、そうだね」

由香の問いかけに、蓮は高い空を見上げながら答える。

電線も通ってはいない、あらゆる障害を取り払った先にある。青い、青い空だ。

由香と香奈恵もそれに倣って見上げてみる。

遠いはずの群青は、

今なら近づけそうな気がした。

ひとしきり空中を眺めた後、蓮はふと息をつくと身をかがめて黒い

ケースを開いた。やや錆びついた蝶番の軋む高い音と重量感のある解放音と共に、銀色の美しいフルートが由香と香奈恵に目に入る。

「うわぁ、すっごくきれいな」

「ホント…銀製よね、それ？」

二人の言うように蓮の持つ銀色のフルートは何年も昔（先生から受け取ったという話を聞いていたため）に作られたものとは思えない輝きだ。いかに今までのオーナーに大切にされてきたかが伺える。蓮は二人の感嘆の声を聞きながら、ゆっくりとした動作で全体の調子やキイの点検をしていく。

「うん、問題はないね」

そういつて蓮は一度ケースを閉じてから大きく深呼吸をする。肩の力を抜いて、あらゆる思考を放棄した。今の彼に聞こえるのはおそらく己の心音のみだろう。

そしてそつと真紅の目を閉じると、ひんやりと冷たいリッププレートに唇を乗せる。

途端、彼の纏う空気が変わった。

いつも彼が周囲に与える、穏やかで暖かなもの。

由香にとっては蓮に訪れたいくつかの変化よりも前から、香奈恵からすれば瞳の赤化から始まった日々の中で、

ずっと感じていたはずのもの。

彼が笑う姿を見るとき、それはより強く彼女らを包み込む。

しかし、今何を奏でるでもなく、ただリッププレートに唇を寄せる蓮からは

そう言ったものを全く感じない。まるであの病院で深い眠りについていた時のようだ。

あるのは空虚を思わせる静止。

先程まで吹き続けていた風は知らぬ間にぴたりと止み、凜と張りつめた世界へ。

セミの鳴き声も、風のざわめきも、何も聞こえない。

由香と香奈恵は自身の呼吸さえも彼に支配されたような錯覚を覚えた。

そしてメロディは始まった。

まだまだ明るい八月の夕方。 四条家の親子は商店街からの帰路の途

中、”あの”公園のベンチにいた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

互いに無言のまま。

蓮のフルートを聞き終えたのち、二人は有無を言わせず彼だけを一度家に帰らせ、夕飯の買い物を済ませていた。そのときも最小限の会話だけで、それ以外は終始沈黙を貫いていたのだ。

もちろん蓮もそんな二人の様子に不安げな顔を見せたが、結局二人からそれらしい反応を得られることもなく、とぼとぼと帰って行ってしまった。由香も香奈恵もそんな対応しか取れなかったことに今更ながら後悔している。

しかし、

「・・・・・・・・お母さん・・」

娘の方が腰かけたベンチの裾を無意識にいじりながら呼びかける。

「・・・・・・・・何？」

母親も母親で、風に揺れるブランコの振幅を眺めたまま答えた。

「何でなんだろうね？蓮の曲さ、聞いててすごく綺麗だったのに・
・・こんな・・」

「・・・・・・・・悲しい？」

二人が蓮の演奏を聴いた後、一番最初に感じたのは、限らない”悲しみ”だった。

演奏の最中はもはや何もわからず、曲が終わり、その余韻をまとい

たままの蓮がこちらの目をずっと見つめているのに気付いてようやく思考が追いつき始めたのだ。いや、この場合は”感情”が追いついたというべきか。

彼の顔は澄み渡り、何かを耐えている様子でもなかった。むしろ全くのしがらみを捨て去り、自由をイメージさせるほどに。しかし同時にそれは地に足がついていないような、彼は今時分達とは違う場所にいるのだと認識してしまいそうでもあった。

流れ出した旋律はむしろ自分たちを包み込み、そしてまた入り込んでくるような感覚さえ覚えたのに、

それは胸の中で痛みに変わってしまったのだ。

「多分私たち……まだまだ蓮のこと、知らないんだね……」
「そうね……」

結局その日、三人がまともに言葉を交わすことはなかった。

「あの頃の話」(後書き)

難しかった・・・。

「相似分岐」(前書き)

もともと自分に文才など認めてはいませんが、それを抜きにしてもスランプというやつに差し掛かっているようです。

「相似分岐」

第三十四部 相似分岐

「おはよう、蓮」

「え？ああ、おはよう、由香」

親子の宿泊の最終日の朝、珍しく早く起きてきた由香とキッチンで挨拶を交わす。その顔は昨日見たものよりもずっと晴れ渡っており、まるで何もなかったかのようにだ。

昨日あの広場でフルートを演奏した後、何故か表情を硬くした二人に思わず感想を尋ねることも躊躇してしまった蓮は、結局なし崩しになったまま一日を終えてしまったのだ。当然蓮は二人が自分の演奏が何らかの形で二人にあの反応をとらせたと理解することはできなかったものの、何を感じ取ったのかはわからない。今までに誰かに聞かせたこともなかった蓮としては自分の特異性を知らないのである。

一方由香と香奈恵は彼に対してあからさまに動揺の態度をとったことを後悔していた。その為二人で相談して、どうにか翌日からはいつも通りの調子で接することに決めたのだ。

あの強烈すぎる悲しみの旋律は思い出せば未だに彼女らの心を締め付けるものではあった。

しかし、それを紡ぐ蓮の姿を放っておくことはできない。

そんなわけで今蓮の前に立つ由香は、それまでと変わらないような笑顔を見せているのである。

「今日は早いね？まだ朝食できるまで時間あるよ？」

「そう？じゃあ私にも手伝わせてよ。慣れてないから教えてね」

なんとなくではあるが、由香は昨日のことに触れないようにしているのだと判断した蓮はあえて掘り返すような真似はせず、快く承諾すると一歩だけ横に体をずらし彼女のためにスペースを開ける。

「どうしたらいい？」

「えっとね、まずは・・・」

たった一週間の特別な時間は、彼らの中で一日が抜け落ち更にほんの少し短いものになっていた。

「さてと、お世話になったわね蓮君」
「ありがとね」

「いえいえ、僕の方こそ。楽しかったですよ」

すっかり支度を終えた二人と話しているのは昼食をとり終えたその後だった。最後のご飯は三人がそれぞれ分担して作ったもので、今回の宿泊の思い出にもなった。いつも淡々としている蓮もどこか名残惜しげである。

「ねえ蓮。また今度はうちに泊まりに来てよ？」

「そうね、この前はなんだかんだで忙しかったし……。次に来たときはゆっくりおもてなしするわ」

そう告げる二人の目にもまた少しの寂しさが見える。それでも蓮が笑顔で頷くとそれも消え去った。

来た時と変わらない荷物を抱えて。でも来た時とは違う想いで、由香と香奈恵は玄関のドアをくぐる。

「それじゃあね、蓮。また新学期に！」

「またいつでも連絡してらっしゃい」

アパートの前、八月も下旬に入りちよつとずつ過ぎやすくなった昼下がりの街に親子を見送る。蓮は小さく手をあげて肩のあたりの高さでそれを振る。時折吹くやわらかい風が蓮の茶色い髪を揺らしていく。

こうして六日間の非日常は終わった。

いつかこんな日々が日常に変わることを祈りながら。

古いアパート特有の、無駄に厚く張られた鉄製のドアが甲高い音をあげて閉まるのを背中であく。

残暑の時期に入ったとはいえまだまだ熱気を含んだ空気が、屋内という閉鎖された空間に立ち込めている。ついさっきまでは気にも留めなかったはずなのに、今は嫌というほどに意識せざるを得ない。白いワイシャツの下に來ている同じく真っ白なアンダーシャツが汗でしつとりと肌に張り付く感触が不快だ。

「・・・終わっただんだよね・・・」

扉にもたれかかり、誰もいなくなった部屋の中を眺めながらぼそりとつぶやく。ほんの一週間という短い期間ではあったがそこに自分以外の誰かがいて、今はいないという感触にどこか懐かしさを感じる。

”いつものように”静まり返ったりリビングに向かい、しばしソファに腰を下ろす。大きく開けられたカーテンと窓から少し熱めの日差しと揺蕩う風が舞い込む。目を閉じて深く息を吸いこんでみた。

どれくらいの間かそうしていただろう。蓮はふいに首にかかった十字架をぎゅっと握り締め

「・・・始めなきゃ・・・」

後ろ手で鍵を閉めると一週間ぶりの自室に帰っていった。
止まっていた歩みを、取り戻すために。

ジジジ、、ジジ、、

セミの鳴き声からは覇気が失われ、あれほどうつとうしかった騒音にも小さな寂しさが見えてくる。節電の夏と称される今夏、四条家もまた例に漏れずエアコンなどの電源は落とすように心がけていた。まあ、ほとんど母親である香奈恵の諫言によるものだったのだが。ともあれ蓮との別れから数分して自宅にたどり着いた親子は、洗濯物などを洗濯機に入れ、お泊り道具などを片付けるとソファに座つて一息ついているところだった。由香は冷蔵庫から引っ張り出したあずきアイスを咥え、母は薄型のテレビに映し出される最も身近な未来観測、すなわち天気予報に目をやっていた。

『…ということもありまして、今年の夏は例年よりもやや早くその暑さを衰えさせ、数日後には涼やかな秋の風を感じられることでしよう…』

『みなさん、季節の熱り替わりの時期は昼夜の気温の変化が激しいため、体温調節には十分に注意してください』

予報士の言葉に続けるようにキャスターが狂いのない笑顔で注意を促す。それからしばらくニュース番組とはてんで関係の内容な雑談があった後、これまた狂いのない笑顔を張り付けたレポーターによるグルメ探索なるコーナーが始まった。

「ねえ、由香？」

「んむっ、なあに？」

手持ちの近くに残ったアイスを横からカプリと口の中に入れて飲み込むと娘は母親の呼びかけに応える。この手の菓子にありがちな「当たり」の文字を一応確かめてみるが、何も書かれてはいない。ただ少し湿ったままの木製の棒をソファの横にあるごみ箱に入れた。

「なんだか自分たちの家なのに、すごく寂しい気にならない？」

「んー、確かにそうかも。たった一週間だったのに、蓮と一緒にいることに慣れちゃったみたいだね」

娘が自分と同じ気持ちだということを知り、だがそれが特にどうというわけでもないまま、香奈恵はテレビを見つめながら

「そうみたいね」

とつぶやく。

そんな母親の釈然としない受け答えに由香は首をかしげるも、隣に佇む母の表情からはいまいち情報が掴めない。少女は今一度中空に視線を彷徨わせながら母親の言葉を思い出す。そして、

「……………あ……………」

理解した。

キーワードは「蓮」と「寂しさ」。

程度に違いはあれど、つい昨日のことであつたあの一件の後と似た心境に彼女らが立たされているということだ。それを自覚した瞬間に方向性のない寂しさが徐々に蓮と自分を繋げるものになり始めた。

蓮に対する想いを自覚している由香としては完全に不覚だつたと言える。

「また蓮をうちに呼ぼうよ。・・・できるだけ早く」

「それはいい考えね。別に夏休みが終わつたからと言ってお泊りしちやいけないわけでもないし」

それまで表情を崩さなかつた香奈恵も娘の提案に顔をほころばせた。昨日突如として突きつけられた蓮の持つ一面に、一度でも背を向けてしまったことを悔やみつつ、もう一度彼に歩み寄ることを決心する。

「じゃあね、ここの土日を使つたらいいんじゃない？」

「そうね、それなら蓮君も大丈夫かもしれないわ」

カレンダーを見ながら本人の居ぬ間に話を進めていく。

旅行から帰ってきてまた次の旅行の話、と言えば節操がないかもしれないが。二人の話題は既に次の宿泊計画のことで盛り上がりを見せているのであつた。

????????????????????????????????????

何処ともしれない煤けた廃屋。そこに夜の闇よりもなお暗い人影があった。

真つ黒なローブに身を包み、前部分もしっかりとピンで留められている。その傍らには大きな目のスーツケース、そして手にはこれまた黒の、無骨な携帯電話が握られており誰かと話しているようだ。

「すみません、目的と接触することには成功したのですが」

『……………』

「ええ、特に身を隠す素振りはありません。しかし…自身の存在、神秘や魔術の存在を認めようとしている傾向が」

『……………』

「分かっています。そうなれば近いうちに”力”が覚醒するでしょう」

「その前に……」

消します」

携帯電話を閉じる音が廃屋のコンクリートに響き渡る。
ポケットの中に携帯を入れた影の人物は、静かにその場から姿を消した。

「相似分岐」(後書き)

物語の時間進行が見事に現実のものとかがっているのに気づいたでしょうか。キャスターによる『体調云々』の話は僕からのメッセージとでも受け取っていただければよろしいかと(笑)。

「謎解きの？」（前書き）

ユニーク数が200に到達しました。客観的に見ればどうってこと
ないのかもしれませんが、僕としては歓喜です。みなさん、ありが
とうございます。

「謎解きの？」

第三十五部

古びた紙の匂いになぜか心安らいた経験があるだろうか。それまで自分以外の見知らぬ大勢に触れられてきたであろう蔵書に不思議と嫌悪感ではなく愛着を感じるような経験は？最後のページをめくり終え、裏表紙の内側に設けられた小さなポケットに収められたカード。そこに記された彼の来歴を見ることにほんの少しでも楽しみを見出したことがあるのではないだろうか。

??市立琴木図書館。

特に新しいでも古いでもないこの図書館でさえ、ただ本を読むこと以外を目的とした人々が多く集まる。学習や趣味など様々な目的があるだろうが、先ほど示したようなアンティークなものに対する憧れを持ってここを訪れる者も少なくはないだろう。

だが今、資料保管スペースに置かれた机と椅子に腰掛けて分厚い辞書をめくっている少年、里宮 蓮はそのいずれとも違う。学習というには継続性などなく、趣味というには生臭い。彼の持ち物は亡くなった牧師から受け継いだものが多かったので、比較的古めかしいものに囲まれてはいたが、決してそれを好んでというわけではない。

ペラッ , , , ペラッ , , ,

冷房の効いた館内には夏休みも終わり間近とはいえ多くの人がいる。

冷房の効いた館内に紙の擦れる音が響く。階下の児童コーナーならそこに子供の声も交じってくるのだらう。

「これも、違うな・・・」

蓮が開いているのは『四季花草^{しきかそう}』という植物辞典だ。その名の通り国内における四季折々の草花を科目によって分類し、さらに海外の植物も広く網羅している。新学期を数日後に控えた最後の土曜日、彼は四条親子の宿泊中に見つけたオリーブの香りのヒントを頼りにここに来ていた。たった一つ、「オリーブ」という項目をあたればいいのだが、その結果は彼の横に山積みになった本から分かるだらう。

もちろんあの手紙についていた匂いが意図的につけられたものだとは言いきれないが、いまいち手掛かりのない現状では僅かなことも見逃すわけにはいかない。カラーのものからモノクロの挿絵まで、片っ端から探していく。

由香と香奈恵の滞りが終わると間もなく新学期が始まった。とはいえ高2にもなるとこれと言って目新しいものはない。強いて言えば受験や卒業後の進路を早いうちから考えようという真面目な生徒たちがそれぞれにコミュニティを持って校内でそれらしい話をしてるのを見かけるくらいである。

蓮と言えば登校している間を除いては常にアパートの自室に引きこもって手紙と魔術書との睨めっこ。悪魔や天使と言った、精霊の

持つ能力とその限界については幾つか分かったことがある程度で手紙の解読にはまだ見切りがついていない。

そこで蓮は以前予定していた通り、週末にこの図書館を訪れていたのである。

「・・・んっ・・・ふう、疲れた・・・」

蓮が眉間をもみながら本から顔をあげる。凝り固まった肩から響く鈍い痛みが脳髄を揺さぶる。いつの間にか大分と時間が経っていたようだ。フロアの各所に置かれたアナログの時計は、それぞれ微妙な誤差を生じながらも大まかに十二時を指している。

彼が図書館に入ったのは開館と同時の九時半だったので、かれこれ二時間以上も同じ姿勢でのめり込んでいたということだ。

（うわ、想像以上にのめり込んでたんだな…）

高校受験のときにもなかった集中具合に少し苦笑しながら、蓮は一度図書館を出て外で昼食を済ませようと考え、椅子を机に寄せる。彼のいた資料保管ルームは館の二階、一階には一般蔵書があった。階段を下りてそのフロアを横切るようにエントランスへと向かう。彼が来た階段のある方の書架から順に科学、哲学、海外文学、国内文学、心理、医療、伝記、宗教となっていた。蓮は足を止めて開架の棚に張られた「キリスト教、仏教」のラベルに目をやると胸元の十字架にちらりと意識を向け、思い立ったように宗教関連の蔵書が並ぶ棚の間に入っていく。

（懐かしいな…）

擦り切れた背表紙に白のテープで補強を重ね、黒のマジックペンでタイトルが上書きされている。小説でもあれば新刊などが続々と追加されることもあるのだろうが、この手の書物は古いものがずっと棚に並んでいることが多い。その為滅多に買い直しなどが行われず、敗れた本もある程度の補修がなされただけの状態なのだ。

蓮は腰を屈めると下の方にあった一般的な「新共同訳聖書」を手に取る。蓮の家にある先生からのもらい物と同じ、さして大きくはないタイプの聖書。黒のビニル製のカバーに覆われた簡易型ながらも3、4センチの厚みを持つそれは琴木教会の常備品でもあり、蓮にとって最もなじみ深いものだ。ほんの少しの感慨に浸りながら、特に読む気もなくぱらぱらとページをめくっていく。そこで蓮はあることに気が付く。

通常の聖書というのは鮮やかな色のしおり系が二本ついており、それぞれ新約と旧約の箇所用いる。しかし今彼が持っている聖書はボロボロに解けかけたその二本ともが束になって分厚いページを横切るように不自然に引き延ばされ、後ろの方のページに挟まっていたのだ。

（なんだろ…？）

前の人を読んでいた名残なのかは定かではないが、蓮は無性にそのページが気になった。本来であれば下世話ではないかと躊躇するまでもなく、一度聖書を閉じると掌の上に立て、しおりの紐をつまむと上に滑らせるようにして目的のページを開く。ぱたんっという軽い音で背表紙がその箇所できれいに二つに折れる。そこは新約聖書の三部目にあたる「ルカによる福音書」の項目だった。

福音書とは聖書の中に四つ存在するいわばイエスキリストの奇跡譚のようなもので、その著者はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四人が正典とされている。それぞれ同じ人物の生涯、もつと言えばキリストの誕生から受難、そして復活を描いているにも関わらず、違う製作意図を有している。うちヨハネを除いた三人の著したものを共観福音書と呼ぶのだが、そういった話は置いておくでしょう。ともあれ蓮自身も孤児院の世話になっていたころには幾度か目にかけたことがある内容だ。

そんな福音書の一項、くすんだしおりが導いた先にある一節が、蓮の真つ赤な瞳孔に飛び込んできた。今まさに彼が追いかけて続けたその言葉が。

「……オリーブ山の、祈り……」

ほぼすべての福音書に共通して後半部分に記述されているもの。オリーブ山、そのふもとに存在するのはゲツセマネの園。

十字架刑にかけられる直前のイエスが、その身に起こるであろう苦難を予期して神に祈りをささげる、という厚い聖書の中でも唯一キ

リストが人間としての弱さを感じさせる舞台である。この直後彼はかの有名なイスカリオテのユダの裏切りによって逮捕、十字架刑に処されることとなるのだ。また一説によればキリストはゴルゴダの丘で処刑されたのち三日後に復活、その五十日後この山の頂上から昇天したという。

いずれせよキリスト教圏において大きな意味を持つ地名だ。

蓮はそもそもこういった宗教関連のヒントには気を配っていなかった。何故なら先生とその友人も聖職者であれば、自分も含めた彼らを狙う？魔師のルチャや教皇庁という組織も聖職者の団体だからである。暗号にするには向かないはずだ。その為蓮はようやく見つけた可能性にもやや猜疑心を抱えていた。

しかし彼は幾度も読み返し内容を暗記しつつあった時東の手紙に、それに符合するものがあったことを思いだす。

（もしかすると…）

蓮はそつと聖書を棚に戻すと、再び出口に向かって歩き出した。

「謎解きの？」（後書き）

二部構成でこの謎解きを核心に近づけたと思います。

・余談・

新約聖書はキリスト教の、旧約聖書はユダヤ教の聖典であるというのは比較的一般に知られていますが、旧約聖書という名称がそもそもキリスト教から見た蔑称じみた意味合いがあるため、最近ではヘブライ語聖書などと呼ばれるそうです。

「謎解きの？」

第三十六部

しんと静まり返ったアパートの一室。

あらゆる生活臭が拭い去られ、家具はただ整然と並ぶばかりだった。玄関から入って短い廊下、右の扉にはリビングとダイニングを兼ねた空間。その一つ置くには四畳半に程の客間。左に行けば洗面台と浴室。その隣の部屋はお手洗い。どれを見ても機械的なまでに整理され、ともすればモデルルームに見えなくもないだろう。全てのものが凡そあるべき場所に片付けられ、不気味な清々しさをさえ感じる。

ただ誤ってはいけないのは、この部屋にも確かに主人がいるということだ。

それも外出中や就寝中というわけではなく。

「・・・・・・・・」

廊下の突き当たり、これまた簡素な寝室に、彼はいた。

この部屋の主である里宮 蓮は、分厚い聖書を片手に一枚の紙切れをにらみつけている。平常の彼を知る者なら思わず目を疑ってしまうほどに真剣な眼差しで。机の上に置いた手紙に右手を添え、指先で文面をなぞっていく。ときどきペンでそこに書き込みを加えるなどしているようだ。開け放たれた窓から舞い込むさやかな風が彼の頬を撫でるものの、まるで意に介することもなく作業は続いた。

時計の長針だけが再び同じ示す頃、ようやく蓮の動きが止まった。手紙と聖書にはシャープペンでいくつかの書き込みがなされている。??からん

ペンを机の上に転がして、その両方をしばらく見比べる。そして消え入るような声で呟いた。

「端谷町・・・か・・・」

端谷町とは蓮たちが居住している琴木町と一つの山を隔てて隣町に
はたにちよう
あたる、市内でも長閑な町だ。のどかそしてその山というのが蓮がいつもフルートの練習に用いている広場を麓に抱える「犀油山」せいゆうやまである。田舎というほどではないが、ほぼ六割以上が住宅地であり小さな面積、もっぱら琴木町のベッドタウンとでもいうべきエリアだ。

蓮は手紙の中に登場する表現に聖書の記述との類似性に気付き、それを現実に置換して解釈を進めていた。その結果この地名にリンクしたのだ。あくまで推測の域を出ないものの現時点ではたった一つの可能性でもある。蓮は電話帳を取り出すと端谷町に置かれた教会関係の項目を探して、

「... あった、三都教会。端谷町〇〇—〇」

カレンダーを見て来週の日曜日にピンクのマーカーでしるしをつける。その手がわずかに震えていることに彼自身も気づいていない。振り返り、机の上に置かれた手紙を立ったまま見据える蓮からは、呼吸の音さえ聞こえなかった。脆い静寂が、再び部屋に訪れた。

「おはよう、蓮」

「ん？ああおはよう、由香」

夏休みも終わり昨日新学期が始まったばかり。手紙の件について一段落をつけた蓮はごく普通の学生に戻り束の間の日常の中にいた。とはいえ今日は金曜日、明日にはまた土曜日曜という休日が待っている。学校側が何を考えているのかわからないが、どうせなら次週の初めから授業にすればいいのにと蓮は思う。

しかし目の前の少女は別段気にするでもなく、むしろ嬉しそうに声をかけてくるものだから、そんなことは口に出せない。

それでもその笑顔にちよつとばかりこちらの気分も軽くなる気がして、蓮もきちんと彼女の話に相槌を打っていく。

どれくらい話していただろうか。そろそろ朝礼のチャイムが鳴るであろうというタイミングで由香が気付いたように蓮に尋ねた。

「そうだ、蓮。週末予定空いてる？」

「え？・・・いや、週末はちよつとダメかな・・・」

とつさのことで一瞬言葉に詰まってしまったが、時東神父の手紙と彼が所属する教会へ赴くことを思いだし、すぐに断る。それでも多少申し訳のない気があるのか、唯でさえ華奢なその肩を^{すく}竦めている。由香はそんな蓮の反応を見て慌てたように

「そ、そんなに気にしないでよ。またうちに招待したいなっと思っ

ただけだから。」

その言葉に小さくなっていた体を戻して、今度は思案気に問いかける。

「また？ つい一週間ちよつと前にお泊りしたばかりだよ？」

「・・・うん。お母さんと話してね？ 蓮ってほつといたらすぐに無茶しそうだから、出来るだけ一緒にいようって」

「・・・そう、だったんだ」

あながち間違いでもない彼女たちの予想に胸の中がもやもやする。だがそれは決して

「ごめん。お節介だったよね？」

「うん、そんなことないよ。心配してくれて、どっちかっていうと嬉しいかな」

由香たちの行為を疎ましく思ったからではない。この苛立ちに説明をつけるとしたら、その好意や思いやりを裏切るような真似をする自分に対してだろう。ただそれを表情に出してはまた心配をかけることになるので、今は笑顔で覆い隠すことにする。

「本当にありがとう・・・ね？ 由香・・・」

「えへ、えへへ。このぐらい何ともないよ」

目に見えて顔を赤くする由香に蓮は変わらない微笑を向ける。

”こちら”の世界を教えるわけにはいかない。その思いはむしろ強くなるばかりであったが、それでもこうして自分の身を案じてくれる人がいる。それだけで一人ではないのだと信じられた。誰かと接するのが苦手だと思っていたのに、

——由香と香奈恵——

たった二人かもしれないが、その存在の大きさに喉が熱くなる。

鳴り響くチャイムと共に由香に手を振ると、蓮は軽く俯いて人知れず唾をのんだ。

窓から見える九月の空は
淡く 青く、
雲の膜さえ破れて消えた。

ちなみに・・・

この話を横で聞いていた女子生徒たちによつて、由香が散々質問攻めにあつたのは余談である。

「謎解きの？」（後書き）

次回の作中で手紙に書かれていた文章と聖書のヒントについて詳しくかけると思います。

「時東神父？」

第三十七部

端谷町との行き来にはもっぱら市営のバスを使われることが多い。徒歩で行くこともできないではないが、何分間を山で阻まれている為、車両での往行が最も楽なのだ。やや都市的な発展を遂げつつある琴木町とを結ぶバスは、基本的に通勤通学者が、お昼の時間帯であれば端谷町側の主婦たちが買い物で訪れるのに利用することが多かった。逆を返せばそれ以外の時間は比較的空いているのである。

現に蓮が今乗っている端谷町行の九時半発のバスには彼を含めても四、五人の乗客しかない。いずれも朝帰りのサラリーマンやOLのようだ。町と町の行き来にはおよそ五十分はかかる。家に着くまで耐えきれずにシートや窓ガラスにもたれかかって眠る彼らに蓮は心の中で

（・・・お疲れ様です）
と呟いた。

日曜日の朝早くに蓮がわざわざ隣町まで赴くのは先週から予定していた時東神父が管理する教会へ向かうためだ。よく誤解されがちなのだが、カトリックの神父にしてもプロテスタントの牧師にしても、祭事を行うだけが仕事ではない。

礼拝および冠婚葬祭のときだけでなく、一年のうちにあるいくつものキリスト教の行事を用意し、そこに集う信者たちに提供しなければ

ばならない。またある種のカウンセラーの役割も兼ねている彼らは想像以上に忙しい。そんな聖職者とてもほぼ確実に顔を合わせられるのが礼拝日というわけである。

（時東・・・一応神父だった人だっけ？先生とも交流のある人らしいけど・・・）

窓の外を流れていく公道脇のうつそうと茂る木々を眺めながら、これから会うであろう人物について考える。

蓮の部屋にはパソコンがないため、図書館に常備してあるもので簡単な検索をかけた。結果端谷町に唯一存在する三都教会が今も機能を続けていることが分かったのだ。そこで早速手近にあったシヨルダーバッグに例の手紙など先生の部屋にあったものを詰め込んでバスに乗り込んだというわけである。

ただ一つ引つかかるのが担当司祭（神父）の名前が記録されていないことだった。つまり現在の教会を運営しているのが必ずしも時東神父とは限らないということ。それでもようやくつながったヒントを信じて訪問を決心したのだ。

『まもなく、終点 端谷公園前 です。お忘れ物のないように・・・』

□

気付けば外の景色は打って変わり、閑静な住宅街が続いていた。いや、どちらかというところと人気の乏しい、だろうか。琴木町のそれよりも幾分寂しげに見える。そうこうしているうちにバスは低いうなり声をあげ、深いカーブを描いてターミナルに入り、その動きを止めた。

（とりあえず行ってみよう。違う神父さんでももしかしたら過去の記録を見せてもらえるかもしれない。）

ごそごそと起きはじめた他の乗客を横目にバッグを肩にかけると最後尾の席から立ち上がり、真ん中の出口から外に出る。九月に入り少し涼やかになった風にシャツの裾が煽られた。蓮は公園に隣接するターミナルの沿道を渡り何となしに一度だけ後ろを振り返ると、まだまだ静かな町の中へ歩き出していった。

「三都教会・・・ここ、か・・・」

停留所から歩いて十分ほどの場所に、その教会は佇むように存在していた。静かすぎる街並みにより一層の寂寥を与えるように。琴木教会よりも規模は小さいが、それでも外観だけでカトリックのものと判断できる教会だ。基本カトリックはプロテスタントより形式的で儀式的な側面が強い。尖塔じみた屋根に立てられた十字架と玄関脇に置かれたマリア像がやや重々しい雰囲気醸し出している。蓮はアーチ状の門をくぐると玄関のドアをそっと開けた。

「…失礼します」

小さく告げながら、少し高くなっている敷居を跨ぎ中に入る。と同時に歴史を感じさせるようなかびた木の匂いがした。後ろで扉が勝手に閉じた音を聞いてビクリとしながらもエントランスを見渡せば、内装は随分とシンプルであることが分かる。置かれた青銅製のピエタがところどころ錆びている以外は至って普通の教会のようだ。ただ一つ、蓮がこの教会を訪れてから感じていた違和感は。

（なんで他に誰もいないんだろう）

そう、間もなく礼拝が始まる時間だというのに教会の中には信徒の影が全く見られなかったのだ。

というより、調度品は整備されているのにここ数日、人の出入りがなかったようにさえ思える。外にもそれらしい人影はなく、まるで教会として機能していないらしい。

礼拝が行われていないとなると神父に確実に会えるかも怪しい。ただカトリックはプロテスタントと違い日本国内にもしっかりとした司教区と言うものが置かれており、世界中全てのカトリック教会は総本山である教皇庁の直系なのだ。よっぽど朽ち果てていない限り誰か担任の神父はいるはず。

だが、これは一つの賭けだった。

ルチアの言葉によればあらゆるキリスト教の宗派の教会が蓮を追っているという。夢の中で先生から告げられた言葉と手紙の表面的な文面から時東なる神父はそれに属さないらしいが、もしここで出会うのが他の神父となるとこの紅い眼を見られた時点で身が危ういかもしれない。

（もし時東神父以外の人だったら、すぐに目を逸らして逃げないとい…）

やや物怖じしながら進むと小さな受付のカウンターがあり、そこから延びる廊下の横の出窓には花瓶に活けられた真っ白な百合が差し込む日の光に照らされていた。

無人の受付を後にして、より奥へ向かう。蓮が一步踏み出すたびに、ところどころワックスの禿げたレッドオークの床がぎしりと軋んだ。相当に古い建築なのだろう。

極力音をたてないように歩いていくと、廊下の突き当たりにある観音開きの扉の横に「chapel」というタグが打ち付けてあった。

ギ・・・ギ・・・ガチャ・・・キイツ・・・

中のバネが錆びて来ているのだろうか、少し引っ掛かりのある取っ手を回し、歪な音を立てながら扉を押し開ける。

そこで蓮の目に真っ先に映りこんできたのは・・・

「・・・・あ・・」

燦然たる光だった。

朝陽を透かすステンドグラスの輝きがそう大きくはないチャペルを鮮やかに彩る。献花台の花も真新しいものが活けられ、やがて枯れるという現実を忘れさせるような生命を顕現していた。そして何よりも全体が古めかしい木造であることも相まって、それこそ中世にタイムスリップしたような錯覚さえ覚えるのだ。

蓮は思わず開け放った扉の前で呆然と立ち尽くし、その光景に目を奪われた。

こうして筆舌するにも余りある。まさに見ているものの時間を止めてしまうような空間だった。そしてそれは蓮も同じことで、

「・・・気に入ったか？」
「!？」

突如背後からかけられた言葉に肩を浮かして驚く。摺り足で歩いても軋むような廊下を歩いてきたはずなのに全く気配を感じなかったのだ。それだけ集中していたということだろうか。

飛び退くように振り返ってみれば、真つ黒な聖衣をまとった体格のいい男性がこちらを見下ろすように立っていた。蓮より頭一つ分ほど大きいその人物は黒髪と白髪の混ざり方から四、五十代と推測できる、やや浅黒い肌が印象的だ。深く刻まれたしわや先ほどかけられた声の低さが、老練の風格を放っている。

「え、えっと・・・あなたが、時東神父でしょうか」

ずれ落ちそうなバッグを背負い直し、こちらを見据えて離さないような視線に呼吸を乱されるも、何とかそれを落ち着けて問う。言葉にこそ動揺の色が出てしまったが、その眼はしっかりと男の眼球を捕らえている。緊張のせいか喉が不快な渴きを訴える。

その男は蓮の瞳をそれまで以上に強い眼光で見たかと思うと、蓮が聞き取れないほど小さな声で何事かつぶやく。そしてその威圧的なオーラもそのままに

「・・・いかにも。私がここの専任神父を務めている時東当夜だ。

さしづめ”先生”のことでここへ来たのだろう？・・・里宮 蓮」

「時東神父？」（後書き）

前回のあとがきで謎解きのつながりを書こうと述べていたはずなのですが、結局時東神父との出会いの場面で終わってしまいました。重要な人物ですので、お座成りな書き方はしなくなかったです、といえは言い訳になるでしょうか。

最近書いてなかったですが、一言感想などお待ちしております

「時東神父？」（前書き）

今までにない長さになってしまいました。

「時東神父？」

第三十八部

夏休みが始まって間もない日曜の昼下がり、蓮は端谷町の三都教会の一室にいた。時東神父に案内されるままについてきたのだが、今更ながら彼に対する情報が”先生”の知人であるということだけしかないことに気付き、少し安易すぎたかと反省する。

まだ朝だというのにカーテンを閉め切った部屋の中は生活感が薄く、どこか不気味だった。

（とりあえず会うことだけを考えてきたけど、何から聞けばいいんだろう・・・）

ところどころほころびのある革張りのソファに、背筋を丸めて座り込む。持ってきたバッグはその隣に置いた。そつと組んだ両手が異常に冷たく感じて、それが怖くてぎゅっと握ってみる。その紅い瞳も所在なさ気に揺れていた。

少し気分が落ち着いてくると周囲の様子を観察する余裕も出てくる。壁の棚に所狭しと並べられた蔵書の中には先生が持っていたものと同じものと思われる背表紙もあればカルト映画にでも出てきそうな巨大な宗教書の原語訳本もあった。ふと目をやった先には異端文書とされる「ユダの福音書」まで置かれている。

聞こえるのは自分の呼吸のリズムと、部屋の隅に置かれた大型の振り子時計が刻むリズム。加えて時折何処からか聞こえてくるぱちっという何かがはじける音が耳障りだ。黒塗りの重厚なクローゼット

の後ろに何かいるのか、確かめる術もないまま恐らくネズミだろうと当たりをつけた。

濃い煙草の匂いが鼻を衝く。見れば机の上の灰皿には数本の吸い殻が残っていた。

（ホント、分かんないことだらけだ・・・）

この部屋の唯一の光源である天井の白色灯が、蓮の色素の薄い肌をより一層白く見せる。腕まくりしたワイシャツの袖から除く細い腕が無性に気に入らなくて、慌てたように袖を下した。

ギ、ギイ・・・

礼拝堂のときと同じ、耳をふさぎたくなるような悲鳴を上げて、立てつけの悪そうなドアが開く。ソファからさっと立ち上がりそちらを見れば件の人物、時東当夜が何やら大きなブリーフケースを持って立っていた。

「待たせて申し訳なかったな。多少準備に手間取ったのだ」

「いえ、大丈夫です・・・」

神父が立ち上がった蓮に手で座るように勧め、蓮もそれに従っておずおずと腰を降ろした。緊張のせいかな無意識にシャツの袖をいじる。それを読み取ったのか神父は穏やかな（彼なりのではあったが）口調で

「そこまで気を張る必要はない。むしろ今は落ち着いて話をするべきだ」

と言うと書斎の棚から茶器を取出し、慣れた手つきで紅茶を二杯用意して一つを蓮の前のテーブルに差し出した。蓮は小さな声で感謝を述べティーカップをほんの少し自分の方に寄せたが、それを口に運ぶ気にはなれなかった。

神父はその様子を見ながら自分の分の紅茶を口に含むと蓮の向かい、テーブルを挟んで反対側のソファに深く座り込む。俯いたまま動きを見せない蓮に、神父はもう一口紅茶を飲むと口を開いた。

「・・・里宮先生のことはこちらの伝手で聞いている」

「そう、でしたか・・・あなたも牧師のことを先生と呼ぶのですね？」

「彼は私の過ちを正してくれた、尊敬に値する人物だ。それに、その人間性はおそらく君の方が詳しいのではないか？」

同一の師を喪った者同士としてのシンパシーがあつたのかははっきりしない。

それでも目の前の男が確かに里宮牧師を敬愛していたこと。そして自分と同じように彼の死を悼んでいるのだということを理解し、同時に彼に対する緊張も解けていく。

ここに来てようやく蓮は卓上のティーカップを手に取り、程よく冷めたストレートで唇を濡らした。

「・・・さあ、感慨に浸るのはここまでだ。君にも私にも確かめたことが山のようにあるだろう。まずどうやってこの場所に行きついたのか。まさか当てずっぽうで来たわけではあるまい？」

「ええ。僕にも確かな確信があったわけではないのですが……きっかけは、あなたが先生に対して送った一枚の手紙でした」

その場の空気が一瞬にして変わる。

まるで前後の脈絡がないように思われるかもしれないが、現状彼らに馴れ合いをするつもりはないのだろう。蓮は脇に置いていたシヨルダーバッグから例の手紙を取り出す。

「なぜ不信を抱いたかと問われれば直観としか答えられないのですが、それでもこの手紙が文面通りとはまた別の“近況報告”に思えて仕方なかったんです」

「ほう。で、君はどう読み取ったのかな？」

試すような言葉に蓮は朗々と続けていく。

「最初のうち僕は先生とあなたが聖職者であるからこそ、もし暗号じみたものを使うとするなら宗教とは関係のない語彙を用いるだろうと先入的に除外していたんです。それを取り払うのに役に立ったのが、手紙に着いた『オリーブの匂い』だったんですよ」

「オリーブの香水など珍しいものではないだろうに。偶然についたという可能性は？」

「それもちろん否定はできませんが、ある日ふとした拍子に気付いたんです。」

オリーブという木が、主にキリスト教の聖典とされる新約聖書の中でどんな役割を持つのかを……」

オリーブから採取される香油は、聖書の福音書の中では聖なるもの

として登場する。そもそもキリストのもとであるメシア信仰のメシア（救世主）というのも『油を注がれたもの』の意である。そして以前も述べたようにイエスの受難の始まりと言える場所もゲツセマネ、オリブ山である。

「そのことを考えてもう一度聖書をもとにして手紙を読んでみたら・
・驚くほどに該当する語句がありました。まずは『都会の群集』
ですが、福音書の中でいう群衆とは基本的にイエスを迫害する側の民衆を指します。都会というのをキリスト教の総本山であるローマ教皇庁であると考えると、これは離反した先生を疎んでいるはずのカトリック司祭たちのことではありませんか？」

「・・・・・・続けなさい」

「同様の言い回しで、福音書の中でイエスに対して非好意的であった者たちを指す代名詞で司祭たちを表していると思いました。そして多分ですが先生を兄、僕を甥として表現し彼らが僕たちを狙っているということ。その行方をあなたから執拗に聞き出そうとしている状況を指しているのだと」

「・・・・・・」

「そして最後にこの教会にあなたがいると推測した理由ですが、これは追伸の箇所がヒントになっていたんです。ここで再びオリブが登場するのですが、イエスが受難前に唯一自身の苦しみをあらわにしたゲツセマネは別名をオリブ山と言います。その地理関係は聖地エルサレムの東側に位置し、ケデロンの谷を隔てて市街に接している」と

「つまり追伸に書かれていた教会の杯とはこの谷にあたり、先生がいた琴木教会をエルサレムに当てはめることで、犀油山を隔てた対極の市街をここ端谷町に指定したんです。……違いますか？」

途中から目を閉じて蓮の推理を聞いていた時東はそのすべてを聞くと小さく笑みを浮かべる。

「やや確実性の薄い推理ではあったが、見事ここにたどり着いたのだから及第点というべきか？」

「ではこちらから一つ質問なのだが、第一前提としてどうやって私の存在を知った？君と顔を合わせたことがるのは先生の孤児院へ君を引き連れて行ったつきりだったはずだが？」

「それは、その……」

その質問に蓮は言葉を濁らせる。

それもそうだろう。時東の名前を初めて知ったのは”あの夢”の中での話だ。自分でもなぜあの時あの啓示じみたものを信じれたのか不思議だというのに、今日会ったばかりの人にそうそう言えるものではない。

そんな蓮の心情を感じ取ったのか時東は

「ああ、皆まで言わなくていい。大方、”夢の啓示”というやつだろう」

「…何故それを？」

「先生から聞かなかったか？私もかつては？魔師として常識に考えれば荒唐無稽な存在を相手取っていた。悪霊やら怨念やら非科学的

なものをな。暗示、夢操作などその中ではむしろマシな方だ。君も否応なしにこちらの世界にどっぷり浸かりこむことになるのだから、今のうちに高尚な常識とやらは捨てておいた方がいい」

皮肉ったような物言いだ。

事実この期に及んでも蓮は悪魔やら魔術的なものに対する常識に則った不信を拭い切れてはいなかった。しかしシスター・ルチアとの一件然り、夢の中で知らされた人物が今こうして目の前で紅茶をすすっている状況に、彼がここ10年で培ってきたものではこの先に進めないことも実感し始めていた。

「何はともあれ、さっきの君の推理は正しい。悪魔の因子を持つ少年を匿った者がいる問う噂が司祭たちの間に囁かれるようになってから、私はもう一度カトリックの教会に戻り、その内情を先生に伝え続けていた、というわけだ。まあ一度聖職から離れた身、奴らの信頼を得るには足らなかったが過去に腕利きの？魔師であったことと、君を匿っている行方の掴めない里宮牧師の数少ない旧友であることで何とか居場所を確保することはできた」

それでも刺客の存在を察知できなかったがね。そう続けた時東の目には深い後悔の色が見て取れた。友であり師とも仰いでいた人物を亡くした責任の一端を感じているのだろう。

空になったカップをそつと机の上に置きながら、一呼吸おいてから蓮の真紅の瞳を見つめる。

「ところで君自身はどう思っているんだ？」

「どづいことですか？」

「自分が悪魔である、もしくはそうかもしれないという事に関してだ。牧師の精霊論を聞いているのなら何らかの力を得られるかもしれないということも知っているだろう？」

ボーン、ボーン、ボーン、

蓮の斜め後ろに置かれた大型の振り子時計が鳴りはじめる。

「魔術とかそういうものの存在は… まあ認めてますでも、僕は力があっても誰かを傷つけようなんて」

「そんなことは関係ない」

「え？」

「ヨハネの手紙3：8、罪を犯すものは悪魔に属す。悪魔は初めから罪を犯している…。一度でも悪魔だと認識された以上、その存在は罪の始まりだということだ」

「っ！ そんな、理不尽な」

「聖書絶対主義者の言い分なんてそんなものだ」

あまりの言い様に蓮は肩を落とす。

「今時では美談にもならないが、あらゆる存在には意味がある。君が悪魔だとすると、与えられた負の宿命もまた必然的に伴うということだ。それは到底人間に背負うことのできるものではないだろう。しかも突きつけてくるのはただのシステムたる”秩序”だ。悪魔である以上感謝など期待できない。あるのは迫害。」

それでも君は、自分が何者か

知る覚悟があるか・・・」

「時東神父？」（後書き）

時東神父が思いのほか雄弁になってしまいました。キャラクターが独り歩きするとは、こういうことかと痛感しております。

ちなみに作中の教皇庁は中世的な考えを維持する保守派として描いています。現実にはもっとリベラルで寛容なのが主流となっているので、ご注意ください。

「恋愛感情？」（前書き）

現在編集作業に追われております。完成後にはタイトルの（作業中）タグを外しますので、出来ればそれまでお待ちください。

10/24 完成

夜中に構想が湧いて、そこから書き続けたため思いの外早く出来上がりました。この方針で進行して行きたいと思います。

「恋愛感情？」

第三十九部 恋愛感情？

（僕自身の考え、か・・・）

時東からの問いにその場で答えを見つけ出すことのできなかった蓮は、冷めきつた紅茶もそのままに教会を後にした。今更ながらに自分の中で答えがまとまっていけないことに気付いたのだ。帰りのバス、行き以上には人気ひとけの増えた車内で揺られながら彼の脳内には帰り際の時東の言葉がリピートされていた。

『踏み出すにしろ引き返すにしろ、答えは慎重に出した方がいい・・・』

一度選べば二度とは引き返せないのだから。

例えばそう、何に変えても守りたいものがあるのなら・・・

あるいは悪魔の力も救いになるかもしれないな』

覚悟ができたならまた来るがいい、そう言って時東は蓮を見送った。

その言葉を聞いた蓮は一瞬、由香と香奈恵の顔を思い浮かべた。こんな自分を氣遣ってくれる優しい二人の笑顔を。しかし次の瞬間にはそんな筈はないと頭を振る。確かに彼女たちには感謝もしているし、その存在の大きさは理解していた。だからといって『何に変えても守る』などという大言壮語を吐ける自信はない。そんな理屈で想いを捻じ曲げてしまったのである。

（でも、それだけじゃない。僕はきつと怖がってるんだ・・・）

今まで自分の知らなかった世界に少しずつ囚われていくのを感じ、突きつけられた選択に不安が募る。そもそも自分が確かに【普通】の人間であるかも覚束ない。むしろあの夜のことを思えばそうではない可能性の方が高いのだ。

自分の存在の不透明さ、脆さ。

重苦しい虚脱感と息苦しさに襲われる。

思っているより引きずってるんだな、と自嘲的な笑みを浮かべると静かに目を閉じて窓ガラスに頭を預ける。そして肺の中の淀みをそっと吐き出す。シャツの中で十字架のペンダントがカチャリと音を立てた。

雨が降っていた。

窓には昨夜からの冷氣で霜が降り、パツと見では外の様子をうかがい知ることはできない。それでもアパートのコンクリート製の外壁に打ち付ける雨音が、その激しさを内側の住人へと教えていた。

「・・・寒い」

蓮は布団にくるまったままの状態で呟くと、一度ため息をついてからベッドを這いだす。悪天候の為か、体の節々と頭が痛む。それでもゆっくりと立ち上がってカーテンを開き、伸ばしたフリースの袖で窓を拭えば、暗く曇った空が泣いていた。窓に当たっては流れ落ちていく幾つもの雫は、そこに映る自分の顔を伝っていく。

泣いているのは、どちだろう・・・。
ぼんやりとそんなことを考えてみるも間もなく『雨は降るものだ』
と思い直す。

「馬鹿みたいだな・・・」

本当に、何を考えてるんだろう。軽く頭を振り、緩んだカーテンを止め紐で結んだ。

ピピピ、ピピピ・・・ピピピピピ！

持ち主よりも遅起きな目覚まし時計が喚き立て始めたのを聞いて、蓮は窓から離れ時計の裏のスイッチを落とす。時計の針は六時ちよつと過ぎを指している。それをベッドの脇に戻すと、めくれたシーツを直して部屋を後にした。

時東神父との談話から早くも二週間の時が流れていた。あれ以来彼らの間にこれと言った交流はない。九月も後半に入り、日に日に寒さを増していく。蓮の通う学校でも既にセーターやベストを着用して登校する生徒が増えていた。更に比較的自由な校風は、無地に限定したものではあったがパーカーの使用も認めており、他の一部の生徒に交じって蓮もまた真っ白なパーカーを黒の学生ズボンと合わせて通学している。

蓮は朝食をとり終わると市販の鎮痛剤三錠を水道水で飲み下した。

『・・・今日のニュースです。昨日十九日未明、〇〇県？市在住の会社員の男性が自宅の玄関前で頭から血を流し倒れているところを地元住民が・・・』

居間のテレビは変わり立てもしないニュースをキャスターが延々と読み連ねていく様が映し出されている。蓮はそれをテーブルに肘をついた姿勢で眺めていた。

そして画面の右上に表示されている小さな時報が六時半を示すと、蓮は手元に寄せていたリモコンで電源を切り、ドアの鍵をかけたことを数度確認してから通学路を歩き始めた。

激しく振り続ける雨は留まることを知らず、お昼の時間を迎えるにあたつても尚その勢いを保っていた。クラスメイトのうち数人は登校時に雨をしのぎ切れなかったらしく、ジャージの体操服を着ている者もいた。

「すごい雨だね」

「うん、まるで嵐みたい・・・」

蓮の机で一緒に昼食をとっている少女、四条由香はそんな中でも無事だったらしく、普段通りの制服にベージュのセーターを着て母親お手製のお弁当を口に運んでいた。蓮は外の景色から目を離すと購買で買ったカレーパンをかじる。特に会話が弾んでいるわけではないが後でクラスメイト達にからかわれるのは必然だろう、、主に由香が。

事実待ちきれなかったのか、いつも由香と談笑しているグループの女子の一人が窓際で静々と食事をとっている二人のもとにやってきた。

「お、なんだか幸せそうだね由香ちゃん？」

「・・・？」

「だからあ、里宮君と一緒に食事してる由香。さっきからなんか嬉しそうだよ？」

「な、何言ってるの！？そんなわけ、いやでも嫌ってわけでもないんだけどさ」

顔を赤くして言い訳？をする由香。蓮はその間も黙々とカレーパンをかじり続けている。

「はあ、、、由香ったら、付き合ってるんだからもっと堂々とした

「いいのに・・・」

「え？誰と誰が付き合ってるの？」

「えつて、由香と里宮君のことでしょ」

「・・・え？えええええ！？」

由香の叫び声が教室に響き渡る。一瞬クラス中がこちらを向いたが当事者の姿を確認するとまたか、といった表情でそれぞれの会話に戻っていった。相変わらずクラスメイトと交流の深くない蓮には知る由もなかったが、由香が蓮とのことで他の女子にからかわれ、それに対して由香がパニックになるのは日常の光景と化していたのだ。

「な、なんで私と蓮がこ、恋人同士ってことになってるの？」

「いやいや、里宮君がしばらく学校に顔を見せないかと思えば由香が彼の病院にお見舞いに行ってたって聞くし、最近じゃこうしてよく一緒にお昼食べてるじゃない？それに、クラスの子と喋ってるどころなんて数えるほどしか見てない里宮君と、唯一由香だけが仲良さ気なんだもん。これは何かある！って思われても仕方くない？」

由香はその言葉を受けて既に赤かった顔をさらに赤くし、そつと蓮の方を見してみる。カレーパンの最後の大切れを放り込み、両頬をぷくりと膨らませた蓮と視線が合う。あ、かわいいと少女の心臓が跳ね上がった。

「はぁ・・・これでもまだ付き合っていないとか、あんたらは小学生か・・・。ねえ里宮君」

「・・・ん？何ですか？」

「里宮君つてさあ・・・好きな人っている？」

「ちよ、ちよつと、何聞いているのよ!？」

突然片思いの相手にとんでもないことを尋ねはじめた友人に思わず声を大きくした。今度はこちらを振り返ることさえしないクラスメイト達。流石、よくわかつている。

「つつたつて、気になるでしょ？彼の好きな人」

「そりゃ、そうなんだけどさ・・・」

ふと蓮に視線を戻してみれば紙パックの牛乳を手に、思ったより悩んでいる様子だ。

「好きな人、ですか。それって小説とかの中で出てくる『恋愛感情』としてってことですよね？」

「え、ああ、うん。そうだけど・・・」

ここまで真面目に考え込まれるとは思っていなかったのか由香の友人もやや戸惑う。そこまで考え込まなくても、そうアドバイスしようとした女子に彼が返した答えは、

「分からないです、ね・・・」

「え？」

「本とかで読んだときには、とっても大事に思うことってイメージだったんだけど。多分それだけじゃないんでしょう？だとしたら、僕にはまだわかりません」

「えっと・・・誰かを好きになったことってないの？」

「ない、ですね」

「恋愛感情？」（後書き）

10/23

内容変更作業中

10/24

この先数話間で蓮と由香の関係や心の動きを書いていきたいな、と思います。

改変（作者よりお詫び） 11 / 3（前書き）

本編ではありませんが、継続して読んでくださっている方には一応読んでおいていただきたい『通知』です。

ネタバレ注意の箇所はそれぞれの判断にお任せします。

改変（作者よりお詫び） 11 / 3

前回あげた最新話である「刺客」で展開を急ぎ過ぎてしまい、激しい自己嫌悪に襲われている作者です。そこで僕自身の精神衛生と作品の向上の為に「刺客」の内容を大きく変更し、タイトルも違う形に変えようと思います。多少更新に時間がかかるかもしれませんが。

読者の方にはご迷惑をお掛けすることをここにお詫び申し上げます。

10 / 25

継続してお読みになって下さってる方には特に申し上げておきたいことです。

もう既にお気づきになっているかもしれませんが、現在大規模な再編作業を行っております。と言いますのも先日作者が拙作を読み返している際に「蓮があまりにも神秘の類から目を背けすぎている」と感じた為です。もちろん極端な受け入れ方するのは望むところではありませんが、このままではいつまでたっても『覚悟』というテーマに辿り着けないのです。そこで大まかなストーリーはそのままにしつつも、積極的に神秘描写とそれに対する蓮の反応をいれることにしました。

つきましては（再編中）タグをタイトル及び作品情報に加えたうえで再編作業を続けたいと思います。最新話の更新が遅れますことを、ここにお詫び申し上げます。

（できれば編集終了後も読んでいただければ光栄の極みでございます）

あと感想板なんかで励ましの言葉があれば尚嬉しいです

11 / 3

再編作業の方が大方終わりましたので、そろそろ次話の投稿を開始したいと思います

?以下、弱ネタバレ注意(今後の方針)
-

今回の改編で主に主軸に添えたいと考えているのは蓮の内面の変化です。既に読んでくださっている方にはわかると思いますが、『覚悟』というワードを一つの中心としてその形成過程を的確に表せたらと考えております。

そしてもう一つは物語全体に関わってくるのですが、蓮の『悪魔としての心』です。一概に残酷なものというわけではなく、どちらかというと凍りついたイメージでしょうか。既にその鱗片は今まで話の中で表現してきたつもりなのですが。

まあこの辺の描写を盛り込んだうえで、先に進めたいと思っております。

「恋愛感情？」（前書き）

ユニーク数が300を超えました。書き始めた当初は自分の中のイメージを形にするだけのものだったのが、今ではそれを考えるのが楽しみという具合です。今後ともお付き合いいただければ幸いです。

「恋愛感情？」

第四十部

雨の日の通学路、正門から続く坂道は色とりどりの円形で彩られていた。空中から除けば存外綺麗に見えるであろうそれも、中に入ってしまうと鬱陶しい渋滞でしかない。高い湿度に加えて隣人の傘に付着した雫が時折飛んでくるのだから不快指数は半端なものではないだろう。

ただ全生徒がこの荒波にのまれて下校するわけではない。この道を通るのは基本的に地元からの登下校者で、電車通学者などは比較的使用者数の少ない西門を利用する。蓮や由香もこちらの部類に入る人間だった。

「雨って嫌だよね。ジトジトするし、傘差してても靴の中濡れちゃったり・・・」

「それに頭も痛くなるしね」

「あれ、蓮って偏頭痛もちだったっけ？」

「うん。今日も朝からずきずきしてるよ」

蓮は黒の、由香はピンクの傘を差し、話をしながら校門をくぐる。雨天ということもあって運動部の部活も休みらしく、通学路にはいつもより少し多めの生徒の姿が見られた。

「それって、前みたいな頭痛じゃないよね？体質とか言ってた・・・」
「あれとは別だと思うよ。あれはあくまでも一時的なものだったから」

心配げに顔を曇らせて蓮の顔色をうかがう由香に、問題ないよと続けておく。それに安心したのか由香は話題を先日見たドキュメンタリー番組の話に切り替えた。なんでも迷子の子犬が長い旅の果てに自力で飼い主のもとに戻ってきたという話らしい。

「すごいよね。言葉も通じないのに、お互い分かり合ってるみたいでさ」

「実はホントにそうかもしれないよ」

「え？蓮ってそういうの信じる方なの？」

「んん、言ってみただけ」

「そっかぁ。・・・私はね、信じてるよ」

蓮は隣を歩く少女の顔にふと目をやる。

それに気づいてこちらを見る目は優しい光を蓄えていた。

「そうなの？」

「うん。心ある生き物は皆どこかで分かり合えるんだって、そう思うんだ」

そう話す由香がとても眩しく思えて、蓮はそつと前に視線を戻す。強まる頭の痛みとは別に、胸の中で蜷局とくろを巻くような不快感が蠢く。

視界の一部を遮る自身の黒い傘が時折吹きつける風に揺れた。

いつの前か到着していた駅の屋根の中に入り、傘を閉じて水を切った。

そして改札をくぐるとき

「悪魔に心はあるのかな・・・」

小さな呟きは入ってきた電車の騒音に掻き消された。

帰り道の途中の十字路で蓮と別れた由香は、残り僅かな家路をたどっていた。傘で塞がった手とは反対の手で、肩にかかったスクールバッグを掛け直す。

歩道の白線の内側には溜まった雨水が、枯葉で少し詰まった排水溝に流れ込んでいる。先日まで道路工事で寸断されていた場所では、新しいアスファルトが水を弾いて幾つかの玉を作っているのが見える。

（人を好きになったことがない、か…）

傘の縁を伝い落ちていく雫を眺めながら、由香はお昼の蓮の言葉を思い出していた。

それが全くの予想外だったというわけではない。今までの付き合いの中で蓮には未だに感情面が乏しいこと。正確にはそれを表に出すことが苦手、もしくは避けている傾向にあることは分かっていた。

蓮には家族がない。

家族のように愛してくれる者も、もう…。

大丈夫？と問いかければ、決まって笑顔で頷く蓮。そんな彼が病院で見たあの涙でさえも、きっと本当は由香と香奈恵のものだったのだろう。

あの時彼に抱きしめられ、その腕の中で涙を流したのは由香。そんな彼女を抱きしめ、その肩に雫を落としたのは蓮。

しかし、何故だろうか。

制服のブラウス越しに感じたはずの暖かい感触が、

全く思い出せない。

(……寒くなってきたなあ)

風に煽られて舞い込んだ雨粒が手の甲で弾ける。
由香は不意に訪れたその冷たさに身を竦めた。

「ただいま……」

じとりと湿りを帯びたノブを回し、蓮はようやく帰宅した。

後ろ手で玄関の鍵を閉める。デパートで購入した2000円の白いスニーカーには雨が浸み込み、靴下にまで及んでいる。ここまで歩いてくる間も着いては離れる布の不快感に耐えてきたのだ。バッグの中からタオルを取り出すと濡れたバッグを出来るだけ拭き、そつと床に降ろす。少しの引っ掛かりを生じながらもスニーカーを脱ぎ、靴下も脱いで裸足になると、蓮は静かに洗面所へと向かった。

ガラガラ、グオングオン…

洗濯機の回転音を聞きながら、蓮はパジャマに裸足のままソファに座っていた。両足を赤子のように屈め、両腕でそれを抱くようにして顔を落とす。朝から続いている偏頭痛が鐘の音のように反響し、身体全体が一つの音叉のように震えている気がした。組んだ両手を強く握り合わせ、震えが治まるのを待つ。

身動き一つせず、呼吸も輦め、ようやく痛みが引いてきた。気付けば機械の駆動音は鳴りやみ、再び雨の音が聞こえていた。定まらぬい焦点を自分の正面、電源の入っていないテレビの真っ黒な画面に向ける。鏡のようにも見えるそれは、ソファの上の彼の姿を黒く映す。

天上の蛍光灯の反射で辛うじて灰色を残している映像を見ながら、蓮はふと思った。

（心…、好きっていう想い…。それが分からないのは、何故だろう…）

たった数時間前、自分に投げかけられ答えが出せなかった質問、疑問。その前提ともいえる『感情』の問題。抱え込んだ腕の中からそっと顔を上げると胸元に掛かった十字架をピンと指ではじいてみる。銀製のそれは所々黒くくすみ、記憶の中、先生から始めて貰った時の輝きは既に薄れていた。

（そういえばキリスト教にも『隣人愛』なんてのがあったな）

まだ先生が生きていた頃、蓮が小学校に通い、あの教会が帰る場所であった頃。週末の朝、先生が取り仕切るミサの中で行う”説教”で聞いたことがあった。

思い出せば彼の九歳の誕生日にこの十字架のペンダントを貰ってから、入浴や水に触れることがない限りは外した覚えがない。カドは摩耗し、幾分丸くなった印象を受けるが同じだけ表面には大小の傷がついていた。

（先生を失った時、結局僕は泣くことも起こることもできなかった…。

あれ程僕を思ってくれていた人を亡くしたのに、なんて冷たい人間なんだろ…）

朝からの頭痛はもうない。

それが却って自分の存在を希薄にしている気がして、蓮は再び抱え込んだ両腕に爪を立てた。

しかし得られるはずの感情は、^{いたみ}直ぐに麻痺して消えていく。

「あ……そっか……僕

——【人間】じゃ、なかったんだっけ——
「。」

締め切ったカーテンの端からは、もう光は差し込んでいない。
代わりに異様なほど白い蛍光灯が崩れそうな體からだを照らしていた。

「恋愛感情？」（後書き）

ああ、難しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4226v/>

悪魔が奏でる悲愴曲(仮)

2011年11月17日20時27分発行